

宮城県仙台市

郡山遺跡 30

— 平成21年度発掘調査概報 —
郡山遺跡・大野田官衙遺跡



2010.3

仙台市教育委員会

『郡山遺跡』30正誤表

	誤	正
卷末報告書抄録 大野田官衙遺跡の「コード 遺跡番号」	1361	1566

宮城県仙台市

郡山遺跡 30

— 平成21年度発掘調査概報 —
郡山遺跡・大野田官衙遺跡



2010.3

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡の発掘調査事業は、昭和55年の国庫補助事業による確認調査を開始して以来30年目となりました。平成18年7月に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定され、今後の歴史公園を中心とした街づくりに大きな一歩を踏み出すところです。30年のながきにわたり、発掘調査の継続が出来ましたのも遺跡の究明にご助言をいただいた先学の諸氏や、地元の地権者の皆様からのご協力があったからと感じております。

本年度は郡山遺跡の個人住宅建設に伴う調査と、郡山遺跡との関連が考えられる大野田官衙遺跡での調査を実施し、その成果をまとめたものです。郡山遺跡の調査では、方四町Ⅱ期官衙北辺の大溝を確認し、住宅密集地の中でも遺構が残っていることが明らかとなりました。大野田官衙遺跡では官衙中央部と、官衙の西辺、南辺でその解明に進展があったものと考えております。

なお本書の刊行前に調査開始以来、ご指導を賜っていた工藤雅樹委員長（「郡山遺跡・陸奥国分寺等調査指導委員会」）の訃報を受け、哀悼と感謝の意を表すものです。これまでの委員長からの指導を旨に、遺跡の解明と保護にむけて努力を誓うものであります。

今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

例 言

1. 本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、大野田官街遺跡の範囲確認調査に対応した概報と個人住宅建築に対応した郡山遺跡の調査報告書である。
2. 本概報は調査速報を目的としている。執筆は以下のように分担した。
 - 第1章 長島栄一
 - 第2章 森田賢司、森田義史
 - 第3章 長島栄一、森田賢司、齊藤義彦
 - 第4章 長島栄一遺物写真撮影は森田賢司、佐々木匠が、遺物観察表、遺構記録表の作成は森田賢司、齊藤義彦、森田義史、図版作成は廣瀬真理子、菊地貴博、千葉恭彦、図集は長島栄一が行った。
3. 本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 平面図に示した座標系については、第2章の図は任意に設定した ($X=0$ 、 $Y=0$) を通る磁北線 (1984年頃の偏角で、真北から $6^{\circ}44'7''$ 西傾) を基準にしたものであり、第3章の図は平面直角座標系X (旧測地系) である。
2. 文中および図中の方位は真北を基準としている。但し、第2章の図のみ磁北を示す。
3. 遺構の略称は次のとおりで、遺構番号は遺跡全体の通してある。但し、ビットは除く。

SA : 柱列	SB : 捩立柱建物跡	SD : 溝跡	SI : 穂穴住居跡	SK : 土坑
SX : 性格不明遺構	P : ビット			
4. 遺物の略号は次のとおりで、登録番号は遺跡全体の通してある。

A : 繩文土器	B : 弦生土器	C : 上師器 (非クロ調整)	D : 士師器 (ロクロ調整)
E : 須恵器	F : 丸瓦・軒丸瓦	G : 平瓦・軒平瓦	I : 陶器
L : 木製品	N : 金属製品		
5. 土色については「新版標準土色帖」(小山・竹原1989)を使用した。
6. 表中の () が付いた数字は図上復元した推定値である。
7. 本書中の地形図は、国土地理院発行の1:25000『仙台西南部』、『仙台東南部』と1:10000『長町』、『西多賀』の一部を使用している。

目 次

第1章 はじめに

I. 調査体制	1
II. 調査計画と実績	1
1. 調査計画	1
2. 調査実績	2

第2章 郡山遺跡

I. 第194次発掘調査	
1. 調査にいたる経過と調査方法	4
2. 基本層序	4
3. 遺構と遺物	5
4. まとめ	7
II. 第195次発掘調査	
1. 調査にいたる経過と調査方法	16
2. 基本層序	16
3. 遺構と遺物	17
4. まとめ	19
III. 第197次発掘調査	
1. 調査経過	24
2. 調査方法	24
3. 基本層序	25
4. まとめ	25
IV. 第198次発掘調査	
1. 調査経過	26
2. 調査方法	26
3. 基本層序	27
4. 遺構と遺物	27
5. まとめ	32
V. 第199次発掘調査	
1. 調査経過	40
2. 調査方法	41
3. 基本層序	40
4. 遺構と遺物	41
5. まとめ	41

第3章 大野田官衙遺跡

I. 大野田官衙遺跡の調査計画と実績	
1. これまでの調査経過	45
2. 調査計画	46
3. 遺跡の概要	46

4. 調査方法	50
II. a区の調査	
1. 調査概要	51
2. 基本層序	51
3. 遺構と遺物	51
4. まとめ	51
III. b区の調査	
1. 調査概要	55
2. 基本層序	55
3. 遺構と遺物	55
4. まとめ	59
IV. c区の調査	
1. 調査概要	62
2. 基本層序	62
3. 遺構と遺物	62
4. まとめ	64
V. g区の調査	
1. 調査概要	68
2. 基本層序	68
3. 遺構と遺物	68
4. まとめ	72
VI. h区の調査	
1. 調査概要	75
2. 基本層序	75
3. 遺構と遺物	75
4. まとめ	81
VII. j区の調査	
1. 調査概要	82
2. 基本層序	82
3. 遺構と遺物	82
4. まとめ	82
VIII. jk区の調査	
1. 調査概要	85
2. 基本層序	85
3. 遺構と遺物	85
4. まとめ	85
第4章 総括	
I. 郡山遺跡	88
II. 大野田宮衙遺跡	89

第1章 はじめに

I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課長 田中剛和

整備活用係 主幹兼係長 吉岡恭平、主査 木村浩二、主事 長島栄一、主事 宮田晋、

主事 森田賢司、文化財教諭 工藤慶次郎、文化財教諭 斎藤義彦

調査係 主査 平間亮輔、主事 廣瀬真理子、主事 森田義史、文化財教諭 佐藤正弥、

文化財教諭 佐々木匠、文化財教諭 茂地貴博、臨時職員 千葉恭彦

調査担当職員 ○郡山遺跡 長島栄一、森田賢司、森田義史、佐藤正弥、佐々木匠、茂地貴博、千葉恭彦

○大野田官衙遺跡 長島栄一、斎藤義彦、森田賢司、平間亮輔、廣瀬真理子

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 工藤雅樹（福島大学名誉教授 考古学・故人）、副委員長 今泉隆雄（東北大学文学部教授 古代史）

委員 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授 考古学）、進藤秋輝（東北歴史博物館館長 考古学）

桑原滋郎（多賀城市文化財保護委員会会長 考古学）、須藤 降（東北大学名誉教授 考古学）

宮本長二郎（別府大学非常勤教授 建築学）、渡部育子（秋田大学教育文化学部教授 古代史）

発掘調査にあたり次の方から協力をいただいた。

協力 調査にあたり宮沢駅周辺区画整理事業地内の地権者より、協力を得たことを感謝申し上げる次第である。

また地権者の方々のほかに、NTT東日本財務部不動産企画室、NTT東日本宮城支店総務課、大野田たんぽぽホーム、社会福祉法人仙台市手をつなぐ育成会大野田はぎの苑からも協力を得た。

II. 調査計画と実績

1. 調査計画

平成21年度に計画された本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画され、郡山遺跡、大野田官衙遺跡を対象としている。このうち郡山遺跡については、個人住宅の建築に対応した調査の報告である。郡山遺跡では第5次5ヶ年計画終了後に、平成17年度から補足調査を実施してきたが、昨年度から郡山遺跡の西南15kmにある大野田官衙遺跡で、郡山遺跡Ⅱ期官衙と同時代の官衙が発見された。その範囲と性格究明が急務となつたため、郡山遺跡の補足調査を休止して調査を実施した。さらに平成18年度以降実施していた陸奥国分寺跡の整備計画策定のための調査も、今年度は中止し、大野田官衙遺跡の調査に集中する調査計画を立案したものである。今年度の内容については平成21年3月4日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ、了承を得ている。

発掘調査総経費は37,695,000円、国庫補助金額18,847,000円の予算で計画し、当初は大野田官衙遺跡発掘調査に8,462,140円、郡山遺跡の個人住宅対応に5,604,860円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,430,000円、仙台城跡に16,198,000円とした。これによって、本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

調査次数	調査地区	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙中心部など8箇所	400m ²	4月～12月 個人住宅
大野田官衙遺跡	官衙内中央	1000m ²	4月～12月 範囲確認

表1 平成21年度発掘調査計画

2. 調査実績

上記の予定した発掘調査では、年度途中で大野田官衙遺跡の調査地点の変更に伴い、予算の変更が必要となったため、郡山遺跡内での個人住宅への対応は、「仙台平野の遺跡群」として発掘調査を実施した。報告については5箇所の調査の詳細を当初の予定通り本書に掲載したものである。

大野田官衙遺跡については、当初計画したa区からf区までのうち、区画整理事業の進捗からd、e、f区の3箇所をはずし、あらたにg、h、i、j区の4箇所を追加して調査を行った。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第194次	南方官衙東地区	32.4m ²	4月20日～4月28日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第195次	南方官衙西地区	20m ²	6月22日～6月24日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第197次	II期官衙外溝東辺	18m ²	11月30日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第198次	II期官衙東部	30m ²	12月2日～12月11日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第199次	II期官衙大溝北辺	70m ²	12月14日～12月18日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
大野田官衙遺跡	官衙内a,b,c,g,h,j区 官衙外i,j区	689m ²	4月20日～12月9日	範囲確認	

表2 平成21年度発掘調査実績

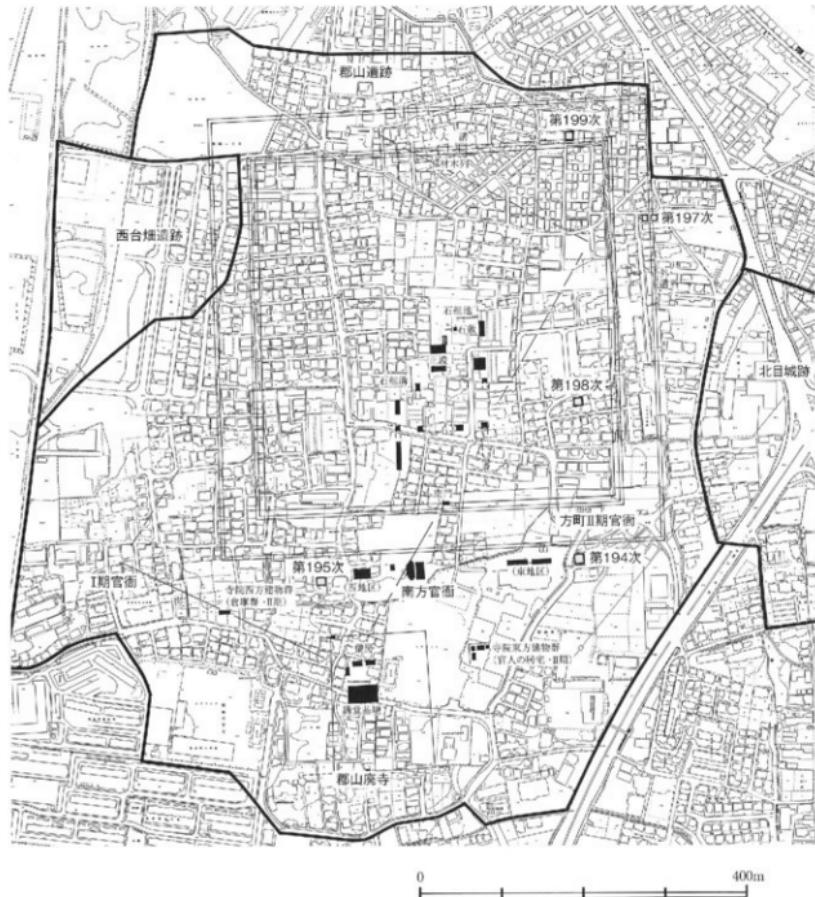


第1図 調査遺跡位置図

第2章 郡山遺跡

郡山遺跡では、補足調査として方四町Ⅱ期官衙域中央部などでの調査を予定していたが、大野田官衙遺跡での性格究明等が急がれたため、今年度予定していた調査を休止した。しかし、個人住宅の建築に伴って発掘調査の必要があったため、第194次、第195次、第197次、第198次、第199次調査を実施した。

調査は「仙台平野の遺跡群」において実施されたが、調査の成果が上がったので、これまで通り「郡山遺跡」の調査報告書で詳細を載せている。以下にそれらを報告することにする。



第2図 郡山遺跡全体図

I. 第194次発掘調査

1. 調査にいたる経過と調査方法

今回の調査は平成21年3月3日付で、地権者より提出された、個人住宅建築工事に係る発掘届に基づき実施した。確認調査は平成21年4月20日より着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

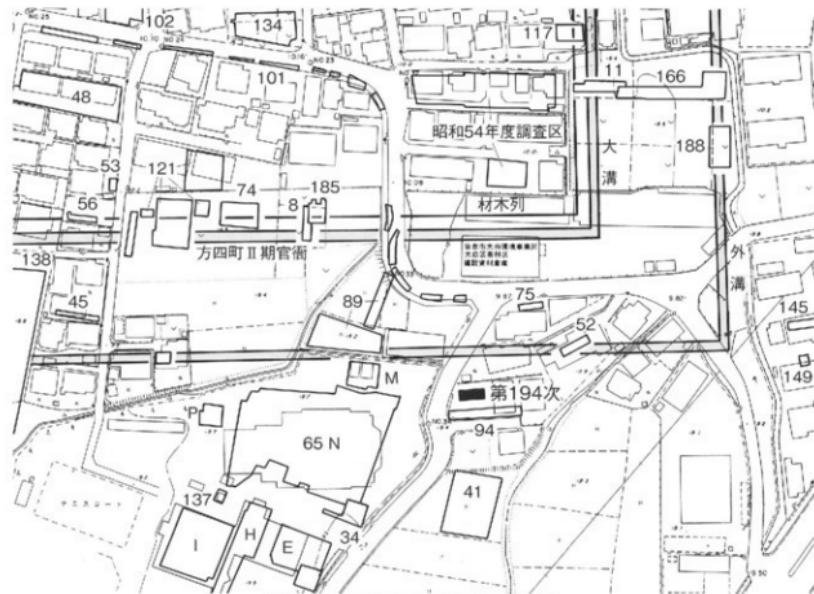
調査区は南北3m×東西12mに設定し、重機により盛土およびI層を掘削している。II層上面で人力による遺構検出作業を行い、検出状況を写真に記録し、掘削後に写真、図面による記録をした。

2. 基本層序

調査地点の盛土は80cm~1mで、基本層は3層に大別された。I層は耕作土であり、厚さは約20cmである。II層は明黄褐色砂質シルトで、上面が遺構検出面である。III層は明黄褐色粘土質シルトで、溝跡の底面のみで検出されている。



第3図 調査区配置図 (S=1/300)



第4図 第194次調査区位置図 (S=1/2000)

3. 遺構と遺物

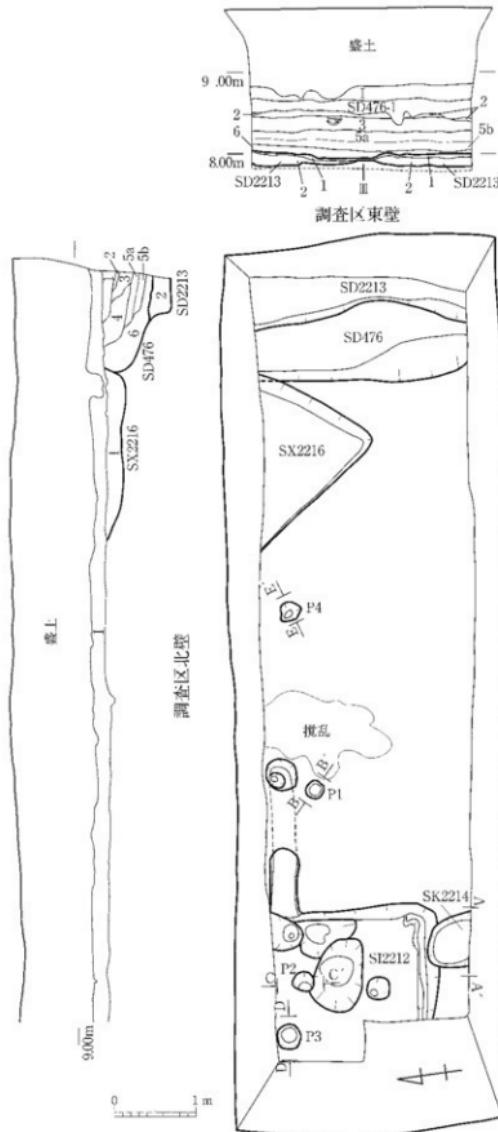
II層上面において、調査区の東端で溝跡2条、西側に竪穴住居跡1軒のほか性格不明遺構1基、土坑1基、ピットなどが検出された。

1) 竪穴住居跡

SI2212竪穴住居跡 調査区西側に位置し、北と西の調査区外に伸びている。部分的な検出に留まるが、平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは40~50cmほどである。床面は調査区西端部分がより明確で、炭化物の広がりや貼床状の堆積が一部捉えられる。堆積土は10層に分かれ、第5層はカマド内堆積土であるが、灰の集積は顕著ではない。カマドの袖は、SI2212-P3(第6図の「P3」)が位置しているため、不明瞭であり、床面も検出できなかつた。床面からはピットが3基検出された。SI2212-P1は径28cmの円形を呈し、深さは18cmである。堆積土は3層であり、堆積状況から柱穴の可能性がある。SI2212-P2は長軸90cm×短軸60cmの楕円形を呈する。深さは20cmで堆積土は1層であり、土師器瓦片が3点出土している。SI2212-P3は長軸70cm×短軸45cmの楕円形を呈する。深さは16cmで、堆積土は1層であり、土師器瓦片が3点出土している。SI2212-P2に切られている。SI2212竪穴住居跡から出土した遺物は、土師器瓦片50点、上部器坏片18点、須恵器瓦片3点である。遺構の重複はSK2214土坑、ピット2、3に切られている。

2) 溝跡

SD476溝跡 調査区東端に位置し、調査区を縦断するように南北方向に伸びている。調査区の北側に擾乱があ



第5図 遺構配置図 (S=1/60)

り、溝跡の上面が失われていた。東側が調査区外のため不明であるが、上幅は132cm以上、下幅は108cm以上と推定される。検出面からの深さは約60cmで、堆積土は大別して6層に分けられる。第1層に灰白色火山灰(註)が帶状に含まれる。出土遺物は第3層から須恵器壺片が2点(第8図5・6)、土師器壺片18点(同図4他)、第4層中から土師器壺片4点、第5層から土師器壺片1点、第6層から土師器壺片3点、土師器壺片2点が出土している。

SD2213溝跡 SD476溝跡の直下に位置し、調査区を南北に縱走する。検出面からの深さは30cmほどである。調査区東側に広がるため詳細は不明であるが、上幅は50cm以上、下幅は40cm以上と推定される。堆積土は2層確認され、第2層から土師器壺片5点、土師器壺片1点が出土している。SD476溝跡に上部が切らされていると考えられる。

3) 土坑

SK2214土坑 調査区南西に位置している。平面形は楕円形を呈し、70cm×50cm以上の規模である。検出面からの深さは52cmで、堆積土は2層である。1、2層中から土師器壺片が1点ずつ出土している。遺構の重複はSI2212竪穴住居跡の南辺を切っている。

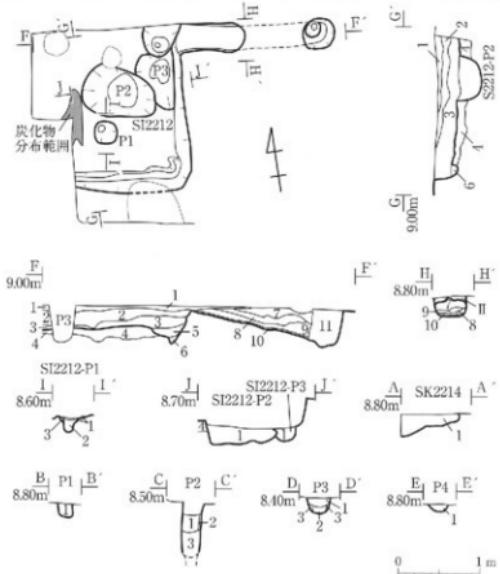
4) 性格不明遺構

SK2216性格不明遺構 調査区北東部に位置している。調査区北側へ延びており、平面形は不明である。検出面からの深さは20cm程である。遺物は出土していない。東半上部は搅乱によって削平されている。遺構の重複関係はSD476溝跡を切っている。

5) ピット

P1 SI2212竪穴住居跡の焼出しの南側

木質	土 色	土 性	考
1	JOYR3-1 灰褐色	粘土	
2	JOYR5-6 明灰色	砂質シルト	調査区北側日曜土面上に酸化鉄多量含む。
3	JOYR5-7 黄褐色	粘土質シルト	
SD476-1	JOYR3-2 灰褐色	粘土質シルト	中層に灰白色火山灰を含む。
2	JOYR5-8 黄褐色	粘土質シルト	
3	JOYR1/2 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状に含む。
4	JOYR5-9 黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルト 酸化物を斑状に含む。
5a	JOYR4/3 にふく黄褐色	粘土質シルト	
5b	JOYR4/2 黄褐色	粘土質シルト	
6	JOYR4/4 黄褐色	粘土質シルト	
SD2213-1	JOYR3-2 黄褐色	砂土	
JOYR3-3 黄褐色	粘土		
層位	土 色	土 性	考
SK2214-1	にふく黄褐色	シルト	JOYR7/21 にふく黄褐色十灰土、酸化鉄を斑状に少量含む。
2	JOYR3-3 黄褐色	粘土質シルト	
SK2216-1	にふく黄褐色	粘土質シルト	
P1-1	JOYR5-5 黄褐色	シルト	
[P2]	JOYR5-1 黄褐色	砂土	
2	JOYR5-2 黄褐色	砂土	
P3-1	JOYR5-3 黄褐色	粘土質シルト	
2	JOYR5-4 淡褐色	シルト質粘土	JOYR2-1ブロック少量、鈴木鉄较少量含む。
3	JOYR4/1 黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルトに酸化鉄斑状入る。粘土路。
P4-1	JOYR3-2 黄褐色	粘土質シルト	鈴木鉄较少量含む。粘土路少量化。



層 位	土 色	上 墓	備 考
SI2212-1	JOYR5-1 にふく黄褐色	シルト	左壁内側柱上。
2	JOYR5-5 黄褐色	シルト	左壁内側柱上。
3	JOYR5-6 黄褐色	シルト	左壁内側柱上。
4	JOYR5-3 にふく黄褐色	シルト	板状に鉄(鐵)を含む。押し充めめ土。
5	JOYR5-9 黄褐色	粘土質シルト	下層に酸化鉄を含む。カド内埋埴土。
6	JOYR5-6 黄褐色	粘土質シルト	西壁の側に鉄を含む。
7	JOYR5-2 黄褐色	粘土質シルト	北壁内側柱上。
8	JOYR5-2 黄褐色	粘土質シルト	北壁内側柱上を含む。-10cmのノック状に多量含む。北壁内側柱上を含む。
9	JOYR5-3 黄褐色	粘土質シルト	南壁内側柱上を含む。-10cmのノック状に多量含む。北壁内側柱上を含む。
10	JOYR2/1 黄褐色	粘土質シルト	南壁内側柱上を含む。
11	JOYR4/4 黄褐色	粘土質シルト	下層に酸化物を含む。
SI2212P1	JOYR4/3 にふく黄褐色	粘土質シルト	JOYR6-4ノック、酸化鉄ブロック少量含む。柱底あり。
2	JOYR5-1 白褐色	シルト質粘土	[JOYR5-1]ブロック少量含む。酸化鉄下部に含む。柱底路。
3	JOYR5-3 黄褐色	粘土質シルト	JOYR5-4ノック下部に含む。柱底路。
SI2212P2	JOYR3-3 黑褐色	粘土質シルト	JOYR6-4ノック、JOYR4-6ノック少量含む。
SI2212P3	JOYR4/2 黄褐色	粘土質シルト	JOYR5-1ノック少量含む。
SI2212P4	JOYR4/2 黄褐色	粘土質シルト	JOYR4-6ノック少量含む。

第6図 SI2212竪穴住居跡 (S=1/60)

に位置し、径20cmの円形を呈する。検出面からの深さは16cmで堆積土は1層である。遺物は出土していない。

P2 SI2212堅穴住居跡の堆積土上面で検出された。平面形は南北40cm、東西40cm以上の不整規円形を呈すると考えられるが、北側は調査区外へ延びている。検出面からの深さは60cm以上である。堆積土は2層である。遺物は出土していない。

P3 調査区北西隅に位置している。平面形は径16cmの円形を呈し、検出面からの深さは22cmである。堆積土は3層で、柱穴の可能性がある。遺物は第3層から土師器壊片1点、土師器甕片1点が出土している。遺構の重複はSI2212堅穴住居跡を切っている。

P4 調査区中央やや北寄りに位置する。平面形は径14cmのいびつな円形を呈する。検出面からの深さは8cm程度で、堆積土は1層である。遺物は出土していない。

6) 出土遺物

今回の調査では土師器壺、甕片84点、壺23点、須恵器壺、甕片6点が出土している。



第7図 過去の調査区との位置関係 (S=1/500)

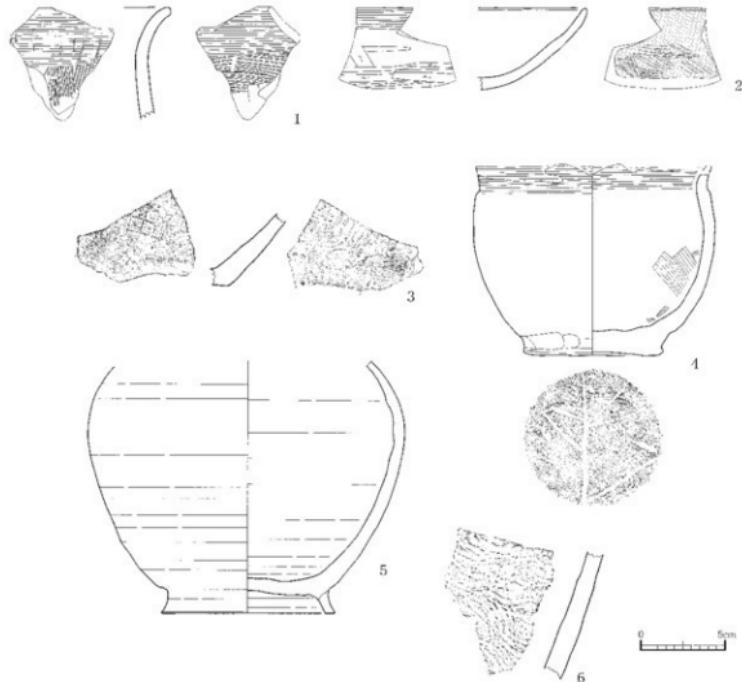
4.まとめ

今回の調査地点は郡山遺跡南方官衙地区の東部にある。検出された遺構について、SI2212堅穴住居跡はカマド内堆積土に灰の集積が顕著でないこと、カマドの袖部にあたる箇所にSI2212-P3が位置していることから、カマドが別の場所に作り替えられた可能性が考えられる。またSD2213溝跡については、SD476溝跡の下部に位置すること、方向が一致することから、一連のものである可能性も考えられる。

周辺の調査区との関連では、今回調査地点のすぐ南側に位置する第94次調査区、さらに南方30mに位置する第41次調査区において、南北に延びるSD476溝跡が検出されており、今回調査地点で検出されたSD476、SD2213溝跡がこれに統く可能性がある。また第94次調査において、溝跡の東西に堅穴住居跡が検出されており、今回調査地点で検出されたSI2212堅穴住居跡との関連が想定される。

今後、周辺の調査成果と合わせ、南方官衙地区東部の様相や、SD476溝跡の状況などが明らかにされる必要がある。

註 この灰白色火山灰は県内で広域に分布する「灰白色火山灰」(山田・庄子1980)と同義である。この火山灰は十和田a火山灰(人地1972)と推定されており、降下年代は915年とされている(町田・新井1992、小林2003など)。



図中 番号	資料番号	測定地点				分量	寸量	備考 (产地・形態・文様・調査など)	写真 図版 7-1
		遺物名	遺物地	種別	基準				
C - 1010	SD2212	1 土師器	甕	—	—	—	—	内面：ミガキ→黒色泥斑	7-1
C - 1011	SD2212	1 土師器	甕	—	—	—	—	外底：ハケメ	7-2
1	C - 1012	SD2212	1 土師器	甕	(6.9)	—	—	内面：口縁-ヨコナギ、体部-ハケメ、外面：口縁-ハケメ→ヨコナギ、体部-ハケメ	7-3
2	C - 1013	SD2212	2 土師器	甕	(5.0)	—	—	内面：ミガキ→黑色泥斑、外面：口縁-ヨコナギ、体部-ケズリ→ミガキ	7-4
3	E - 532	SD2212	3 土師器	甕	(5.0)	—	—	内面：口元直（横子目）、外面：平行タキ	7-5
C - 1014	SD2212 73	1 土師器	甕	—	—	—	—	内面：ヨコナギ、外面：ヨコナギ-ハケメ	7-6
4	C - 1015	SD476	3 土師器	甕	(11.7)	14.3	7.4	内面：口縁-ヨコナギ、体部ナゲ、外面：口縁-ヨコナギ、肩-ヨコナギ、底部：本浦陶跡	7-7
5	E - 533	SD476	3 土師器	甕？	(15.5)	—	10.6	内面：ヨコナギ	7-8
6	E - 534	SD476	3 土師器	甕	(8.0)	—	—	内面：凸て具痕（円心凹痕）、外面：平行タキ→ナゲ	7-9
E - 535	SD476	3 土師器	甕	—	—	—	内面：凸て具痕、外面：平行タキ→ナゲ	7-10	
C - 1016	SD476	6 土師器	甕	—	—	—	内面：ミガキ→黑色泥斑	7-11	
C - 1017	SD476	6 土師器	甕	—	—	—	内面：ミガキ→黑色泥斑	7-12	
C - 1018	SD476	6 土師器	甕	—	—	—	—	7-13	

第8図 出土遺物実測図 (S-1/3)



1. II層上面検出状況東側（西から）



2. SI2212整穴住居跡検出状況
(西から)



3. SX2216性格不明遺構検出状況
(南西から)

写真図版 1 II層上面検出状況



1. SK2214土坑検出状況（西から）



2. SI2212竪穴住居跡床面検出状況
(西から)



3. SI2212竪穴住居跡完掘状況
(西から)

写真図版2 SI2212竪穴住居跡、SK2214土坑検出・完掘状況



1. SI2212壁穴住居跡東西ベルト断面（南から）



2. SI2212壁穴住居跡南北ベルト断面（東から）



3. 完掘状況（西から）

写真図版3 SI2212壁穴住居跡ベルト断面・完掘状況



1. SI2212整穴住居跡煙道部南北断面（西から）



2. SI2212整穴住居跡煙道部東西断面（南西から）



3. SI2212整穴住居跡煙道部完掘状況（西から）



4. SI2212整穴住居跡P1断面（西から）



5. SI2212整穴住居跡P2・P3断面（西から）



6. SI2212整穴住居跡P2・P3断面（西から）

写真図版4 SI2212整穴住居跡煙道部・ピット

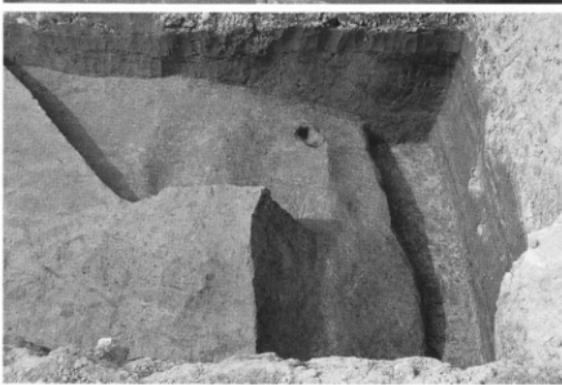
1. SD476溝跡北側断面（南から）



2. SD476溝跡東側断面（西から）



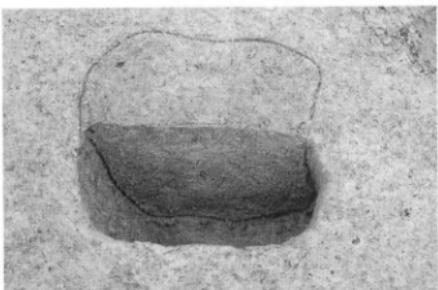
3. SD476溝跡完掘状況（南から）



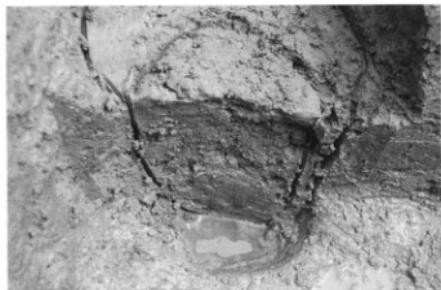
写真図版 5 SD476溝跡断面・完掘状況



1. SK2214土坑断面（北から）



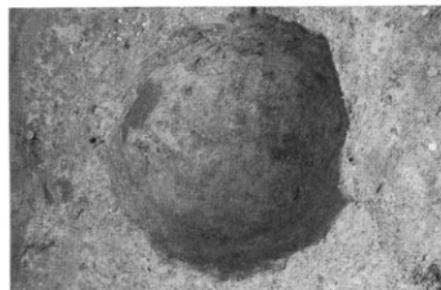
2. P1断面（南西から）



3. P2断面（西から）



4. P2完掘状況（南から）

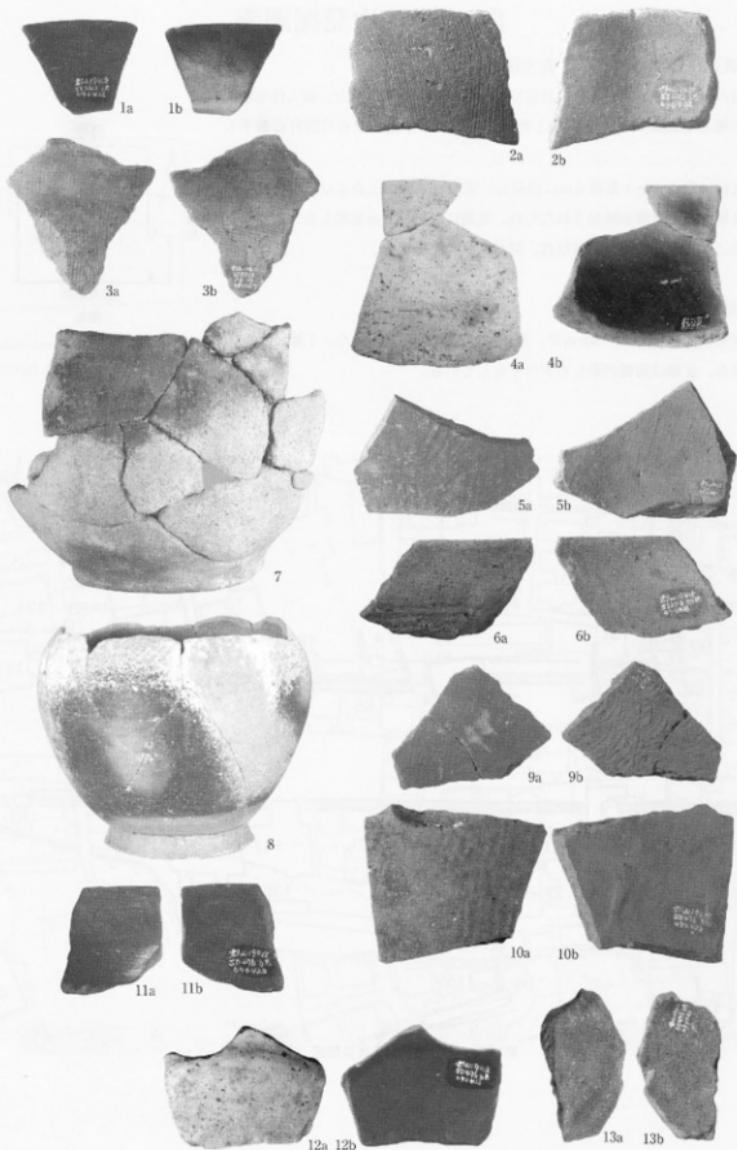


5. P3完掘状況（南から）



6. P4断面（南東から）

写真図版6 SK2214土坑、P1～4断面・完掘状況



写真図版7 出土遺物

II. 第195次発掘調査

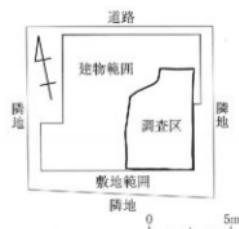
1. 調査にいたる経過と調査方法

今回の調査は平成21年5月11日付で、地権者より提出された、個人住宅建築工事に係る発掘届に基づき実施した。発掘調査は平成21年6月22日に着手した。

調査区は南北4m×東西4mに設定し、重機により盛土およびI層を掘削した。II層上面で遺構が検出されたため、北側に2m×2m拡張した。検出状況を写真により記録し、掘削後写真、図面により記録した。

2. 基本層序

調査地点の盛土は70~90cmで、基本層は3層に大別された。I層は現代遺物を含み、II層は南側が著しくグライ化している。



第9図 調査区配置図 (S=1/300)



第10図 第195次調査区位置図 (S=1/2000)

3. 遺構と遺物

II層上面で柱列2列、ピット11基のほか性格不明遺構1基が検出された。

1) 柱列

SA2217柱列 調査区を北東-南西方向に延びる。規模は3間以上で、総長は5.6m以上と考えられる。柱間寸法は180~200cmであり、方向はN-29.5°-Eである。ピット6は直径40cmの円形で検出面からの深さは40cmである。柱痕跡の直徑は15cmである。ピット15は直径50cmほどの円形で検出面からの深さは45cmである。柱痕跡は径20cmである。抜取穴は検出されなかったが、柱痕と考えられる2層中から小標が出土することから抜き取りがなされている可能性が高い。ピット17は北東が調査区外のため詳細は不明であるが、直径は40cmほどと考えられる。検出面からの深さは35cmで、柱痕跡の直徑は15cmである。柱の抜取穴が確認された。ピット6の1層からは土師器片が出土している。

SA2218柱列 濃査区を南北方向に延びる。規模は2間以上で、総長は2.4m以上と考えられる。南東の調査区外に延びているため詳細は不明である。方向はN-7°-Eである。ピット12は平面形が長軸76cm以上×短軸60cmの楕円形を呈し、東側が一部調査区外に延びている。柱痕跡は直径20cm程度である。検出面からの深さは掘り方が40cm、柱痕跡が56cmである。ピット13は検出幅は112cm×30cmで、柱痕跡は検出面で直径26cmほどである。検出面からの深さは掘り方が30cm、柱痕跡は40cmとなっている。SX2219性格不明遺構に上部を切られている。ピット12、13ともに遺物は出土していない。

2) ピット

P1 直径30cmで、検出面からの深さが20cmである。堆積土は1層で、柱痕跡は確認されていない。

P2 直径45cmで、検出面からの深さが24cmである。堆積土は1層で、柱痕跡は確認されていない。堆積土中から土師器片が出土している。ピット1に切られている。

P3 直径40cmで、検出面からの深さが42cmである。堆積土は1層である。

P4 直径25cmの円形で、検出面からの深さが24cmである。堆積土は1層で、柱痕跡は確認されていない。堆積土中から土師器片が出土している。

P5 直径30cmの円形で、検出面からの深さは29cmである。堆積土は1層で、柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。

P7 平面形が20×30cmの楕円形で、検出面からの深さは25cmである。柱痕跡は底面で検出され、直径20cmである。堆積土は1層で、遺物は出土していない。

P8 平面形が45×55cmの楕円形で、検出面からの深さは14cmである。堆積土は1層で、遺物は出土していない。

P9 直径25cmの円形で検出面からの深さは35cmである。柱痕跡が底面で検出され、直径10~15cmである。遺物は出土していない。

P10 直径20cmの円形で、検出面からの深さは3cmである。

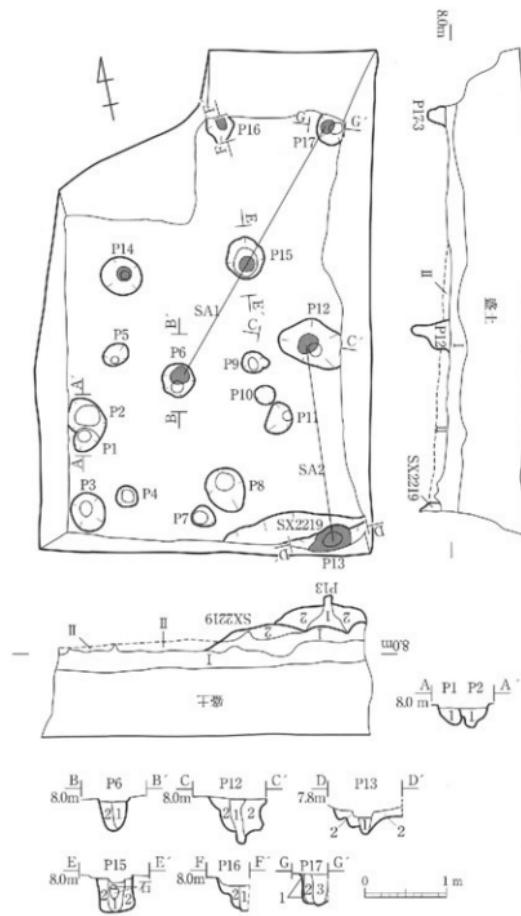
P11 平面形が30×40cmの楕円形で、検出面からの深さは14cmほどである。堆積土は1層で、遺物は出土していない。

P14 直径50cmの円形で柱痕跡が直徑20cmである。検出面からの深さは17cmで、遺物は出土していない。

P16 最大幅35cmの不整形で、北側は調査区外である。柱痕跡が確認できるが調査区外のため正確な直徑は不明である。検出面からの深さは45cmである。

3) 性格不明遺構

SX2219性格不明遺構 調査区南東隅で検出された。大部分が調査区外のため平面形、規模は不明であり、深さは40cmである。堆積土は2層で、遺物は出土していない。SA2218柱列のピット13を切っている。



第11図 遺構配置図 (S=1/60)

4) 出土遺物

今回の調査ではピット6の1層から土師器壊1点、内面黒色処理された土師器片1点が出土した。その他、ピット2~4の1層およびII層上面で土師器が7点ほど出土しているが、いずれも細片である。

4.まとめ

今回調査地点は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の外郭南西の外側で、郡山庵寺との間に位置する。今回調査地点の西方約60mに位置する第124次調査区では堅穴住居跡や掘立柱建物跡や柱列跡などが検出されており、これらの遺構の多くはⅠ期官衙に伴う遺構群とされている。中でもSB1901掘立柱建物跡では棟行の方向がN29.5°Eとなり（註）、今回検出されたSA2217柱列と方向を同じくする。また今回調査地点の北西30mに位置する第118次調査区でも、Ⅰ期官衙と同時期の可能性が指摘されているSB1805掘立柱建物跡が検出されている。以上から、今回調査区のSA2217柱列もⅠ期官衙に関連する遺構の可能性が考えられる。

註 SB1901掘立柱建物跡の方向については、第124次発掘調査報告書の図面を基に再計測した。

表3 土層注記表

基木番	上 色	土 性 質	備 考
I	10YR3/1 黒褐色	粘土	現代遺物を含む。
II	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト 調査区全体がまろやかグライ化	
層付 記	土 色	+	備 考
SX2219-1	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト 酸化鉄粒を少量含む。	
-2	10YR3/2 黑褐色	粘土 グライ化	7.5GY4/1駆縫灰の粘土ブロック含む。酸化鉄粒を少量含む。
P1-1	10YR3/1 黑褐色	粘土	
P1-2	10YR4/2 黄褐色	粘土	
P3-1	10YR3/1 黑褐色	粘土	
P4-1	10YR3/1 黑褐色	粘土	
P5-1	10YR2/2 鋼鐵色	粘土	
P6-1	10YR4/1 駆縫	粘土	酸化鉄粒を少量含む。炭化物粒微量に含む。付灰跡。
P6-2	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土 シルト質粘土 10YR3/6 黄褐色 (付灰)	10YR3/6 黄褐色 (付灰) ブロック少量含む。
P7-1	10YR3/1 黑褐色	粘土	
P7-2	10YR4/2 黄褐色	粘土 2層ブロックを含む。	
P8-1	10YR2/1 黑褐色	粘土	
P9-1	10YIG3/3 灰白色	粘土	酸化鉄多量に含む
P9-2	10YR3/2 黑褐色	粘土 柱抜き穴	
P10-1	10YIG3/3 鋼鐵色	粘土	
P11-1	10YR2/3 黑褐色	粘土	
P12-1	10YIG3/3 鋼鐵色	粘土 酸化鉄多量に含む。10YR6/2の粘土ブリック含む。	
P12-2	10YIG3/2 黑褐色	粘土 柱抜き穴	酸化鉄多量に含む。柱抜き穴。
P13-1	10YR3/3 灰褐色	粘土 柱抜き穴	酸化鉄多量に含む。10YR6/2の粘土ブリック含む。
P13-2	10YR2/2 黑褐色	粘土 柱抜き穴	酸化鉄多量に含む。柱抜き穴
P14-1	10YR2/3 鋼鐵色	粘土	
P14-2	10YR1/2 黄褐色	粘土 柱抜き穴	
P15-1	10YR3/3 鋼鐵色	粘土	
P15-2	10YR1/2 黄褐色	粘土	
P16-1	10YR4/2 黄褐色	粘土 柱抜き穴	
P16-2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土 炭化物を含む。	
P17-1	10YR4/2 黄褐色	粘土 根付方塊上	
P17-2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土 柱抜き穴	
P17-3	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土 酸化鉄・10YR7/2の粘土ブロック多量に含む。柱抜き穴	



1. II層上面検出北側（北から）



2. II層上面検出南側（北から）

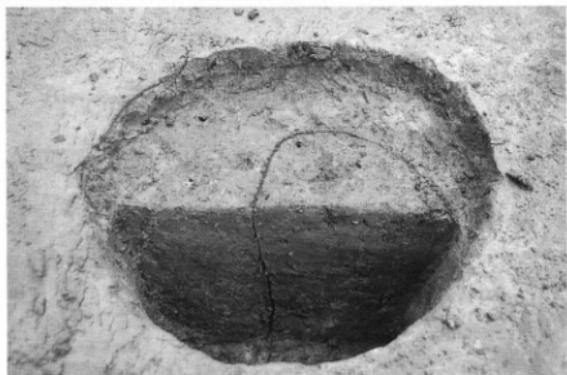


3. 完掘状況（南西から）

写真図版 8 遺構検出・完掘状況



1. P1・2断面（東から）



2. P6断面（東から）



3. P12断面（南から）

写真図版9 ピット断面（1）



1. P15断面（西から）



2. P16断面（東から）



3. P12断面（北から）

写真図版10 ピット断面（2）



1. 調査区東壁断面（西から）



2. 調査区南壁断面（北から）

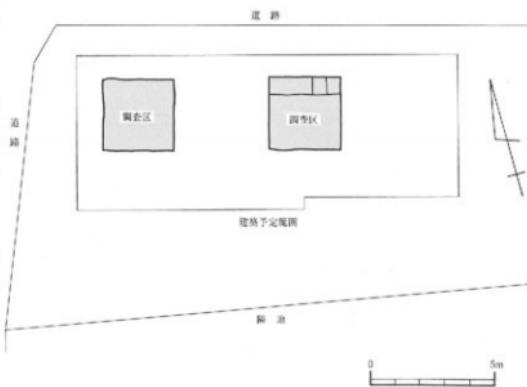
写真図版11 調査区断面状況

III. 第197次発掘調査

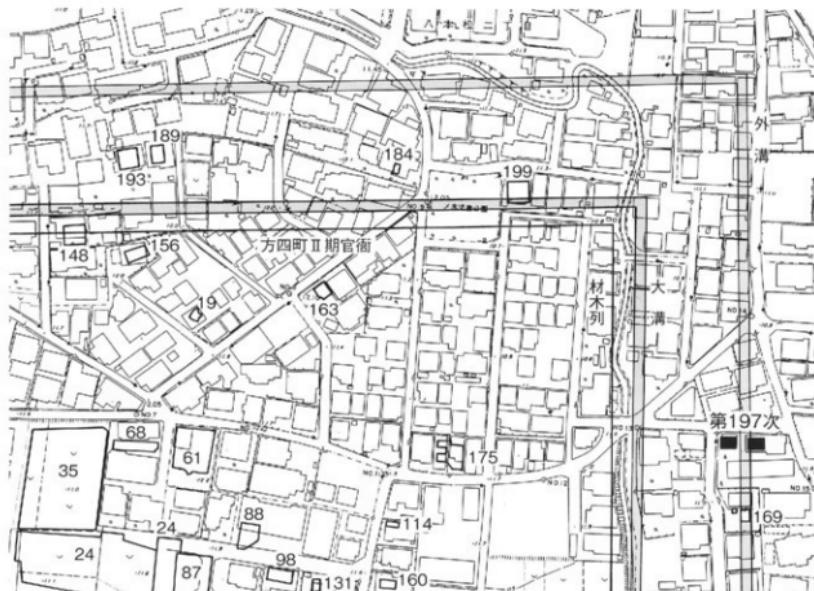
1. 調査経過

第197次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年9月30日付で、仙台市太白区郡山4丁目231、231-7における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された。現地表からの深さ80~90cmの掘削を伴う工事であり、その深度まで遺構が削平されると想定されたため、調査を実施した。

調査箇所はⅡ期官衙の外溝東辺の推定ライン上に位置する。確認調査は平成21年11月30日を行い、遺構、遺物が発見されなかったため、埋め戻しを行った。



第12図 調査区配置図 (S=1/200)



2. 調査方法

調査区は当初、南北3m×東西10mに設定した。西端から重機により盛土、表土を除去したところ、工事の削平が及ぶ現地表から深さ80~90cmでは、擾乱を大きく受けていることが確認された。そのため、掘削範囲は3×3mの西トレンチと、当初の調査区東部3×3mの東トレンチとして設定し直し、掘削を行った。東トレンチでも西トレンチ同様、深さ80~90cmでは擾乱を受けていることが確認された。東トレンチは外溝東辺の推定ライン上に位置していたため、北部の一部を掘削したところ、深さ約1mで擾乱を受けていない土層が検出された。その上層の性質を把握するため、さらに部分的に調査を行った。最深部では約1.9mまで掘削を行ったが、遺構、遺物は全く発見されなかった。調査区の平面、断面について写真撮影を行い、土層については柱状図を作成した。

3. 基本層序

調査地点には盛土が1~1.2m堆積し、以下に基本層第Ⅰ層としてにぶい黄褐色の砂質シルト層が厚く堆積していた。基本層は細分され、上部のⅠa層は下層と比べ、粘性、しまりが共に弱い土層である。下層のⅠb層はやや土色が暗いほか、より粘質の強い土をブロック状に含んでいる。

4. まとめ

今回調査地点は、郡山遺跡方西町Ⅱ期官衙の外溝東辺にあたる。調査は基本的に現地表から90cmの範囲で行ったが、東トレンチでは下部で外溝が検出される可能性があったため、さらに調査を行った。その結果、溝跡は検出されず、Ⅰ層である砂質シルト層の堆積が1m以上続くことが確認された。周囲の調査で検出された土層と異なっている。他に遺構、遺物も検出されず、外溝の存在した土層が河川等により削平された可能性が考えられる。

IV. 第198次発掘調査

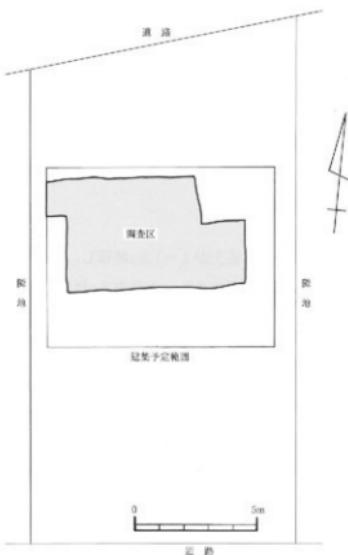
1. 調査経過

第198次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年10月25日付で、仙台市太白区都山3-204-15における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出された。現地表からの深さ1.1mの掘削を伴う工事であり、遺構が削平されると想定されたため、調査を実施した。

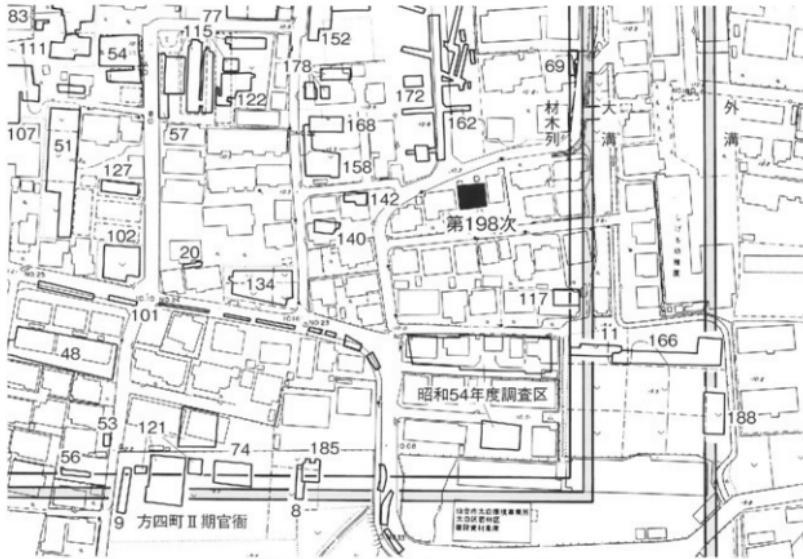
調査箇所はⅡ期官衙中輦部の東部にあたる。調査は平成21年12月2日に着手した。遺構の検出状況に応じて適宜調査区を拡張しながら作業を進め、12月11日に調査を終了し、埋め戻しを行った。

2. 調査方法

調査区は当初、南北3m×東西7mに設定した。重機により盛上、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、土坑が2基並んで検出され、その北半が調査区外へ延びていたため、調査区北部を南北2m×東西4mの範囲で拡張した。上坑、ピットは完掘し、写真、図面作成を行った。また、当初の調査区設定範囲のはば全域にわたり北東-南西方向の溝跡が検出された。溝に直交して幅80cmの範囲を掘り下げたと



第14図 調査区配置図 (S=1/200)



第15図 第198次調査区位置図 (S=1/2000)

ころ、3条の溝跡が重複していること、これらの深さが工事の行われる深度のGL-1.1mより深いことが明らかとなつた。これ以下の遺構は保護されることから、溝跡を完掘する箇所は一部に留め、他は削除される深度までの調査とし、写真、図面作成を行った。なお、遺構の検出状況からさらにも西側へ拡張を行っている。

3. 基本層序

調査地には盛土が30~50cm堆積し、以下に耕作土であるⅠ層が20~40cm堆積している。Ⅰ層は細分され、上部のⅠa層は比較的均質なびい黄褐色の砂質シルト層である。下部のⅠb層は下層の上を多量に巻き上げているため、土色、土質とも下層の影響を強く受けている。Ⅱ層は明黄褐色の粘土質シルト層であり、この上面が遺構検出面である。

4. 遺構と遺物

今回の調査では土坑3基、柱穴1基、溝跡5条、ピット6基が検出された。全てⅡ層上面の検出である。

SK2221土坑

調査区中央に位置し、SK2222土坑に東接して検出された。南北1.7m、東西1.8mのやや不整な円形を呈する。深さは約40cmであり、断面形状は逆台形を呈するが、深さ20cmで横面の傾斜が変化し、下部が52°~68°で立ち上がるのに対し、上部は40~49°と比較的緩やかに立ち上がる。検出時には土坑中央部が直徑1mの円形の範囲で、周囲と明確に異なる堆積土として確認でき、その堆積土を掘り下げた結果、桶の底板と木枠が検出された（写真図版15-1、2）。桶内の堆積土は3層に分層され、検出時に中央部で円形に確認できた第1層はしまりのない褐色の砂質シルトで、耕作土のⅠ層に類似する。第3層は底板直上に1~2cmの厚さで堆積しており、しまりの強い粘土層である。また、第4層として底板の下部に4~5cmの厚さで粘土層が堆積していた。桶埋設時の掘方埋土は5、6層の2層に区分される。第5層が掘方の大半を占め、下部に第6層が堆積している。また、土坑底面は桶の木枠底面にあたる部分が窪み、木枠設置面が変質したと考えられる粘土層が堆積しており、第7層とした（同写真図版4）。

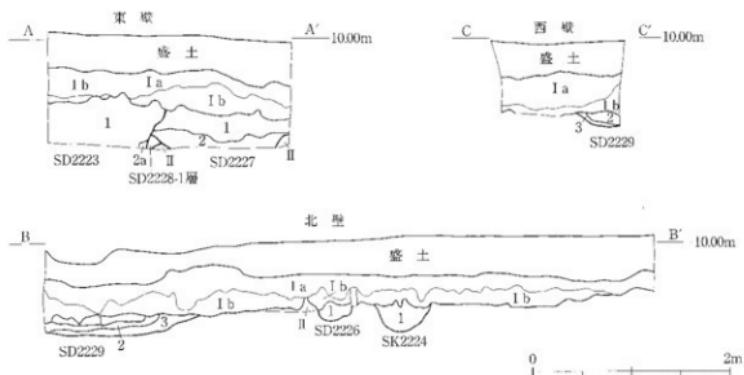
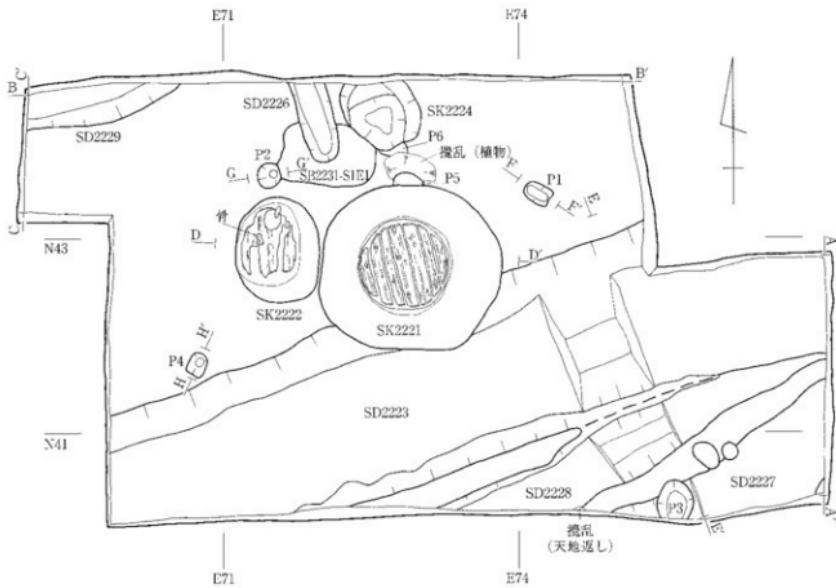
桶については、7枚の底板で構成され、それぞれ4~5cmほどの厚さを有する（写真1、2）。木枠上部は残りが悪く、薄く掘方埋土に貼り付いている状態であったが、下部は部分的に2~3cmほどの厚さを有していた。他の出土遺物としては、第1層より土師器、須恵器の小片が、桶底面下部の第4層より肥前陶器のI-56灰釉碗の小片が出土したほか、掘方埋土の第5層からI-58擂鉢片（第18図1）や土師器、須恵器の小片が出土している。また、重複関係としては、南部でSD2223溝跡を切っている。

SK2222土坑

調査区中央に位置し、SK2221土坑の西に隣接して検出された。南北1.1m、東西0.85mの楕円形を呈する。深さは約20cmあり、断面形状は扁平な鎌鉗型を呈する。SK2221土坑と同様、検出時に南北0.85m、東西0.65mの楕円形の範囲で明確に周囲との堆積土の違いが確認され、掘り下げたところ、南部が三叉状に分かれて残存した木板が検出された。また周囲の堆積土との境から、木片が少量検出されており、SK2221土坑と同様桶が埋設されていた可能性を考えられる。木板上の堆積土は1層のみで、SK2221土坑の第1層と非常に類似している。木板下部にも5~6cmの厚さでシルト質粘土層が堆積していた。また、木板埋設時の掘方埋土は3、4層の2層に区分される。出土遺物は第1層から土師器小片が出土したほか、木板直上より長さ10cm、太さ5cmほどの骨と炭化材が1点ずつ見つかっている。また、掘方の第3層よりN-134煙管の吸口（同図2）と須恵器片が出土した。

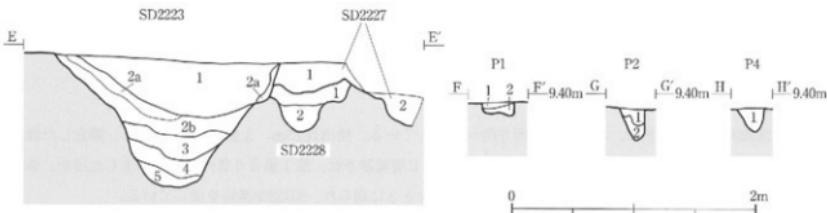
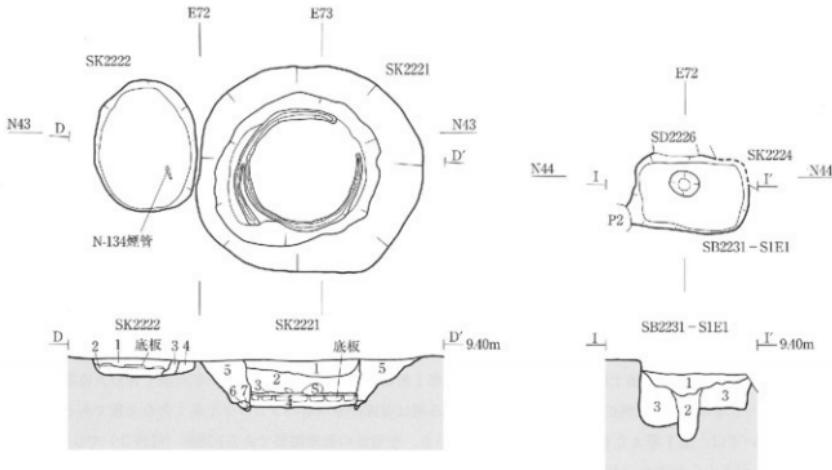
SK2224土坑

調査区北端でSD2226溝跡と並んで検出され、北部は調査区外へ延びている。検出された範囲では直徑約70cmの不整な円形を呈しているが、SD2226溝跡と並行して北部へ延び、溝状を呈する可能性も考えられる。断面形状はU



	層位	色 調	土 質	備考
Ⅲ-4層	I	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	砂性土、風化物粗微量
	Ib	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	砂性土、下部ブロック層多量
	II	10YR6/6 明顯褐色	粘土質シルト	風化物多量
SD2229	I	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	マンガン鉱脈多量
	2	10YR5/2 从黃褐色	粘土質シルト	風化物少量、にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト状細粒
	3	10YR4/4 黄色	シルト質粘土	風化物少量、マンガン鉱や小量葉

第16図 調査区平・断面図 (S=1/50)



部位	色 調	土 質	備 考
SK2221	1 IOYR4/4 暗赤	砂質シルト	マンガン鉱や多量、粘土質少量、しまりがありない、薄作土の底入か
	2 IOYR4/2 暗赤褐色	粘土質シルト	マンガン鉱少量、濃が込入
	3 IOYR4/1 灰色	粘土	砂質を含む
	4 25YR4/2 暗灰黄色	粘土	礫質土、水分を多量に含み泥化
	5 10YR4/1 暗褐色	粘土質シルト	礫質土、マンガン鉱少量に多量、Ⅲ層ブロック複数、下部は粘土物が多く含む
	6 10YR4/2 暗赤褐色	シルト質粘土	粘土質シルト
	7 10YR4/2 暗赤褐色	粘土	粘土質少量
SK2222	1 IOYR4/4 暗赤	砂質シルト	「マンガン鉱や多量、しまりがありない」
	2 IOYR4/2 暗赤褐色	シルト質粘土	「無」
SD2223	1 IOYR4/2 にかい黄褐色	粘土質シルト	海鳥糞土、マンガン鉱や多量、明赤褐色 (10YR6-8) シルトブロック少量 (網より多い)
	2 IOYR4/2 にかい黄褐色	粘土質シルト	海鳥糞土、1層ブロックや多量
SD2226 S1E1柱穴	1 IOYR2/4 暗褐色	粘土質シルト	「網より」粘土多量、Ⅲ層ブロック多量 (下部はビブロックの割合が多い)
	2 IOYR2/2 濃褐色	シルト質粘土	「網より」粘土多量、Ⅲ層ブロック多量 (下部はビブロックの割合が多い)
SD2228	1 IOYR4/2 暗赤褐色	粘土質シルト	「マンガン鉱や多量、明赤褐色 (10YR6-8) 砂にシルトブロック少量
	2 IOYR4/2 暗赤褐色	粘土質シルト	「マンガン鉱や多量、明赤褐色 (10YR6-2) シルト粘少量
P1	3 IOYR4/2 にかい黄褐色	粘土	「無」
	4 IOYR4/2 暗赤褐色	粘土	「無」
P2	5 IOYR2/1 濃褐色	粘土	「無」
	1 IOYR2/2 緩傾斜	粘土質シルト	「マンガン鉱や多量、Ⅲ層ブロック少量」
P3	2 IOYR2/4 緩傾斜	シルト質粘土	「無」
	1 IOYR2/4 暗褐色	粘土	「無」
P4	2 IOYR2/2 濃褐色	シルト質粘土	「マンガン鉱や多量、Ⅲ層ブロック少量」
	1 IOYR2/2 暗褐色	粘土質シルト	「無」
P5	2 IOYR2/2 濃褐色	シルト質粘土	「無」
	1 IOYR2/2 濃褐色	粘土質シルト	「無」
P6	2 IOYR2/2 暗褐色	粘土質シルト	「マンガン鉱や多量、Ⅲ層ブロック多量」
	1 IOYR2/2 暗褐色	粘土質シルト	「マンガン鉱や多量、Ⅲ層ブロック少量」

第17図 運営構平・断面図 (S=1/40)

字形を呈し、深さは20~30cmで南部が1段低くなっている。堆積土は暗褐色のシルト質粘土層1層のみで、基本層のⅡ層をブロック状に少量含んでいる。1層中より土師器小片が少量出土した。南西部でSB2231掘立柱建物跡のSIE1柱穴を切っている。

SD2226溝跡

調査区北端でSK2224土坑と並んで検出され、北部は調査区外へ延びている。南北へ継走する溝跡で、方向はN.23~24°-Wである。検出長は約80cm、上幅35cm、下幅20cmを測り、断面形は不整形なU字形、深さは20cmである。堆積土はSK2224土坑の1層と同一のシルト質粘土層である。遺物は出土していない。南部でSB2231掘立柱建物跡のSIE1柱穴を切っている。

SD2223溝跡

調査区南半を北東から南西方向へ斜走する溝跡で、方向はN.62°-Eである。検出長7.7mで上幅1.85m、下幅10cmを測り、深さは1.1mである。断面形はV字形を呈するが、北側では深さ40cmで整面の傾斜が変化し、下部は67°で立ち上がるが、上部は42°と緩傾斜になる。南側はほぼ同一の深さで段をもち、下部は53~65°で立ち上がり、上部は73°と急傾斜になる。堆積土は大別5層に区分され、第1層は基本層のⅡ層をブロック状に多く含む人為堆積土である。3~5層は非常に粘性の強い粘土層であり、第5層は表面の基本層のブロックを多く含む土層である。出土遺物については、第1層より多量の遺物が出土している。在地産の無釉陶器であるI-58鉢（同図3）やG-132平瓦（同図4）が出土したほか、土師器片では口縁部と底部の境に段を有する环や壺、須恵器片では壺や壺などが出されている。また、鉄滓も出土している。第5層からは、G-131平瓦（同図5）が出土した。この瓦は凸面が網格子叩きされたものであるが、SD2227溝跡の第1層から出土した破片と同一個体である。遺構の重複関係は、北部でSK2221土坑に切られ、南部でSD2227、SD2228溝跡を切っている。

SD2227溝跡

調査区南東隅で検出され、北東から南西方向へ斜走している。検出長2.5m、上幅約90cmである。調査した箇所が一部のため、下幅や断面形状は不明である。堆積土は2層確認され、第1層より骨片や齒が出土したほか、各層より土師器片が出土した。重複関係はSD2223溝跡とピット3に切られ、SD2228溝跡を切っている。

SD2228溝跡

調査区南東部で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡で、方向はN.52°-Eである。検出長約3m、上幅約60cm、下幅20cmであり、深さは約40cmである。断面形は下部がU字形を呈し、上部は南側で段を有している。北側はSD2227溝跡との重複関係で不明であるが、南側同様段を有していた可能性が考えられる。堆積土は2層確認され、第1層より土師器片少量のほか、陶器片が1点出土した。この陶器片は後述するI-59壺と同一個体の可能性が考えられる。遺構の重複関係は北側をSD2223溝跡に、南側をSD2227溝跡に切られている。

SD2229溝跡

調査区北西隅で検出され、北東から南西方向へ斜走している。検出長約1.7m、深さ15~20cmであるが、調査区外へ延びているため、幅や断面形状は不明である。堆積土は3層に区分される。

SB2231掘立柱建物跡

調査区北部で柱穴が1基検出された。不整な隅丸長方形を呈し、南北60cm、東西約90cmを測る。掘方の深さは50~60cmであり、西半が深くなる。柱痕跡は掘方の北寄りに位置しており、直径が南北で20cm、東西で25cmの円形である。深さは約40cmであり、掘方より10cm以上沈んでいる。堆積土は3層確認され、第1層上面では柱痕跡は確認されていない。第1層を除去した段階で柱痕跡が検出され、柱痕跡の堆積土を第2層とし、基本層のⅡ層をブロック状に非常に多く含む、柱痕跡周囲の粘土質シルト層を第3層とした。第2層は粘性が強く、しまりの弱い暗褐色粘土層で、Ⅱ層をブロック状に少量含んでいる。出土遺物としては各層から土師器小片が確認されたほか、



写真1 SK2221出土桶形木棺底板表面（上が北）



写真2 SK2221出土桶形木棺底板裏面（上が北）



0 10cm



図No.	写真No.	登録No.	遺物・部位	種別・古種	寸法(cm)	肉厚・針脚
1	1	I-57	SK2221・5号	扁鋸・檜材	不明	薄削・継縫・石英・蛋白石含む・有茎葉含む
2	2	N-131	SK2222・3号	扁鋸・檜材(吸口) 前後2.4cm留縫1.1cm吸口9.4	L19.2T4.1W8.8	
3	3	I-58	SK2222・4号	扁鋸・檜	L19.2T4.1W8.8	有残痕・無縫・外側・ロクロ小字・内面・Eクロイデ+ヘリナデ・継縫・石英を含む
4	4	G-132	SK2222・1号	丁尺	厚さ2.3-2.4	色斑・有日影・ナリ斑・白由・継縫・石英・白色粘・白目を含む
5	5	G-131	SK2222・3号	平丸	厚さ2.5	西面・東日影・凸面・筋子等含・継縫・石英を含む
6	6	C-1006	SK2222上蓋	高ロクロ土彌器・裏	坂原8	内外面・ヘラナデ・底模・ヘナナデ・多孔・石英・白色粘を含む
-	7	I-59	I解	扁鋸・檜	不明	蛋白石・継縫・沈澱含む

第18図 出土遺物 (S=1/3)

第3層からは鉄滓が出土した。柱痕跡である第2層より遺物が出土したことやその土質から、柱は抜き取られたものと考えられる。そのため、第1層が抜取穴の堆積土、第3層が掘方の埋土と考えられる。遺構の重複関係としては、北部をSK2224土坑とSD2226溝跡に、南西部をピット2に切られている。

今回の調査で柱穴が北部で1基のみ確認されたことで、建物跡は調査区の北側へ延びるものと考えられ、今回検出した柱穴は南東隅のものと推定される。

ピット

P1 調査区北東部で検出され、長軸約30cm、短軸20cmの隅丸長方形を呈する。深さは約15cm、底面はやや凸凹があり、断面形は不整形である。堆積土は2層である。

P2 調査区北部で検出され、直径約20cmの円形を呈する。深さは約30cm、断面形は細長いU字形である。堆積土は2層で、SB2231掘立柱建物跡のSIE1柱穴を切っている。

P3 調査区南端で検出され、東西約35cm、南北40cm以上の楕円形を呈するが、南部が調査区外に延びているため、正確な規模は不明である。深さは約25cmあり、堆積土は暗褐色粘土層1層である。SD2227溝跡を切っている。

P4 調査区西部で検出され、長軸25cm、短軸20cmの隅丸長方形を呈する。深さは20cm、断面形はU字形である。堆積土は1層であり、土師器小片が出土している。

また、ピット5は深さ2、3cmの浅い小ピットであり、ピット6はSK2224土坑と植物のカクランに切られており、規模、形状は不明である。

遺構外出土遺物としては、耕作土のI層より土師器小片や鉄滓が出土したほか、常滑窯と推定されるI-59壺（同図7）が出土した。12世紀後半代の壺であり、沈縫が1条認められることから三筋壺の可能性が高い。

5.まとめ

今回調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙中枢部の東部にあたる。検出された遺構について、調査区中央で2基並んで検出されたSK2221、SK2222土坑は近世墓である。SK2221土坑は検出された桶を棺とした正円形の桶形木棺墓であり、SK2222土坑についても、桶が埋設された可能性があること、検出時にSK2221土坑と同様、円形のプランが検出されたことから桶形木棺墓である可能性が高い。SK2221土坑からは副葬品は出土せず、時期の特定ができるないが、埋設時の崩落土と考えられる4層から出土したI-56灰釉碗は、17世紀後半から18世紀中頃のものである。また、掘方埋土の5層中より出土したI-57擂鉢も18世紀以降のものである。一方、SK2222土坑からは掘方埋土よりN-134撻管が出土したが、肩部から口付部にかけて段差が認められず、滑らかであることから18世紀以降のものであると推定される。よって、両者の埋葬時期は18世紀以降と考えられる。なお、SK2222土坑出土の三叉状の板については、木目の観察により、1枚の楕円形の板であったものが、腐食の度合いの差により現況を呈したものと考えられる。また、この板の上部（北側）は円形に穴が開いており、周囲が炭化していたが（写真図版15-6）、裏面を観察したところ、炭化部の面積が表面より広く明瞭であった（写真3）。そのため、この板材は裏面を主要な使用面としていた板を、転用材として棺の底板に用いた可能性が高いと考えられる。

また、調査区北部で検出されたSK2224土坑、SD2226溝跡については、両遺構の堆積土とは同



写真3 SK2222出土板材炭化部（裏面）

一の暗褐色のシルト質粘土が、調査区北壁断面で確認されたIb層中に多量に含まれていた。そのため、調査区北部には、両造構の堆積土に近似した土層が耕作土として当初堆積しており、後の耕作によりこの土層が擾拌された可能性が高いと考えられる。そしてこの両造構は、擾拌される以前の暗褐色シルト質粘土層が堆積していた時期の耕作に関連する造構と考えられる。

他に検出されたSD2223、SD2227、SD2228、SD2229溝跡については、造構の時期を特定できる遺物は出土しておらず、詳細な年代は不明である。特にSD2223、SD2227、SD2228溝跡は調査区南部で重複関係のある溝跡である。最も新しいSD2223溝跡の第1層から出土した遺物には、土師器片、須恵器片のほか、無釉陶器のL-58鉢が含まれる。この鉢は13世紀後半から14世紀前半の年代と考えられ、器形からは仙台市宮城野区洞ノ口遺跡などで出土する在地産の片口鉢と同様のものである。また、最も古いSD2228溝跡の1層からは土師器小片と共に12世紀後半代の陶器片が出土している。これら遺物の出土状況や土層の堆積状況を考慮すると、各溝跡の堆積土上層は造構の機能時から長期間経過してから堆積したものと想定される。3条の溝跡の新旧関係はこの堆積土上層の重複関係から判別したものであるため、溝跡そのものの新旧関係については今後の周囲の調査も踏まえて慎重に検討する必要がある。またSD2223溝跡に関しては、今回調査地点の南西約100mに位置する第134次調査区において、同方向に斜走するSD1959溝跡が検出されている。溝の断面形態や深さが類似しており、両者の関連性を指摘しておきたい。なおSD1959溝跡は、10世紀後半以降とされたSB1935掘立柱建物跡を切り、出土遺物に陶磁器類を含まないことから、古代末期の可能性が高いことが指摘されている。

また、SP2231掘立柱建物跡は調査区の北側へ延びることが確実と考えられるが、柱穴1基しか検出されなかつたため、建物の規模、構造は不明である。SIE1柱穴からは時期比定可能な遺物は出土しておらず、造構の詳細な年代は明らかにできなかった。



1. 遺構検出状況（北から）

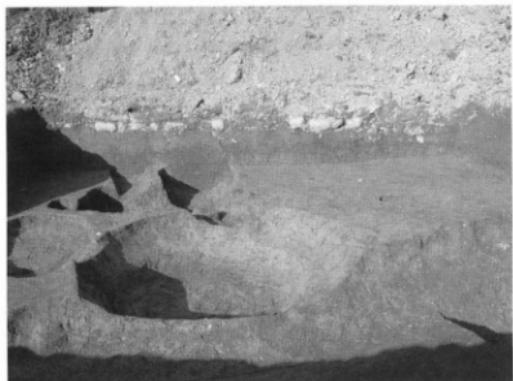


2. 遺構掘削状況（北から）



3. SD2223, 2227, 2228検出状況（西から）

写真図版12 調査区全景



1. 調査区北壁断面



2. 調査区東壁断面 (A-A')



3. 調査区西壁断面 (C-C')

写真図版13 調査区壁断面



1. 木棺内部堆積土半裁（南から）



2. 木棺検出状況（南から）

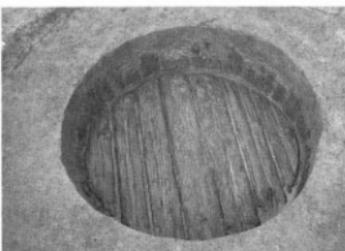


3. 完掘状況（南から）

写真図版14 近世墓1 (SK2221、2222土坑)



1. SK2221木棺内部堆積土断面（南から）



2. SK2221桶形木棺検出状況（南から）



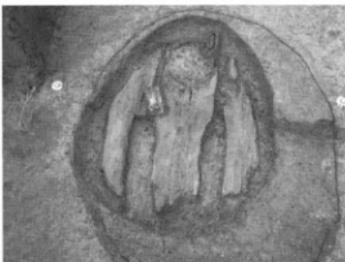
3. SK2221掘方断面（南から）



4. SK2221 7層堆積状況（南から）



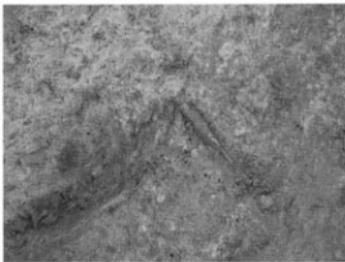
5. SK2222木棺内部断面（南から）



6. SK2222木棺底板検出状況（南から）



7. SK2222掘方断面（南から）

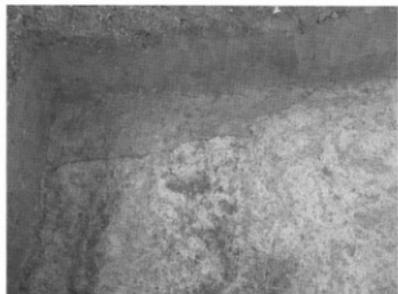


8. N-134籠管出土状況（南から）

写真図版15 近世墓2 (SK2221、SK2222土坑)



1. SD2223、2228断面（西から）

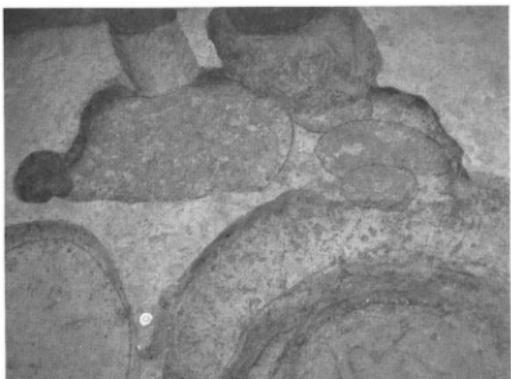


2. SD2229検出状況（南から）

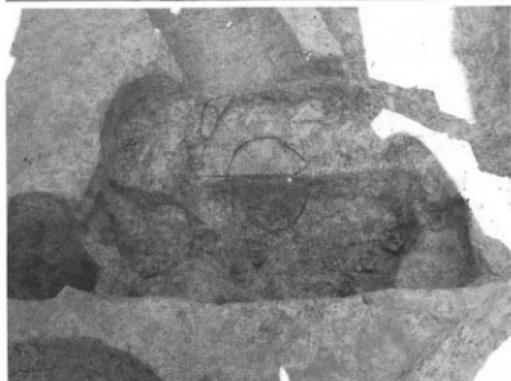


3. SD2229完掘状況（南から）

写真図版16 溝跡調査状況



1. S1E1柱穴検出状況（南から）



2. 柱痕跡検出状況（南から）



3. S1E1柱穴掘方断面（南から）

写真図版17 SB2231掘立柱建物跡

V. 第199次発掘調査

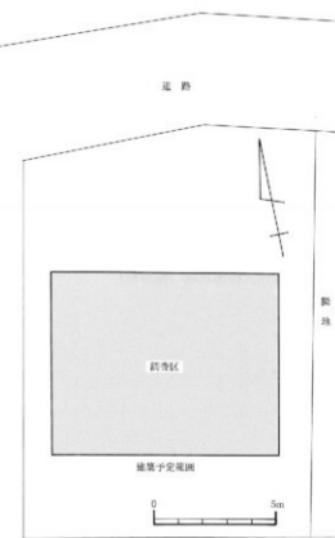
1. 調査経過

第199次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成21年10月5日付で、仙台市太白区郡山3-51-41における個人住宅建築工事に係る発掘届が提出され、遺構が失われるため、調査を実施した。

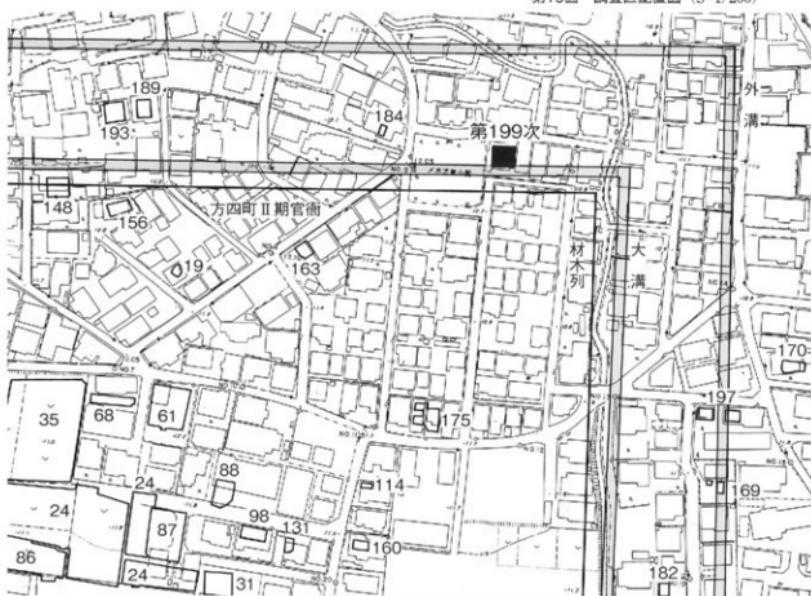
調査箇所は方四町Ⅱ期官衙を区画する大溝北辺の東部にある。調査は平成21年12月14日に着手し、重要な遺構が検出される可能性があったため、重機掘削による排土は場外搬出を行った。12月16日に岡面作成等の調査を終了、18日に場外搬出した排土を再び運搬して埋め戻した。

2. 調査方法

調査区は南北7.5m×東西9.3mに設定した。重機により盛土、耕作土を除去し精査した結果、調査区南端で溝跡が1条検出された。検出写真撮影後、溝跡を調査し改めて全景写真を撮影した。その後、測量用基準点を移動し、調査区内のグリッドを設定した上で、1/20で平、断面図を作成した。



第19図 調査区配置図 (S=1/200)



第20図 第199次調査区位置図 (S=1/2000)

3. 基本層序

調査地点には盛土が50~80cm堆積しているが、下部10~20cmは旧耕作土がブロック状に多量に含まれている。I層は耕作土であり、調査区南部において部分的に堆積している。II層は黄褐色の砂質シルト層であり、この上面が遺構検出面である。

4. 遺構と遺物

今回の調査では溝跡1条が検出された。

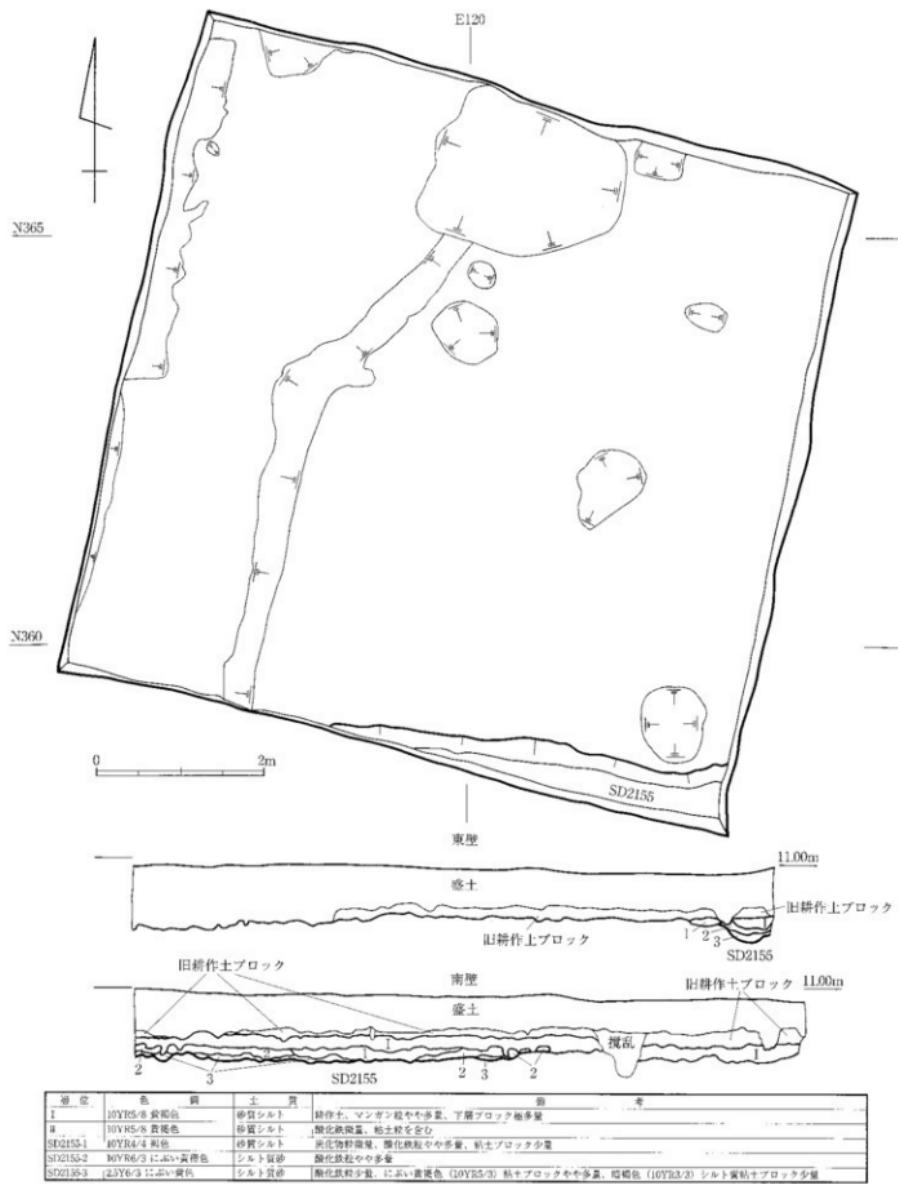
SD2155溝跡

調査区南端で検出された。東西方向に延びる溝跡で、検出長約5m、深さ20cmであるが、溝の南縁が調査区外のため、幅、断面形状の詳細は不明である。方向は溝の北縁からE-1°-Sと推定される。堆積土は3層確認され、第1層が砂質シルト、第2、3層はシルト質砂層である。第3層には粘土がブロック状に多く含まれている。また、溝底面には酸化鉄の集積が確認された。遺物については、堆積土の第2層と基本層I層の層理面より上師器小片1点と、第3層中より土師器壺の小片1点が出土したのみである。

遺構外出土遺物としては、擾乱中より須恵器壺の体部片が出土したほか、II層上面検出時に土師器片少量と19世紀前半の大廻舟馬産の黒釉鍋の破片が出土している。

5. まとめ

今回調査地点は、鶴山遺跡方四町II期官衙を区画する大溝の北辺東部に位置する。調査の結果、当初の想定通り調査区南端において、東西方向に延びる溝跡が検出された。方向もほぼ真東西方向であり、方四町II期官衙の北辺となる大溝と考えられる。溝の深さが20cmと浅く、上部は大きく削平されたものと考えられる。他地点での調査事例として、今回調査地点の西方約220mに位置する第79次調査区では、標高約11mで大溝が検出されている。今回の検出面の標高は10.3mであり、検出面がかなり低いことが窺える。なお、両者の溝跡底面の標高を比較すると、第79次調査区東壁ではSD617A溝跡の底面が10.2m、今回調査地点では10.1mであり、10cm程の高低差が認められる。



第21図 調査区平・断面図 (S=1/60)



1. 遺構検出状況（西から）



2. 遺構完掘状況（西から）

写真図版18 調査区全景



1. SD2155検出状況（西から）



2. SD2155検出状況（東から）



3. SD2155完掘状況（西から）



4. SD2155断面（調査区東壁）



5. 調査区南壁断面

写真図版19 構造調査状況・断面

第3章 大野田官衙遺跡

I. 大野田官衙遺跡の調査計画と実績

1. これまでの調査経過

これまでの大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡での発掘調査で、溝跡に囲まれた大型の掘立柱建物跡が6棟発見されている。建物跡は、いずれも桁行が真北方向の南北棟で、配置から溝跡に区画された中に3列の建物列が想定されている。そのうち複数棟が検出されている東列（SB31、121、135）と西列（SB64、464）の存在は確実と考えられた。これらの建物跡が特徴的なのは、総柱建物跡2棟（SB64、121）と桁行が10間となる個柱建物跡2棟（SB135、464）が含まれていることである。

これらの建物跡が真北方向を向いていることや、規則的に配置されていること、建物の規模に一定の規格性があること、さらに東列と西列で総柱建物跡と側柱建物跡がほぼ対象になっていることなどから、古代の官衙と考えられるようになった。しかし官衙としてどのような機能を負ったものなのかは、明らかになっていない現状である。それは「富沢駅周辺土地区画整理事業」に伴う発掘調査が、道路部分を中心に年次別の異なる調査であったため、遺構が発見されても、遺構の全容を把握するための調査や造構配置を想定した調査が実施できなかったためである。それを補完するため、文化庁、宮城県教育庁文化財保護課と協議の上、平成20年度から国庫補助事業の計画を一部変更して調査を実施するようになっている。

また平成21年7月に大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡で発見されている官衙関連の遺構を、大野田官衙遺跡として登録している。



第22図 大野田官衙遺跡と重複する遺跡群 (S=1/10000)

2. 調査計画

発見されている官衙関連遺構の範囲と構造を明らかにし、官衙の年代、機能を明らかにすることを目的として、官衙南部（a、f区）、官衙内部中央（b、c区）、官衙内部建物西列（d、e区）の約1,000m²を調査する予定を立てた。これはこれまでに明らかにならない官衙中央部と、建物西列の様相の把握に主眼を置いていたものである。

とくに官衙中央部では、想定したような南北棟の建物による中央列が存在するのか、あるいは東西棟の建物が存在し主要な殿舎の検出につながる可能性も考えられたからである。

しかし当初予定したd、e、f区では、調査をすることが出来なかった。d、e区では隣接する道路部分での調査と運動した調査を予定していたが、道路部分での調査が今年度以降になったためである。f区については、敷地の形状、ならびに堀による段差などの関係で、隣接地との間で配慮すべき点が派生したためである。今後は周囲での調査状況、成果に合わせて、あらためて調査の実施を検討していくことにする。

なお区画整理に伴う道路部分での調査で、官衙の西辺となる溝跡が2箇所で検出されたことから、追加調査としてg区の調査を実施した。また官衙中央の様相把握のためh、i区を、官衙の広がりを確認するためj区をさらに追加することとした。

3. 遺跡概要

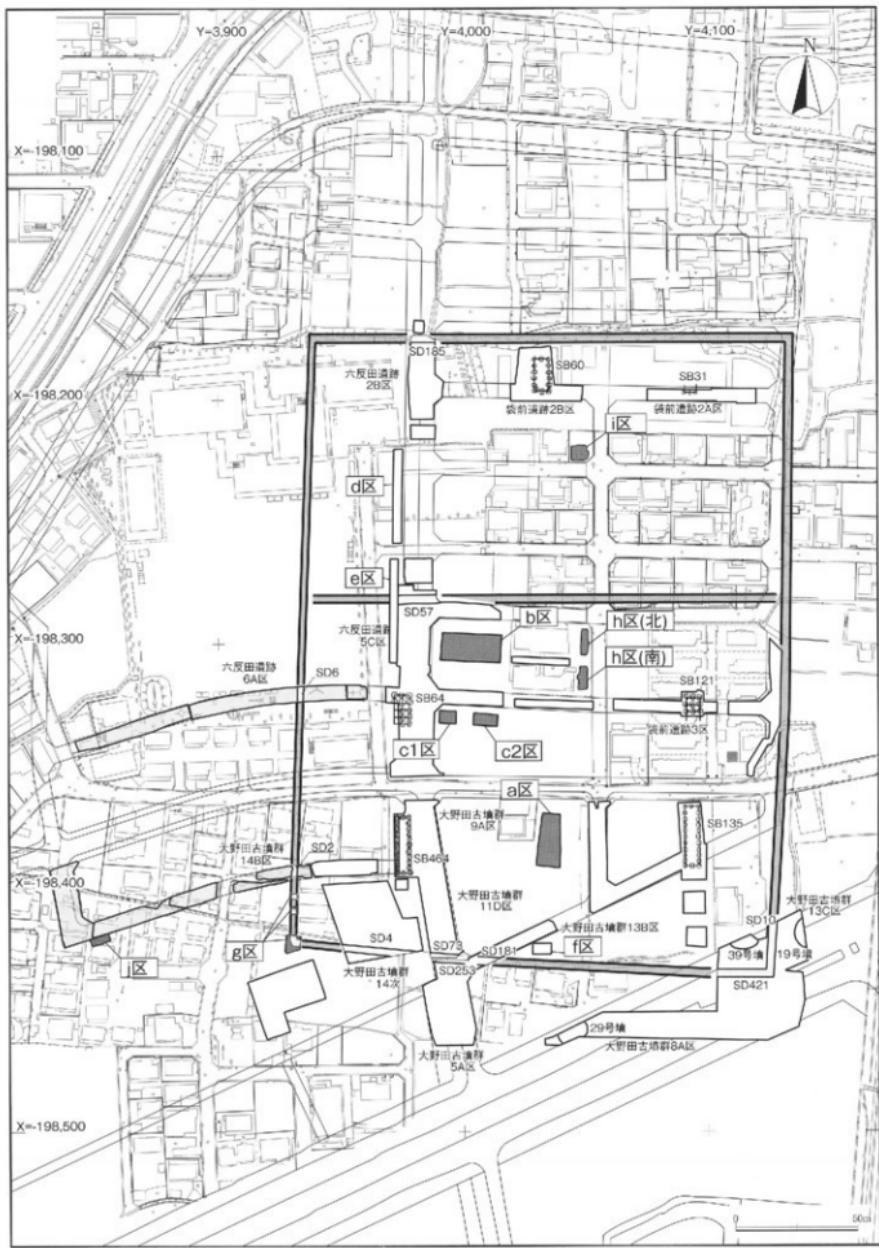
(1) 地理的環境

大野田官衙遺跡は仙台市南東部の太白区大野田に所在し、市営地下鉄南北線富沢駅の北東400mに位置している。遺跡周辺の地形について、西方では奥羽山脈の東麓から派生する青葉山丘陵が伸び、その丘陵線を断層の長町-利府線が区切っている。その丘陵を貫流する形で名取川、広瀬川が東流しており、丘陵部では4~5段の段丘面が形成される。また、丘陵の東方では両河川の沖積作用により宮城野海岸平野が形成される。平野部のうち、両河川と長町-利府線で囲まれた部分は特に郡山低地と呼ばれ、名取川及び荒川などの支流河川により形成された自然堤防と後背湿地からなっている。荒川は名取川の北側を蛇行しながら東流しており、現在は富沢駅の北西約300mの地点で新荒川と旧荒川に分岐している。本遺跡はこの新、旧荒川に挟まれた地点にあり、旧荒川が大きく南へ流路を変える地点の南岸の自然堤防上に立地している。

(2) 歴史的環境

本遺跡周辺では後期旧石器時代より遺跡が形成される。西方の丘陵部では、河岸段丘上に山田上ノ台遺跡や川添東遺跡が立地し、ナイフ形石器が出土している。上ノ原山遺跡では川崎スコリア層の下層からも石器が出土しており、後期旧石器時代前半の可能性が指摘されている。一方、沖積地でも後期旧石器時代から遺跡が形成されている。本遺跡の北西に広がる富沢遺跡からは石器だけでなく、当時の森林跡や、焚火跡と考えられる炭化物の集中部が発見された。また昆虫遺体や動物の糞なども出土し、当時の環境を知る上で貴重な情報が得られている。

縄文時代としては早期から集落が形成される。丘陵部では川添東遺跡や北前遺跡などで早期末の堅穴住居跡が検出され、沖積地では本遺跡の西約200mの下ノ内浦遺跡で早期前半の堅穴住居跡が検出されている。また前期では、丘陵部の三神峯遺跡において前期初頭の集落跡が発見されたほか、前期末までの遺物を含む包含層も確認され、土偶など豊富な遺物が出土している。中期には、低位段丘上に立地する上野遺跡から堅穴住居のほか、貯蔵穴と考えられているラスコ状土坑群や豊富な遺物が出土している。また山田上ノ台遺跡では中期末葉の堅穴住居跡が38軒検出されており、大規模な集落が形成されていたことが明らかとなっている。中期末葉から後期中葉にかけては、本遺跡周囲でも集落跡が発見され、多量の遺物が出土している。本遺跡の西約300mの下ノ内浦遺跡では中期末葉の集落跡が発見された。この集落の堅穴住居跡には敷石住居も含まれており、周辺地域との関連を考える上で注目さ



第23図 大野田官衙遺跡調査区配置図 (S=1/2000)

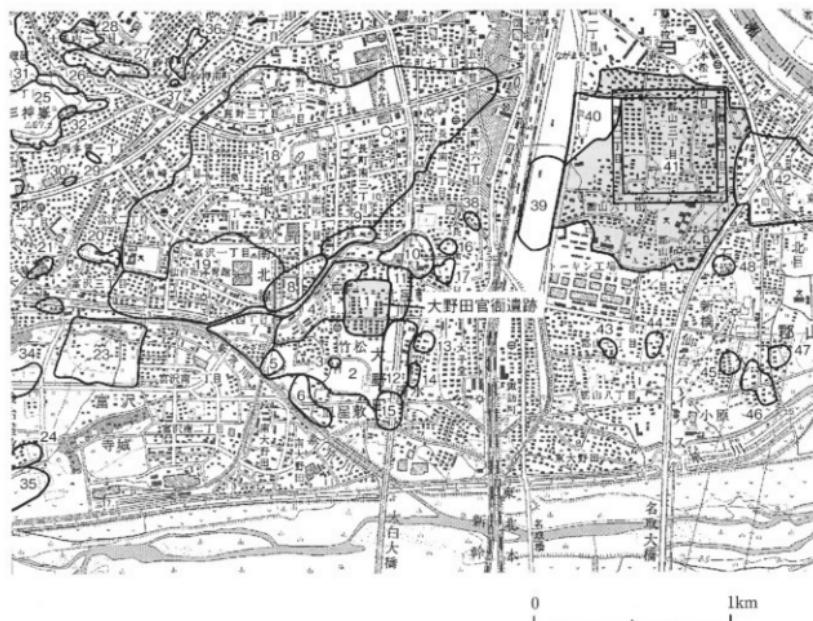
れる。また、本遺跡の西部で遺跡範囲が重複する六反田遺跡では、中期末から後期初頭を中心とした集落跡と遺物包含層が確認され、多量の遺物が出土している。下ノ内浦遺跡では後期前業の配石墓群が検出されている。さらに、本遺跡に東接する大野田遺跡では同時期の配石遺構群が検出されたほか、270点以上の土偶や硬玉製垂飾品など多数の祭祀関連遺物が出土した。その他、本遺跡の南東で接する王ノ塙遺跡や南西約400mの伊古田遺跡では後期前、中業の土器や上側が出土している。後期後半以降は遺構、遺物が減少し、堅穴住居跡もほとんど検出されなくなるが、郡山低地では本遺跡の北東約1.5kmの郡山遺跡において、後期後業の遺構と遺物、晚期後半の土器が出土している。

弥生時代では引き続き遺跡数が少ないが、郡山遺跡では前期、中期の土器が出土したほか、中期中頃以前とされる水田跡が検出されている。また、郡山遺跡に西接する西台畠遺跡や長町駅東遺跡からは、中期の土器棺墓、土坑墓群が検出されており、当時の葬制を考える上で重要な遺跡である。また、富沢遺跡からは中期以降の水田跡が幾層にも重なって検出された。以後近代まで、各時代の水田層が同様に重なって検出されており、富沢遺跡が生産域として利用され続けた様子が窺える。さらに、南接する山口遺跡でも後期の水田跡が検出されている。その他、下ノ内浦遺跡からは後期の上器棺墓、土坑墓、堅穴遺構等が検出されたほか、副葬品と考えられる石包丁が出土するなど貴重な事例が確認されている。また丘陵部では、本遺跡の北西約2kmの土手内遺跡より後期と考えられる堅穴住居跡が検出されている。

古墳時代には、郡山低地や西方の丘陵裾部に古墳が多数築造される。時期別に概観すると、前期では本遺跡周囲において堅穴住居跡が検出され、居住域であったことが窺える。遺跡範囲が南部で重複する大野田古墳群や六反田遺跡、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡で堅穴住居跡が數軒ずつ検出されている。一方、丘陵裾部では原遺跡において方墳が築造されており、原遺跡や土手内遺跡、砂押古墳の埴丘下部から堅穴住居跡が検出されている。中期では、前半期は古墳が築造されておらず、5世紀後半から6世紀にかけて多数の古墳が築造される。本遺跡の南側において、大野田古墳群、六反田遺跡の範囲内に前方後円墳1基を含む44基の古墳が発見されている。特に南西約150mに位置する春日社古墳において、主体部から革盾や鐵錐などの副葬品が発見されている。同時期には丘陵裾部でも古墳が築造され、裏町古墳、兜塚古墳、砂押古墳など主要な前方後円墳、円墳が存在するほか、三神峯古墳群や原遺跡で小規模な円墳も築造されている。また、この時期の古墳には埴輪が樹立されるが、三神峯古墳群が立地する丘陵斜面には埴輪窓である富沢窓跡も発見されている。一方集落跡としては、六反田遺跡や下ノ内浦遺跡、丘陵部の土手内遺跡などで堅穴住居跡が検出されている。その後7世紀になると、墓域は丘陵部に移り横穴墓が形成される。平野部では、広瀬川左岸の自然堤防上に立地する法領塚古墳や、名取川右岸の自然堤防上の安久東古墳群において横穴式石室をもつ古墳が築造される。また郡山遺跡では官衙が造営される。I期、II期に大別され、II期官衙には郡山魔寺が伴っている。石組池や畿内產土師器など重要な遺構、遺物が出土し、II期については多賀城以前の陸奥国府と考えられている。また、隣接する西台畠遺跡、長町駅東遺跡からは、関東地方と同様のカマド構造をもつ堅穴住居跡が多数検出され、関東系土師器も多数出土し、官衙造営に携わった人々の集落跡と考えられている。また本遺跡周辺は居住域だけでなく、生産域として利用されていた。富沢遺跡の水田跡のほか、古墳時代後半以降は王ノ塙遺跡や山口遺跡などで小溝状遺構群が検出され、畑地としても利用されていたことが窺える。

奈良、平安時代では本遺跡周辺において、北東約100mに位置する元袋遺跡や山口遺跡、下ノ内浦遺跡などで堅穴住居跡や小規模な掘立柱建物跡が検出されている。また生産域として、富沢遺跡の水田跡のほか、大野田古墳群、六反田遺跡、王ノ塙遺跡などで小溝状遺構群が検出され、下ノ内浦遺跡では畝状遺構も検出された。また、富沢遺跡で検出された奈良時代の水田跡は、真北方向を基準として区画された条里制に基づく水田と考えられる。なお、平安時代には山口遺跡でも真北方向を基準とする水田跡が検出されている。

中世では王ノ塙遺跡において、12世紀から14世紀にかけての武士の屋敷跡や同時期の幹線道路跡が検出されてい



- | | | |
|------------|-----------------|---------------|
| 1 大野田官衙遺跡 | 17 新田遺跡 | 33 原遺跡 |
| 2 大野田古墳群 | 18 富沢遺跡 | 34 銀治屋敷 A 遺跡 |
| 3 春日社古墳 | 19 山口遺跡 | 35 六本松遺跡 |
| 4 六反田遺跡 | 20 富沢清水遺跡 | 36 砂押屋敷遺跡 |
| 5 伊古田遺跡 | 21 富沢上ノ台遺跡 | 37 砂押古墳 |
| 6 伊古田 B 遺跡 | 22 堀之内遺跡 | 38 長町六丁目遺跡 |
| 7 下ノ内遺跡 | 23 富沢館跡 | 39 長町駅東遺跡 |
| 8 下ノ内浦遺跡 | 24 銀治屋敷 B 遺跡 | 40 西台塙遺跡 |
| 9 袋東遺跡 | 25 三神峯遺跡 | 41 郡山遺跡 |
| 10 元袋遺跡 | 26 土手内横穴墓群 A 地点 | 42 北目城跡 |
| 11 大野田遺跡 | 27 土手内横穴墓群 B 地点 | 43 的場遺跡 |
| 12 王ノ塙遺跡 | 28 土手内遺跡 | 44 箕ノ瀬遺跡 |
| 13 北屋敷遺跡 | 29 裏町東遺跡 | 45 欠ノ上 I 遺跡 |
| 14 長町清水遺跡 | 30 原東遺跡 | 46 欠ノ上 II 遺跡 |
| 15 直屋敷遺跡 | 31 芦ノ口遺跡 | 47 欠ノ上 III 遺跡 |
| 16 長町南遺跡 | 32 金山塙跡 | 48 矢来遺跡 |

第24図 大野田官衙遺跡と周辺の遺跡群 (S=1/25000)

る。また、墳墓跡や火葬墓、板碑など信仰関係の遺構、遺物も検出された。生産域としては、富沢遺跡や山口遺跡、郡山遺跡の南方に位置するノゾミ I 遺跡において水田跡が検出されている。また城館跡として、本遺跡の西約1.2kmの笊川右岸に富沢館跡が立地し、城館に伴うと考えられる溝跡が検出されている。

近世では元袋遺跡や富沢遺跡において、屋敷跡が検出されている。特に元袋遺跡では、伊達家の家紋入りの瓦や金箔瓦、漆器が出土したことから、伊達家と関係の深い家臣の屋敷跡と想定されている。さらに、富沢遺跡では長町五丁目地区、泉崎地区において近世墓群が検出されている。また本遺跡の北東約2kmの地点には、郡山遺跡に東接する形で北目城跡が所在し、近世初期の大規模な陣子掘が検出され、ヒトの頭蓋骨や様々な動物遺存体、建築部材など豊富な遺物が出土している。

4. 調査方法

(1) 調査方法

今年度は調査計画に準じて、官衙南部のa区を4月20日より、官衙中央部のb区を4月22日より、同じく中央部のc区を5月18日より調査を開始した。また、区画整理事業に伴う発掘調査において、六反田遺跡6A区、人野田古墳群14B区よりそれぞれ南北方向に縱走する溝跡が検出された。官衙の建物配置や他辺での区画溝のあり方から、この南北方向の溝跡は官衙の西辺を区画するものと考えられた。この調査成果を受けて、g区の調査を6月29日より行った。さらに、官衙中央部のh区を11月9日、i区を11月19日より、官衙外の南西部のj区を12月7日より調査を開始した。

今回の調査は官衙関連の遺構の有無を確認する調査であるため、小溝状遺構群（註）など他の遺構は検出のみに留めている。なお官衙に関連する可能性が考えられた遺構については、土層の堆積状況や遺物の出土を確認するため、部分的に調査を行っている。

(2) 基本層序

基本層の堆積状況は調査区ごとに異なっていたが、土層の特徴や層の堆積状況から、各地点で対応すると考えられる十層I～V層が認められた。I層はII耕作土であり、各調査区で堆積している。調査区により細分されるが、最上層は現代の耕作土と考えられる。II層は黒褐色の粘土質シルト、粘土層であり、下面の凹凸が著しい地点もあり、以前の耕作土の可能性が考えられる。III層は酸化鉄を多く含む褐色土層であり、土質は調査区により異なる。IV層は黒褐色の粘土質シルト、粘土層である。調査区により、やや明るい暗褐色のIVa層と下部の黒褐色のIVb層に細分される。下面の凹凸が著しい地点があること、下層で小溝状遺構群が検出されることから耕作土の可能性が考えられる。V層は褐色土層であり、土質は粘土が主体を占めるが、調査区により砂質シルトの地点もある。今回の調査で検出された小溝状遺構群など、遺構の多くはこのV層上面で検出されている。

なお各調査区の基本層序については、検出された土層に対し、調査区ごとに上層からI層、II層としている。全調査区で検出されたI層を除く、II層からV層に対応する層については、「-層」と文中に表記した。

註 小溝状遺構群については、上層の比較的浅い小規模な溝跡が複数条平行し、一群として捉えられるものを指す。この遺構群はこれまでの調査で耕作の痕跡であることが明らかになっているが、今回検出された溝跡のうち、同様の性格と考えられる溝跡でも、調査区内で複数条の群として認められないものに対しては、「小溝」ではなく溝跡として表記した。なお、遺物が出土した小溝や、断面図を掲載する必要がある小溝についてのみ、報告の中で個別の枝番号をつけて表記した。

II. a区の調査

1. 調査概要

a区は官衙南部の中央に位置する。官衙の建物配置として、中央列の南北棟が想定された地点である。南北22m×東西9.5mの調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、精査を行った。その結果、IV層上面で性格不明遺構と小溝状遺構群が検出された。一部で掘下げを行い、その後写真撮影と図面作成をして調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が60~90cmあり、それより下にI~IV層が確認された。I層は旧水田耕作土である。II層は土色、土質の変化により細分される。上層のIIa層は黒褐色の粘土質シルト層であり、「II層」(註)に相当すると考えられる。マンガン粒を多量に含む層であり、しまりが非常に強い。IIb層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「III層」に相当すると考えられる。III層も土色、土質の変化により細分される。IIIa層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「IVa層」に相当すると考えられる。下層のIIIb層は黒褐色の粘土層であり、「IVb層」に相当すると考えられる。IV層は褐色の粘土層であり、「V層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

IV層上面において、性格不明遺構1基、小溝状遺構群3群、ピットが検出された。

SX4性格不明遺構

調査区北西部に位置し、西端部は調査区外へ延びている。直径5mの円形を呈し、深さは約30cmである。堆積土は粘土層が5層確認された。第5層からは上器細片と考えられる粒子状の混入物が微量に検出された。さらに第1層から土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群1、3に切られ、小溝状遺構群5を切っている。

小溝状遺構群1

調査区を北東から南西方向へ斜走する溝跡群で、8条検出された。上幅約30cmで、方向はN-8~10°-Eである。堆積土については、調査区南壁の断面観察の結果、IIIb層と同質である。a区で検出された遺構では最も新しいものである。

小溝状遺構群3

調査区を南北方向に継走する溝跡群で、10条検出された。上幅20~30cmで、方向はN-0~27°-Wとばらつきが認められる。小溝状遺構群1に切られ、SX4性格不明遺構、小溝状遺構群5を切っている。

小溝状遺構群5

調査区を東西方向に横断する溝跡群で、17条検出された。上幅20~30cmで、方向はE-6°-SからE-10°-Nまでである。調査区北部では条数が少なく、方向が真東から南へ振れるに対し、南部では密集しており、方向が真東から北へ振れているため、別的小溝状遺構群として区分されるものも含まれる可能性がある。a区で検出された遺構では最も古いものである。

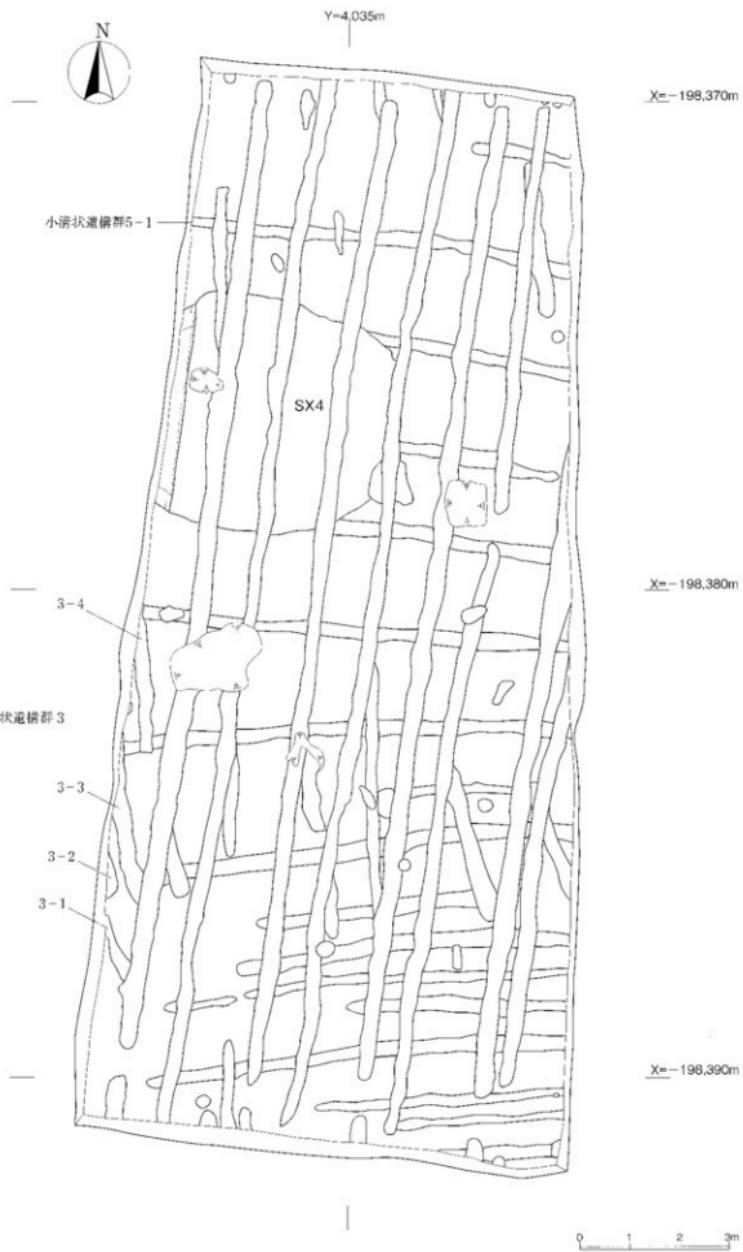
また、調査区内で検出されたピットについては、堆積土が小溝状遺構群のものと類似している。遺構外の出土遺物としては、IV層上面より土師器小片が少量出土している。

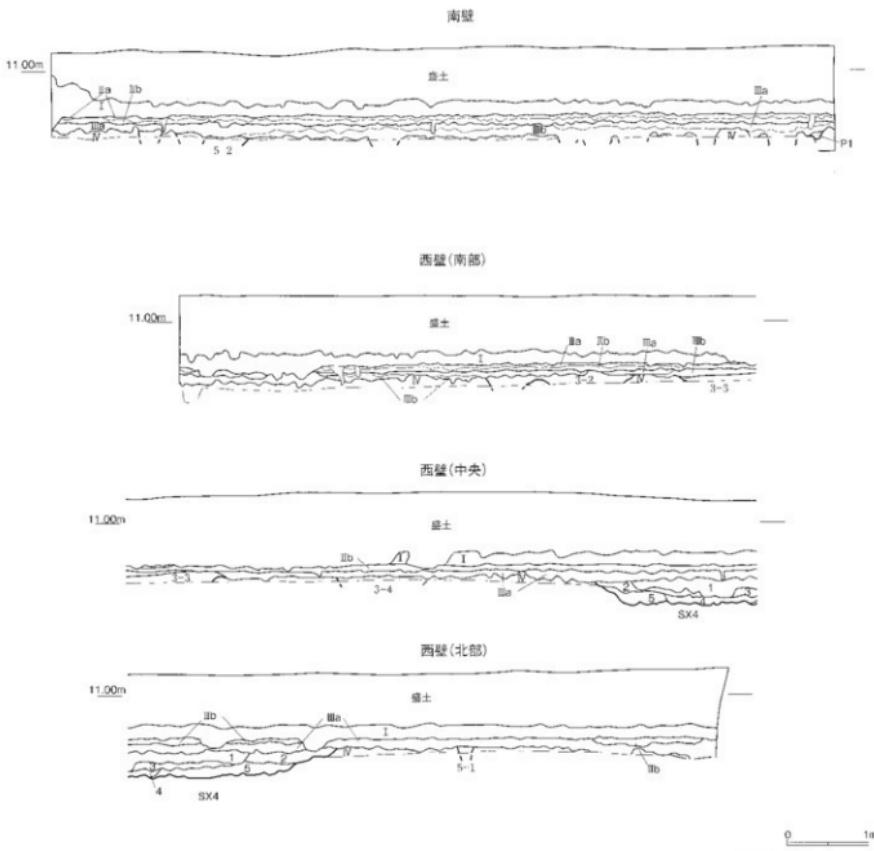
4. まとめ

調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。a区において、東列、西列と対応する中央列南部の南北棟は存在しないことが明らかとなった。

なお、SX4性格不明遺構については、貼床などが認められず、遺物の出土も極めて少ないとから、堅穴住居跡ではないと考えられる。遺構の年代についても不明である。

註 「 」内はI-I (2) の「基本層序」で示した基本層位である。以下、各区の調査についても同様である。





層位	色	漢	土・実	層	考
島木層	I	75GY3/2 塩褐色	砂上 泥炭山層、下部は酸化鉄多量、マンガン粒やや多量		
	IIa	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト		マジン粒多量、酸化鉄多量
	IIb	10YR3/4 細褐色	シルト質粘土		酸化鉄、マンガノ粒非常に多量
	IIa	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土		鐵仁灰、マンガン粒多量
	IIIb	10YR2/2 黑褐色	粘土		酸化鉄粒や多量、マンガン粒多量、シルト少量、粘性がⅢa層より強い
	IV	10YR4/4 灰色	粘土		酸化鉄粒、マンガン粒多量、シルト少量
SX4	I	10YR4/2 底青褐色	粘土		酸化鉄粒、マンガン粒少量
	2	10YR4/4 灰色	粘土		酸化鉄粒、マンガン粒少量
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土		マンガン粒や多量
	4	10YR2/2 黑褐色	粘土		灰青色、幾十粒、酸化鉄微量、マンガン粒や多量、下部で瓦礫ブロック微量
	5	10YR2/4 灰褐色	粘土		鐵代灰粒、マンガン粒や多量、下部で瓦礫ブロック多量
小窓3-1	1	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト		鐵代灰粒、マンガン粒や多量、下部で瓦礫ブロック多量
小窓3-2	1	10YR3/3 細褐色	粘土質シルト		灰青色地質、酸化鉄微量、マンガン粒多量、N層ブロック少量
小窓3-3	1	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト		鐵代灰粒微量、マンガン粒少量、N層ブロック多量
小窓3-4	1	10YR4/4 黑褐色	粘土質シルト		鐵代灰粒や多量、マンガン粒多量、N層ブロック少量
小窓5-1	1	10YR4/4 にじい紫褐色	シルト質粘土		鐵代灰粒少量、マンガン粒や多量、N層ブロック少量
小窓5-2	1	10YR2/2 黑褐色	粘土		マンガン粒や多量、シルト少量、瓦礫ブロックや多量
P1	1	10YR2/3 黑褐色	粘土		鐵代灰粒、マンガン粒少量、色調はⅢb層より暗い
P2	1	10YR2/3 黑褐色	粘土		瓦礫と瓦類

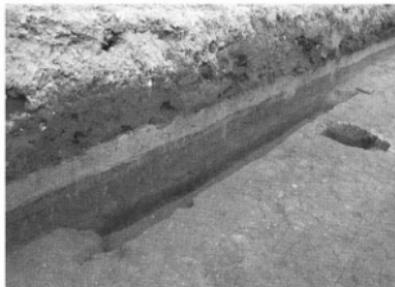
第26図 a区壁断面図 (S=1/60)



1. 遺構検出状況（南から）



2. SX4検出状況（東から）



3. SX4断面（調査区西壁 南東から）

写真図版20 a区

III. b 区の調査

1. 調査概要

b 区は官衙内部の中央に位置する。官衙の建物配置として、中央列上の南北棟や、東西棟が想定された地点である。南北12m×東西25mの調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、II層上面で精査を行った。II層上面で遺構が検出されなかつたため、さらにIII層上面で精査を行った。その結果、竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構が2基検出された。性格を明らかにするため掘下げを行い、その後写真撮影と図面作成をして、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が60~120cmあり、それより下にI~III層が確認された。I層は旧水田耕作土である。土色によりIa~Ic層に細分される。II層は粘土層であり、土色により細分される。上層のIIa層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層で、「IVa層」に相当する。下層のIIb層は暗褐色の粘土層で、「IVb層」に相当する。III層は褐色の粘土層であり、「V層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

III層上面において、性格不明遺構2基、小溝状遺構群3群、ピットが検出された。

SX8性格不明遺構

調査区南西部に位置する。南北2m×東西3mの長方形を呈するが、北辺がやや歪んでいる。深さは中央部で20~30cm、ピット状に落ち込む部分では50cmとなる。断面形は不整形を呈しており、中央部で急傾斜となり一段と深くなる。また、ピット状の落ち込みが認められるなど、底面の凹凸が著しい。堆積土は2層あり、第1層下面では部分的に焼土の集中箇所が認められた（第29図）。また、ピット状の落ち込みについては、堆積土の第2層が落ち込んでおり、別遺構や柱穴ではないことが確認された。遺物は第1層より土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群6、7に切られている。

SX9性格不明遺構

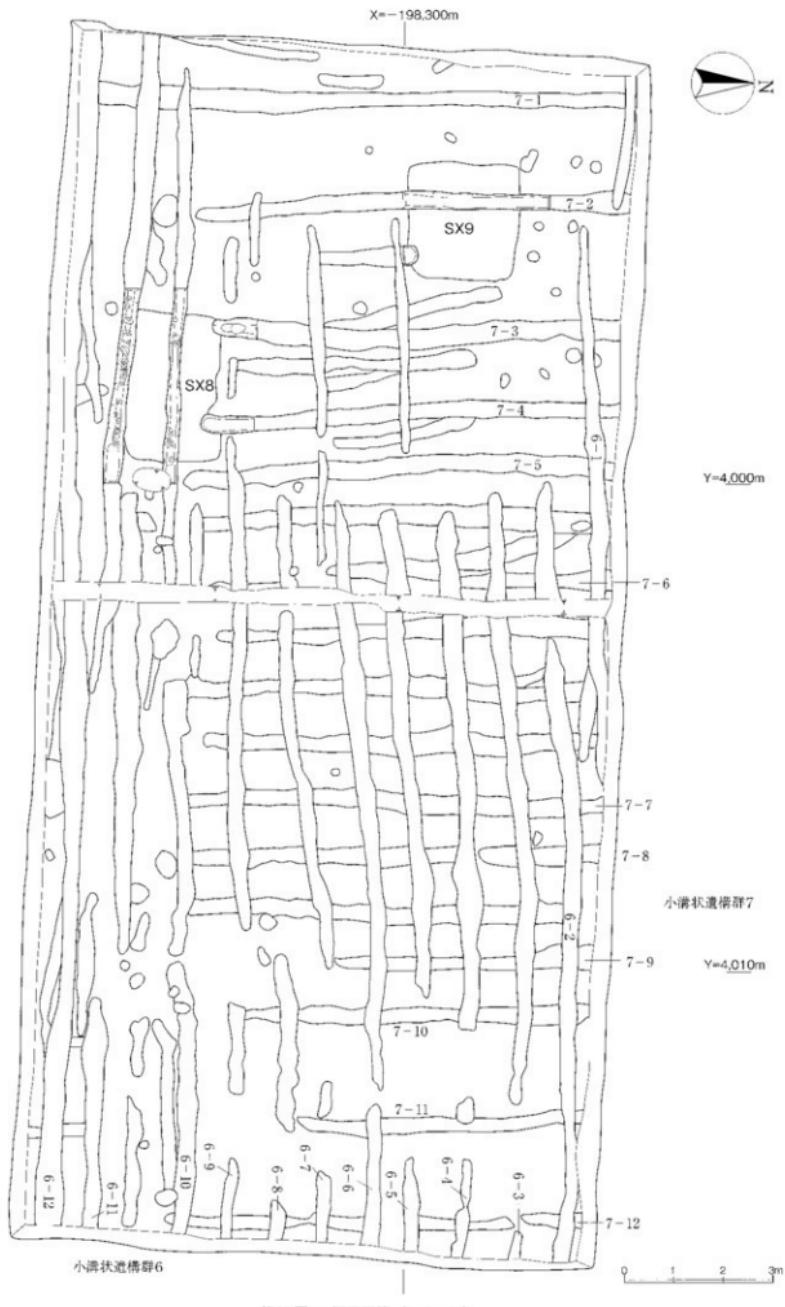
調査区北西部に位置し、一辺約3mの正方形を呈している。深さは中央部で20cmである。断面形は不整形を呈し、中央部ほど緩やかに深くなる。堆積土は粘土層が2層確認され、第1層中では部分的に炭化物、焼土の集中箇所が認められた。遺物は第1層より土師器小片が数点出土した。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群7に切られている。

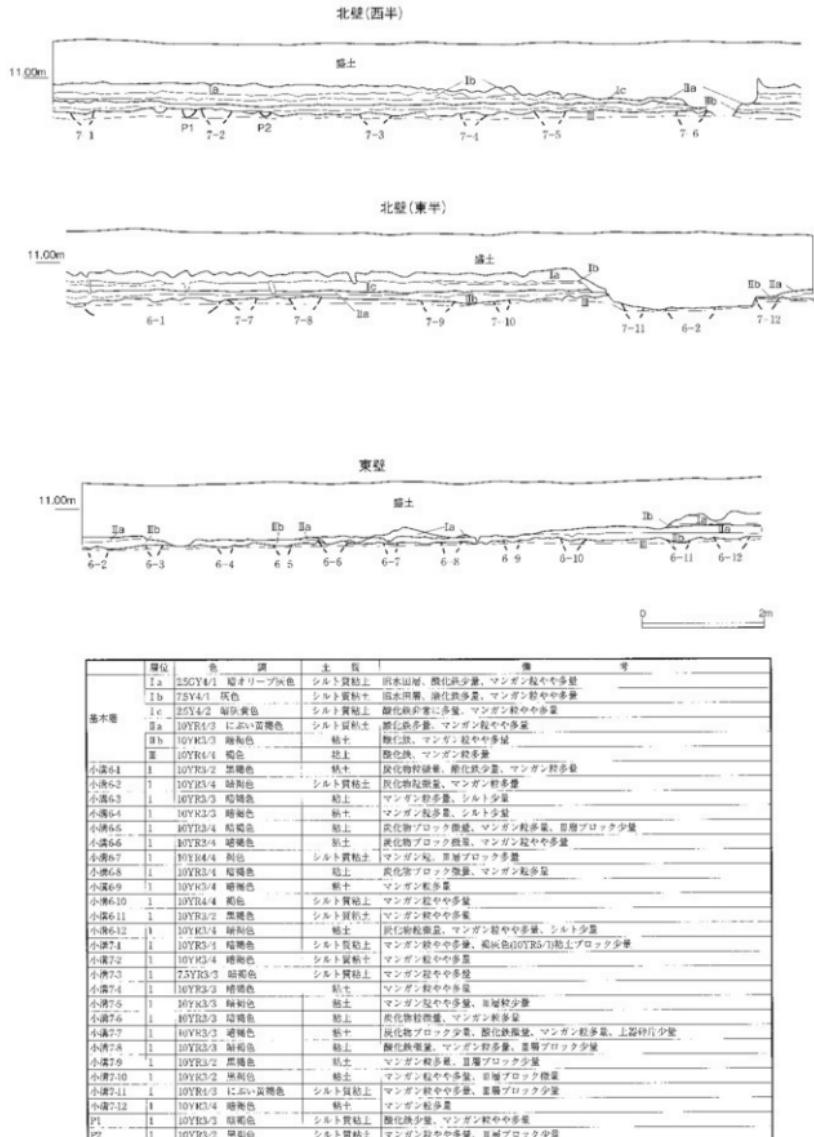
小溝状遺構群6

調査区を東西方向に横断する溝跡群で、17条検出された。性格不明遺構の調査に伴い、部分的に調査を行っている。上幅20~40cm、深さは10~20cmであり、底面は凹凸が著しい。方向については、調査区東端部でE-1~5°-S、中央部ではE-2~4°-Nとなり、同一の小溝跡でも方向が緩やかに変化するものが多い。堆積土は1層であり、暗褐色の粘土層である。b区で検出された遺構で最も新しいものである。なお、この小溝状遺構群は同方向へ延びる溝跡間で重複関係にあるものも一部認められる。

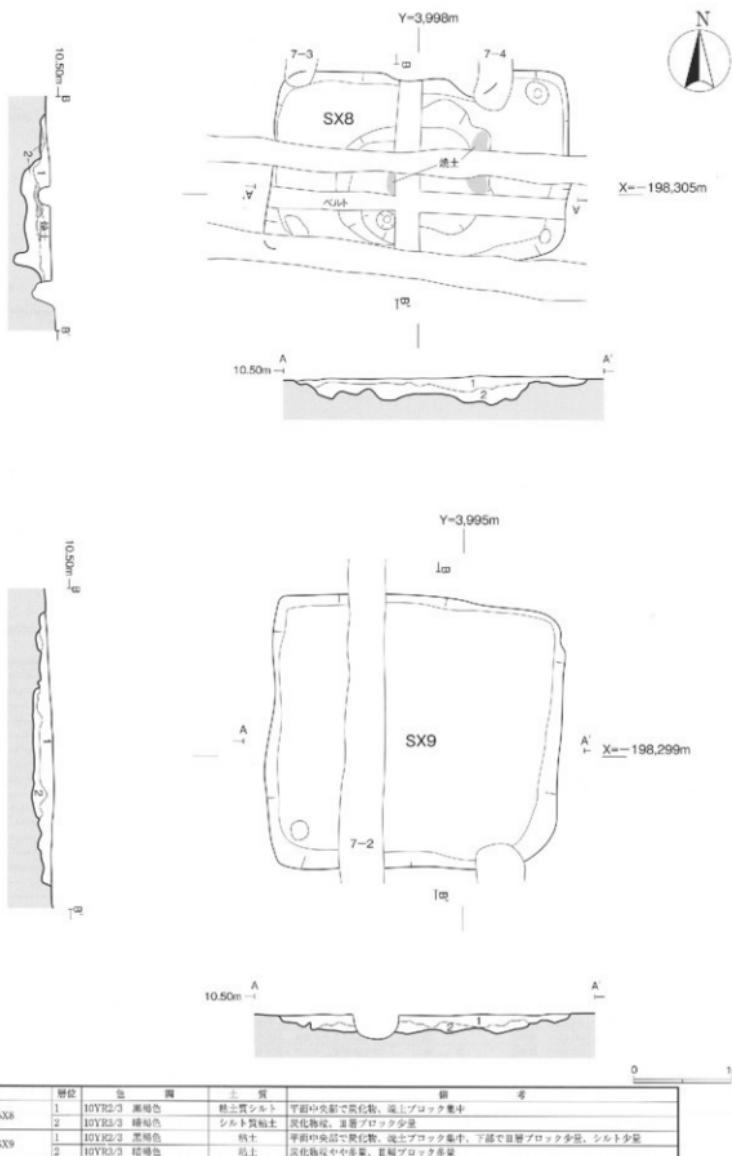
小溝状遺構群7

調査区を南北方向に縱走する溝跡群で、20条検出された。性格不明遺構の調査に伴い、部分的に調査を行っている。上幅30~40cm、深さは約10cmであり、底面は比較的平坦である。方向はN-0~3°-Wである。堆積土は1層であり、暗褐色の粘土層である。また小溝状遺構群7-7からは、非クロロ上師器のC-4高壙（第30図2）や上師器小片が





第28図 b区壁断面図 (S=1/80)



第29図 SX8・9性格不明礫漂平・断面図 (S=1/50)



No.	登錄No	遺構・場所	種別・形態	法面	調査・特徴
1	C3	裏面	非クロロ土師器・高杯	不明	外面：ヘラナデ 内面：ヘラケズリ・ヘラテダ 砂粒・石英を含む
2	C4	SH77-1層	非クロロ土師器・高杯	不明	外面：ケズリ→ナデ？ 内面：上部ヘラナデ？ 内外面とも全体的に施跡、砂粒・石英・白粉少量

第30図 b区出土遺物 (S=1/3)

出土した。C-4高杯は脚部片であり、直径約1cmの透かし孔をもつものである。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群6に切られ、SX8、SX9性格不明遺構を切っている。

小溝状遺構群については、上記2群のほか、調査区西部において、重複関係の古い北西から南東方向へ斜走する小溝跡が5条検出されている。

遺構外の出土遺物としては、Ⅲ層上面より非クロロ土師器のC-3高杯（同図1）や壺の口縁部片などが出土している。また、弥生土器と考えられるB-1深鉢も出土した。体部下半の器厚が2~3mmと非常に薄い個体である。

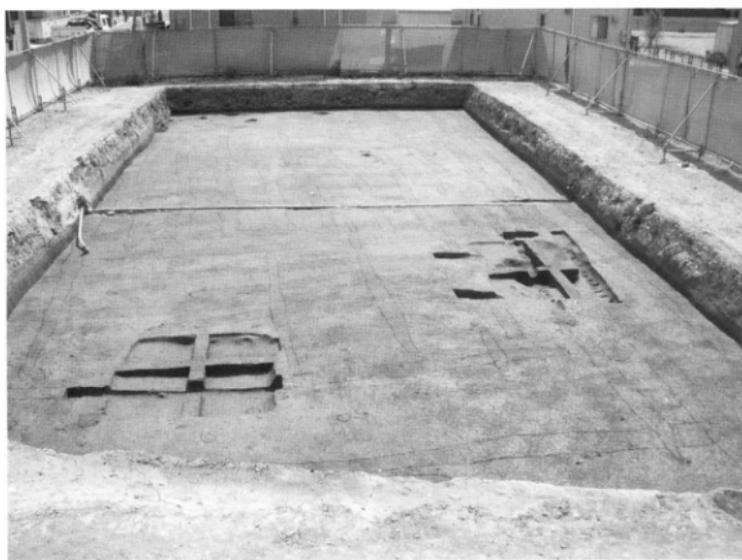
4.まとめ

調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。a区の結果と合わせ、東列、西列と同様の中央列の存在がないことが明らかとなった。

また、SX8、SX9性格不明遺構については、炉跡などの施設や貼床が認められず、底面も平坦でないことなどから、堅穴住居跡ではないと考えられる。遺物も少ないため、遺構の年代等も不明である。

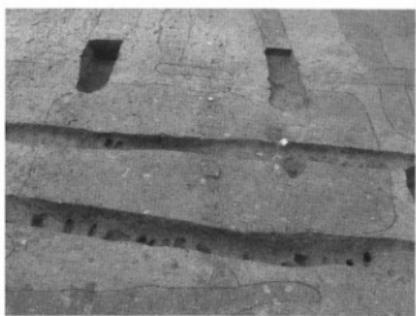


1. 遺構検出状況（西から）



2. 遺構探削状況（西から）

写真図版21 b区全景



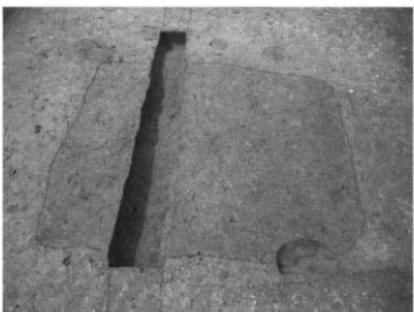
1. SX8検出状況（南から）



2. SX8掘削状況（南から）



3. SX8南北ベルト西壁断面



4. SX9検出状況（南から）



5. SX9掘削状況（南から）



6. SX9南北ベルト西壁断面

写真図版22 b区遺構調査状況

IV. c 区の調査

1. 調査概要

c 区は官衙内部の中央に位置する。西側に隣接して、SB64 縦柱建物跡が検出された六反出遺跡4B区が位置している。このSB64建物跡に直交する東西棟の存在を確認するために調査を行った。調査区は道路を挟んで、西側のc1区と東側のc2区に分け、南北5.5m×東西7mのc1区、南北5m×東西10mのc2区として調査区を設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、Ⅲ層上面で精査を行った。その結果、c1区南東隅において土坑が検出されたため、一部拡張を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が約1mあり、それより下にⅠ～Ⅲ層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作上である。Ⅱ層は黒褐色の粘土層であり、c2区南部で部分的に検出された。「Ⅳb層」に相当する。Ⅲ層は褐色の粘土層であり、「V層」に相当する遺構検出面である。c1区ではこの上面がほぼ全域でグライ化している。

3. 遺構と遺物

Ⅲ層上面において、土坑2基、性格不明遺構1基、溝跡1条、小溝状遺構群3群、ピットが検出された。

SK10土坑

c1区南東隅に位置し、南北1m×東西1.2mの不整円形を呈している。深さは約30cmで、断面形は逆台形を呈すると考えられる。堆積土は2層で、第1層はにぶい黄褐色の粘土層、第2層は黒褐色の粘土層である。第2層中には炭化物がブロック状に多量に含まれている。また、遺物も第2層中より多量に出土している。ロクロ土師器のD-2窓（第33図2）は、外側に張り出す口縁部をもつ壺である。またD-3窓（同図4）は、内面黒色処理された壺の底部片で、底面の回転糸切の痕跡が複数回重なっている。その他に静止糸切の可能性がある須恵器のE-2窓（同図3）なども出土している。第1層からは内面黒色処理された非ロクロ土師器の窓片などが少量出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群11を切っている。

SK14土坑

c1区南東隅に位置し、SK10土坑に隣接する。直径約80cmの円形を呈すると考えられるが、東部は調査区外に延びている。上面より須恵器のE-3窓（同図6）や土師器片が出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群11を切っている。

SX13性格不明遺構

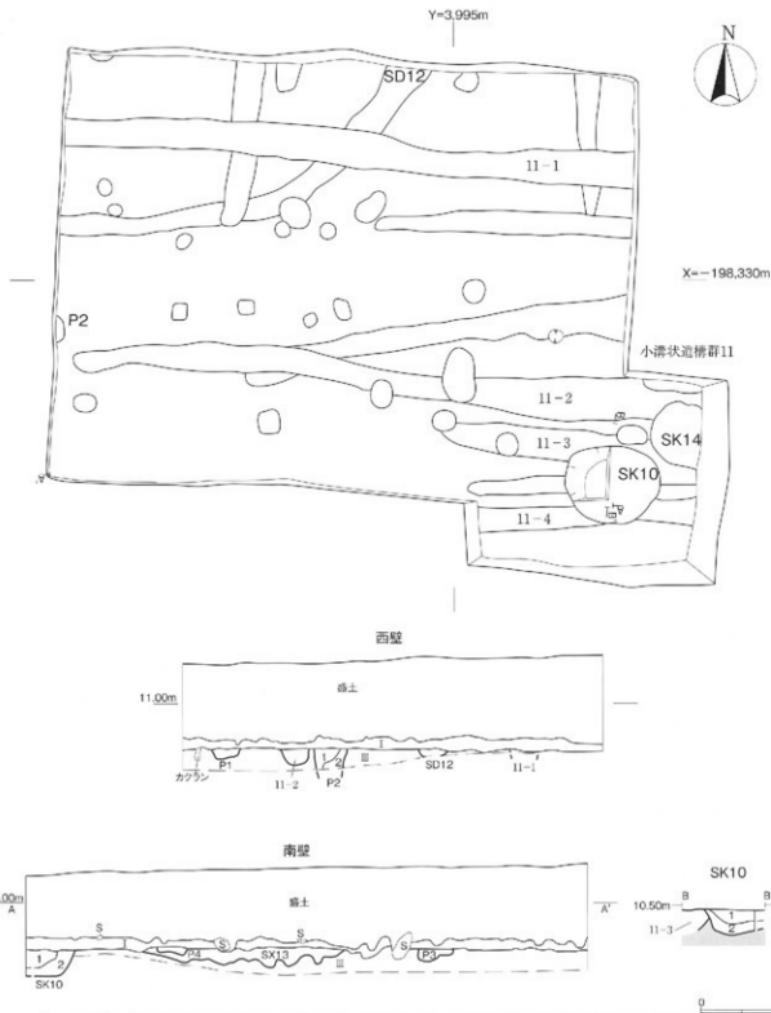
c1区南壁中でのみ検出された。調査区端部に僅かに延びていたと考えられるものである。断面形は不整形を呈し、凹凸が著しい。上幅2.5m、深さは最深部で約25cmである。堆積土は黒褐色の粘土層1層である。ピット4に切られている。

SD12溝跡

c1区北西部で検出された溝跡である。上幅20～30cmで、東西方向から北へ湾曲して延びている。小溝状遺構群やピットに切られ、c1区で検出された遺構では最も古いものである。

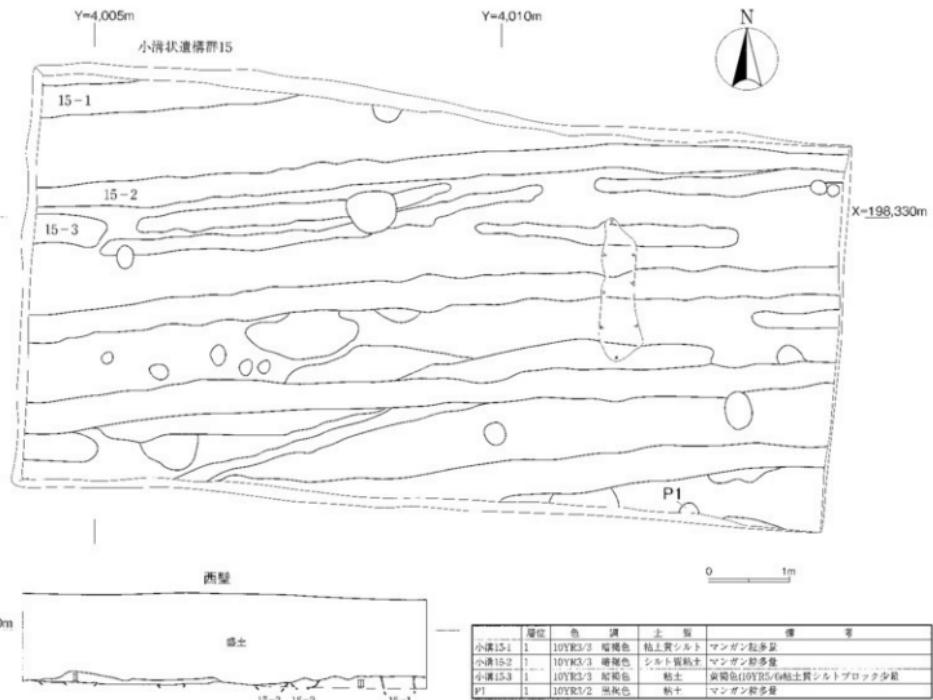
小溝状遺構群11

c1区を東西方向に横断する溝跡群で、6条検出された。上幅20～50cmで、方向はE-2°-NからE-8°-Sである。小溝状遺構群11-2から土師器小片が、小溝状遺構群11-3から須恵器窓片が出土した。遺構の重複関係としては、SK10、SK14土坑に切られ、SD12溝跡を切っている。



層位	色	四 土 質	面 号
基本層	I 2SY4/4 黒オリーブ灰色	粘土	田水田層、褐化鉄鉱斑、マンガン粒少量
	II 10YR2/2 黑褐色	粘土	マンガン粒多量、マンガン粒や多量
	III 10YR4/4 黑褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量で多量、調査区大半でオリーブ黒色(7SY3/2)にグライ化
SK10	1 10YR4/2 にくい黄褐色	粘土	マンガン粒や多量
	2 10YR2/2 黑褐色	粘土	炭化物ブロック多量、土礫片を含む
SX13	1 2SY3/2 黑褐色	粘土	炭化物粒多量、マンガン粒や多量
SD12	1 5Y2/2 オリーブ黒色	粘土	炭化物粒少量、マンガン粒や多量、下層に木腐ブロックを含む
小浦11-1	1 2SY3/1 黑褐色	粘土	炭化物粒微弱、マンガン粒少量
小浦11-2	1 7SY3/1 オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物粒微量、炭化鉄鉱少量
P1	1 5Y3/2 オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物粒微量、難透水性少量、オリーブ黒色(7SY3/2)粘土ブロック多量
	1 2SY3/1 黑褐色	シルト質粘土	炭化物粒微量、難透水性少量、オリーブ黒色(7SY3/2)粘土ブロック多量
P2	1 5Y3/2 オリーブ黒色	粘土	炭化物粒微量、難透水性少量、オリーブ黒色(7SY3/2)粘土ブロック多量
P4	1 2SY3/1 黑褐色	粘土	炭化物粒微量、難透水性少量、オリーブ黒色(7SY3/2)粘土ブロックや多量

第31図 c1区平・断面図 (S=1/60)



第32図 c2区平・断面図 (S=1/60)

小溝状遺構群15

c2区を東西方向に横断する溝跡で、9条検出された。上幅20~40cmで、方向はE-0~6°-Nである。

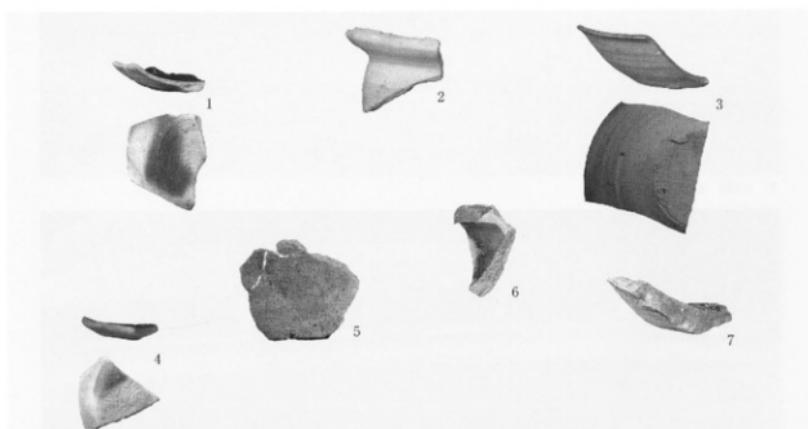
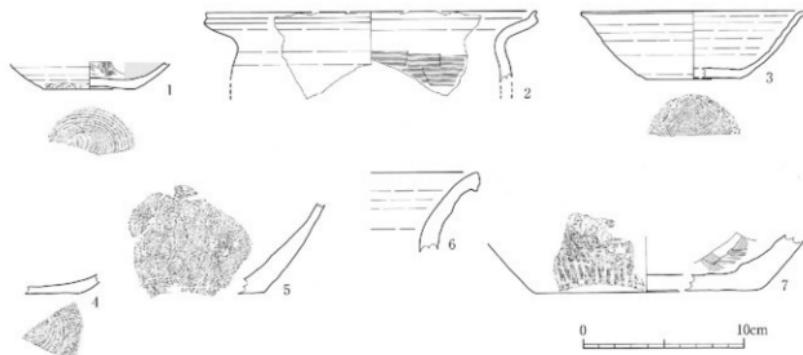
小溝状遺構群については、上記2群のほか、c1区北部において、南北方向へ縱走する溝跡群が3条検出されている。また、小溝状遺構群11、15に切られる溝跡も確認されている。

遺構外の出土遺物としては、c1区Ⅲ層上面より土師器片のほか、磨滅の著しい平瓦片、縄文土器片が各1点出土し、c2区Ⅲ層上面より土師器小片が少量と須恵器片1点が出土している。

4.まとめ

調査の結果、官衙に関連すると考えられる掘立柱建物跡などの遺構は検出されなかった。

またSK10土坑については、多量の遺物が出土したもの的小破片が多く、遺構の時期決定が可能なものが少ない。しかし、図示したD-2窓やE-2窓と同様のものと考えられる遺物が、六反田遺跡第5次調査において、SH110住居跡から出土しており、遺構、遺物は9世紀中葉と位置付けられている。今回出土したD-2窓やE-2窓も同時期と考えられ、下層の第2層から出土していることから、SK10土坑も概ね9世紀中葉の年代が考えられる。また、SD12溝跡は規模や堆積土が小溝状遺構群と類似しており、畑の耕作等に関わる遺構の可能性がある。



No.	登錄No.	遺物・部位	地質・器種	直徑 (cm)	調査・特徴
1	D-1	SK10・2号	ロクロ土器唇・环	直径5.7	外面：ヨクナダ・タヌリ 内面：ヘラミガキ・黒色処理 研絨・石英ごく少少 白鉢少量
2	D-2	SK10・2号	ロクロ土器唇・奥	THB204 番大縁 (口縁直下) 20.8	内外面：ヨクナダ・内面外縁ヨクナダヘラナダ・砂粒・石英を含む
3	E-2	SK10・2号	同上唇・环	THD140 直径5.5 厚高4.2	内外面：ヨクナダ・他部（底部直上）同様大切り 砂摩・同様大切り
4	D-3	SK10・2号	ロクロ土器唇・环	不明	外面：擦減 内面：ヘラミガキ・黒色処理 成品・器底希望？ 研絨を含む
5	C-7	SK10・2号	赤セクロ土器唇・奥	不明	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ・ヘラナダ・白ナダ・底部：ヘラケズリ・研絨・石英を含む
6	E-3	SK11上面	灰黑器・奥	小明	内外面：ヨクナダ・他部・石英・白鉢少量
7	E-4	二層上面	灰黑器・奥	直径14 (参考)	外面：叩き・一部ヘラケズリ・内面・白ナダ・ヘラナダ・研絨・石英・白鉢少量・2mmの小石少量

第33図 c区出土遺物 (S=1/3)



1. c1区（北から）



2. c2区（北から）

写真図版23 c区全景



1. 2層遺物出土状況（北西から）
右…D-2甌 左…E-2杯



2. SK10断面（北西から）



3. c1区拡張部遺構検出状況（北から）

写真図版24 c1区SK10土坑

V. g区の調査

1. 調査概要

区画整理事業に伴う発掘調査において、六反田遺跡6A区、大野田古墳群14B区で、官衙の区画溝の西辺と想定される南北方向の溝跡が検出された。この成果を受けて、大野田古墳群14B区の南側にg区として3ヶ所の調査区を設定した。北側の2ヶ所は当初、一辺2mのトレンチを設定し、検出面の深度に応じて拡張した。この2ヶ所で溝跡がさらに南側へ延びることが確認されたため、南トレンチとして南北8m×東西6mの調査区を設定した（第34図）。北トレンチ2ヶ所は溝跡の検出に留め、南トレンチは他の溝跡との重複が認められたため、一部掘下げを行った。その後写真撮影と面図作成を行い、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が0.5~1.1mあり、それより下にI~V層が確認された。I層は旧耕作土であり、土質によりIa、Ib層に細分される。下層のII層も細分され、IIa層は灰褐色の粘土質シルト層である。北トレンチでは10cm程で、南トレンチでは部分的な堆積である。IIb層は黒褐色のシルト質粘土層で、「II層」に相当する。下面の凹凸が著しく、旧耕作土と考えられる。III層は暗褐色のシルト質粘土層であるが、南トレンチでは砂粒を多量に含む土層となっている。IV層は黒褐色の粘土質シルト層であり、「IV層」に相当する。南トレンチ南部で確認された。V層は褐色の砂質シルト層で、「V層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

III層上面において、性格不明遺構1基、ピット5基、V層上面において、溝跡2条、性格不明遺構1基、ピットが検出された。

SD2溝跡

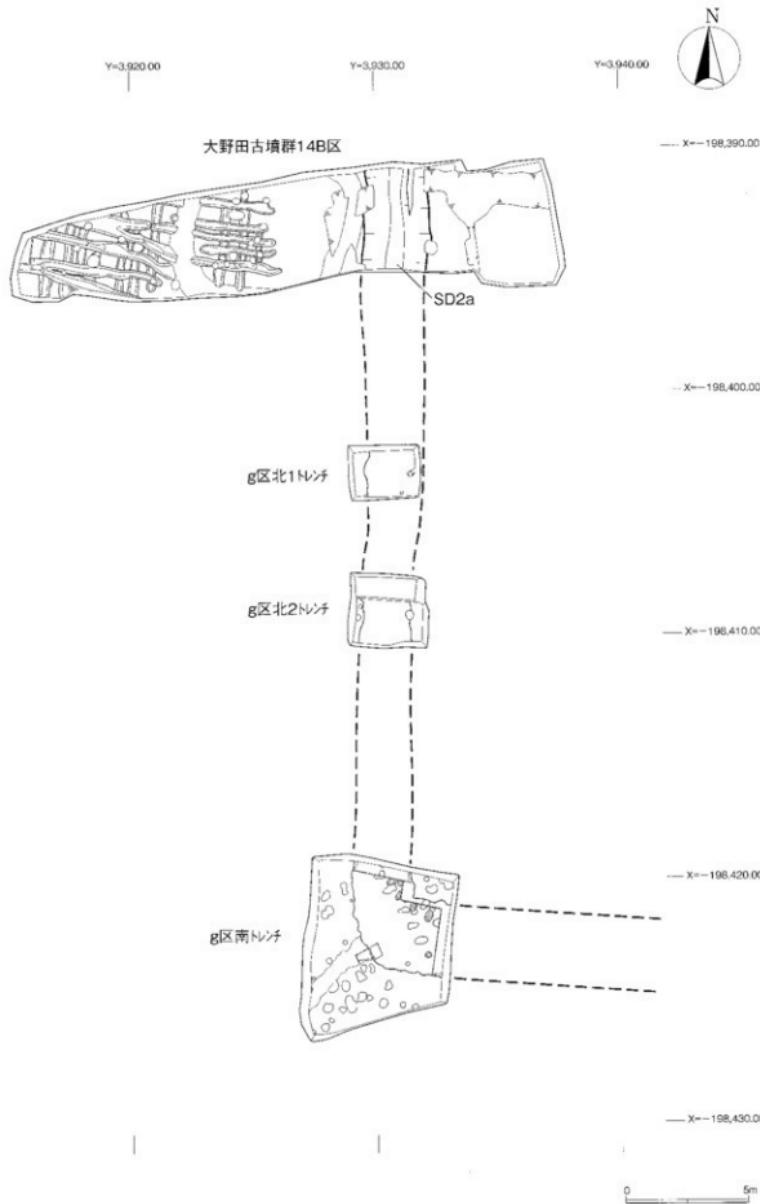
各トレンチのV層上面で検出された、南北方向に縱走し、南トレンチで北から東に屈曲する溝跡である。北1トレンチでは溝跡の西縁を、北2トレンチでは溝跡の東縁を検出している。上幅2.5~3m、方向は南北方向でN-1~2°-E、東西方向でE-5°-Sとなる。溝跡は検出に留めているが、調査区壁の断面観察により堆積土は大別して3層に分けられる。第1層は粘土質シルト層であり、土色で細分されるが、1a層は北2トレンチ南壁でのみ確認されている。第2層は暗褐色のシルト質粘土層、第3層は暗褐色の粘土質シルト層である。遺物は1b、2層中より上器小片が少量出土したほか、南トレンチにおいて第2層中より須恵器のE-1壺（第37図1）が出土した。遺構の重複関係としては、SD16溝跡を切っている。なお、南トレンチ東壁の断面観察の結果、SD2溝跡が基本層のIV層を切っていることが確認された。

SD16溝跡

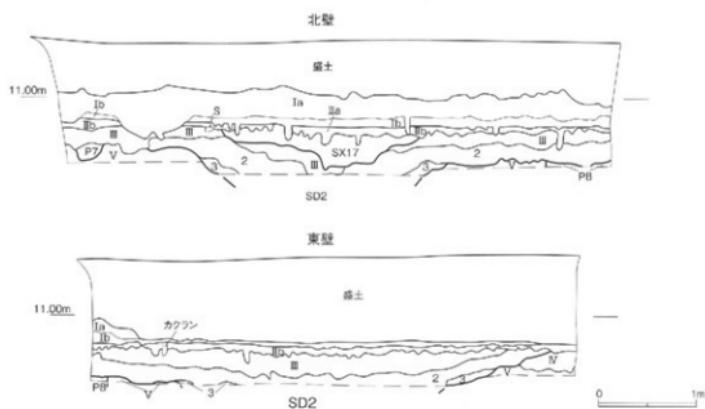
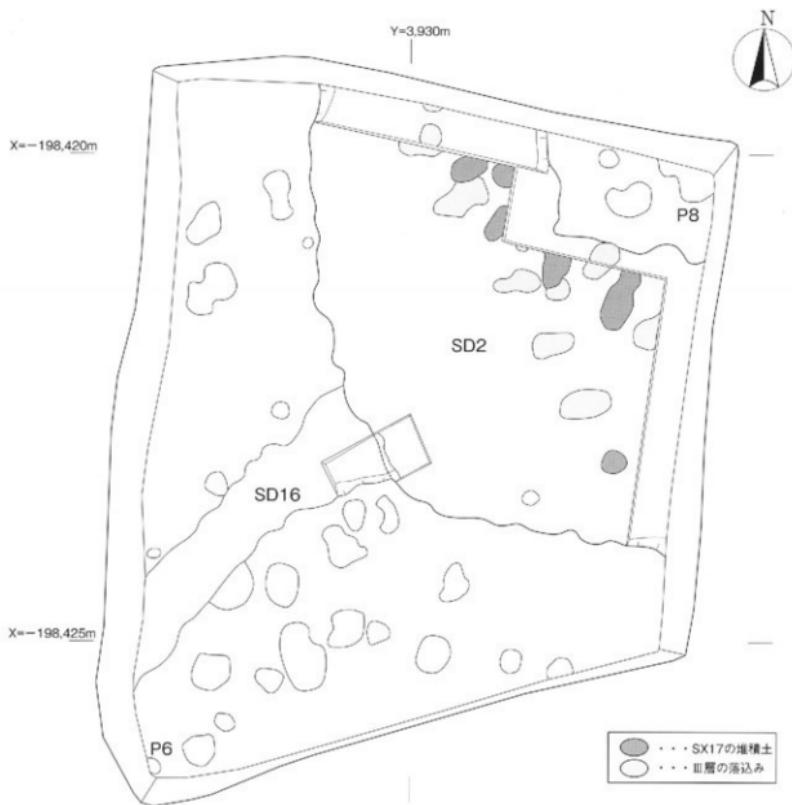
南トレンチのV層上面で検出された、北東から南西方向へ斜走する溝跡である。上幅は約1.5m、深さは約50cmで、方向はN-49°-Eである。堆積土は3層で、第1層は暗褐色のシルト質粘土層で、溝跡の北部に偏って堆積している。第2層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層、第3層は暗褐色の粘土質シルト層である。第1層より上器小片が1点出土した。遺構の重複関係としては、SD2溝跡に切られている。

SX17性格不明遺構

南トレンチ北壁のIII層上面から落ち込んでいる。断面の観察によると、上部では幅約2m、深さ約30cm以上の落ち込みである。しかし下部では凹凸があり、SD2溝跡の中央では長軸25~80cm、短軸20~30cmの楕円形、或いは不整橢円形のピット列状に検出されている（第35図）。また周囲にはIII層による同様の形状の落ち込みがピット列状

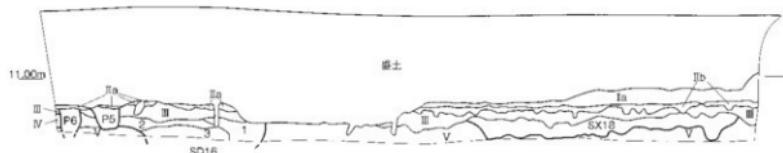


第34図 大野田官衙遺跡g区と大野田古墳群14B区 (S=1/200)

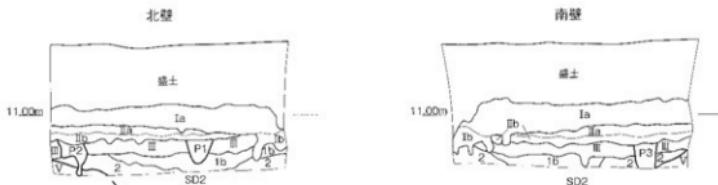


第35図 g区南トレンチ平・断面図 (S=1/50)

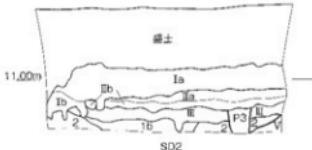
南トレント西壁



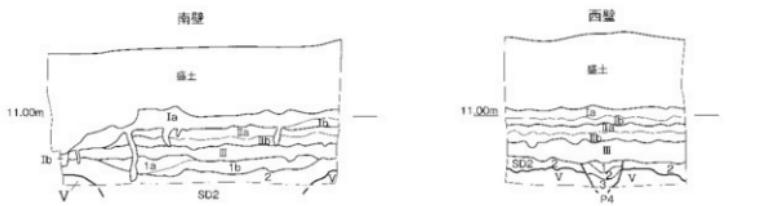
北1トレント



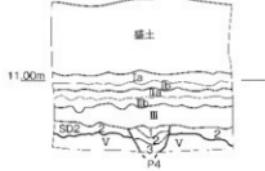
南壁



北2トレント

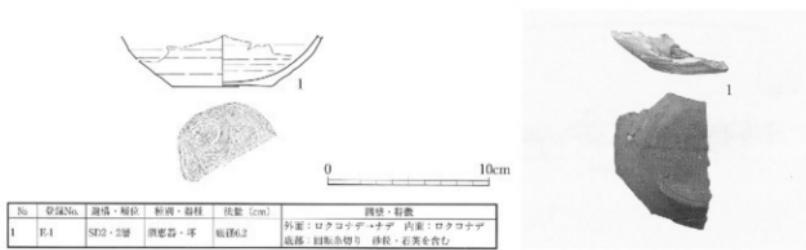


西壁



層位	色	例	土質	圖	考	
Ia	10YR5-4	にふく青褐色	シルト	田耕地土、マンガン鉱少量		
Ib	10YR4/3	にふく青褐色	粘土質シルト	耕作地土、黒化鉄、マンガニ鉱少量		
IIa	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	黒化鉄が上部に発達、マンガニ鉱や中量		
IIb	10YR4/2	赤黃褐色	シルト	赤化鉄、粘土質ブロック状、黒化鉄鉱やや多量、マンガニ鉱多量、下部で巨厚ブロック多量、下部の凸凹が美しい		
III	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黒化鉄少量、マンガニ鉱多量、由来色 (10YR6/2) 粘土ブロック多量、淡黄褐色 (10YR4/4) シルトブロック (底色赤み)		
IV	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを一部含む、由来色は砂粒を多く含む		
V	10YR4/4	暗褐色	新質シルト	耕作地、マンガニ鉱や中量、下部でV形ブロック多量、一部しまりの弱い部分あり		
VI	25Y4/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	新質シルト、マンガニ鉱や多量		
Ia	10TR3/1	暗褐色	粘土質シルト	黒化鉄少量、マンガニ鉱や多量、V形ブロック少量、灰黃褐色 (10YR5/2) 粘土ブロックやや多量		
2	10TR3/4	暗褐色	シルト質粘土	黒化鉄少量、マンガニ鉱や多量、V形ブロック少量、		
3	10YR4/3	暗褐色	粘土質シルト	黒化鉄少量、マンガニ鉱や多量、褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量		
1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	マンガニ鉱やや多量、由来色 (10YR4/1) シルトブロックや多量		
SD16	2	10YR4/3	にふく青褐色	シルト質粘土	マンガニ鉱や多量、褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量	
	3	10YR4/2	暗褐色	粘土質シルト	黒化鉄、マンガニ鉱少量、にふく青褐色 (10YR4/4) シルトブロック少量	
	1	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	黒化鉄少量、東風化 (10YR3/2) 粘土ブロックを上部に多量、砂粒を少含む	
P1	1	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	東風化 (10YR4/4) シルト質ブロックをやや多量	
P2	1	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	東風化 (10YR4/4) シルト質ブロックをやや多量	
P3	1	10YR2/3	黒褐色	粘土	東風化 (10YR4/4) 黒褐色 (10YR3/6) 新質シルトブロック少量	
P4	1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	東風化物質混在、黒褐色 (10YR3/6) 新質シルトブロック少量	
P5	2	10YR3/6	黄褐色	新質シルト	東風化物質混在、黒化鉄少量	
P6	3	10TR4/4	暗褐色	粘土質シルト	東風化、マンガニ鉱や多量	
P7	1	10YR4/4	暗褐色	粘土質シルト	東風化物質混在、マンガニ鉱や多量、黃褐色 (10YR5/6) シルト質粘土上部ブロック少量	
P8	1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	東風化物質混在、黒化鉄少量、マンガニ鉱やや多量、V形ブロック多量	
SX17	1	10YR5/3	にふく青褐色	新質シルト	東風化物質混在、黒化鉄少量、マンガニ鉱やや多量、上部に砂粒を多く含む	
SX18	1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	東風化物質混在、黒化鉄少量 (10YR5/6) シルト質粘土ブロック少量、下部の凹内が美しい	

第36図 g区調査区壁断面図 (S=1/50)



第37図 g区出土遺物 (S=1/3)

に並んでいる。

SX18性格不明遺構

南トレンチ西壁で確認された、V層上面の遺構である。上幅2.7m、深さは約20cmであり、断面形は不整形で下面の凹凸が著しい。堆積土は1層で、暗褐色の粘土質シルト層である。

また、Ⅲ層上面でピットを5基検出している。

遺構外の出土遺物としては、Ⅲ、Ⅳ層上面より土師器片が少量出土したほか、V層上面では土師器片、須恵器片が出土している。

4.まとめ

調査の結果、六反田跡6A区、大野田古墳群14B区で南北方向に縱走する溝跡が、g区南トレンチで東へ屈曲することが明らかとなった。六反田跡、大野田古墳群の調査では、検出された溝跡の地点や規模、断面形状から官衙の区画溝と想定されていた。その溝跡の延長部が検出されたことで、南北に縱走する溝跡は官衙の区画溝の西辺であり、g区南トレンチで東へ屈曲することから、区画溝の南西コーナー部であることが明らかとなった。東へ延びていくSD2溝跡は、大野田古墳群14次調査のSD4溝跡に接続し、官衙の区画溝南辺となっていると考えられる。これにより、官衙の範囲が南北245~259m、東西188~198m（註）であることが明らかとなった。

また、これまで区画溝は2時期あることが明らかとなっている。今回、SD2溝跡がⅣ層を切ることが明確に確認されたが、溝跡の新、旧いずれの時期なのか、より新しい時期の流路等の堆積に基づくものなのかは明らかにできなかった。今後、堆積状況の詳細を慎重に検討していく必要がある。

註：ここで示した数値は、真北、真東西方向を基準とし、区画溝の内側の上端で計測した数値である。



1. 北1 トレンチ全景（南から）



2. 北1 トレンチ北壁断面



3. 北1 トレンチ南壁断面



4. 北2 トレンチ全景（北から）



5. 北2 トレンチ南壁断面



6. 北2 トレンチ西壁断面



1. 調査区全景（西から）



2. 調査区北壁断面



3. 調査区東壁断面

写真図版26 g区南トレンチ

VII. h区の調査

1. 調査概要

h区は官衙内部の中央に位置する。a～c区の調査結果を受けて、中央部に建物跡が他に存在しないか確認するために調査を行った。調査区は北トレンチと南トレンチに分け、南北9.5m×東西4mの南トレンチ、南北10.5m×東西3mの北トレンチを設定した。重機により盛土、耕作土を除去し、V層上面で精査を行った。南トレンチでは遺構の検出状況に応じて一部、拡張、調査を行っている。北トレンチでも土坑の一部を掘り下げて調査を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が70～80cmあり、それより下にI～V層が確認された。I層は川水田耕作土であり、土色によりIa～Ic層に細分される。II層は暗褐色の粘土質シルト層で、「II層」に相当する。北トレンチ北部で部分的に堆積が確認された。III層は褐色の砂質シルト層であり、「III層」に相当する。II層同様、北トレンチ北部に堆積している。IV層は暗褐色のシルト質粘土層であり、「IV層」に相当する。北トレンチで堆積している。V層は褐色のシルト質粘土層で、「V層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

V層上面において、南トレンチでは土坑2基、性格不明遺構1基、溝跡3条、小溝状遺構群2群、ピットが検出された。北トレンチでは土坑2基、性格不明遺構2基、溝跡1条、小溝状遺構群2群、ピットが検出された。

SK23土坑

南トレンチの中央西端で検出された。一辺60cm×80cmの長方形で、深さは最深部でも8cmである。下面に凹凸がある。遺物は出土していない。SD21、SD22溝跡に切られている。

SK24土坑

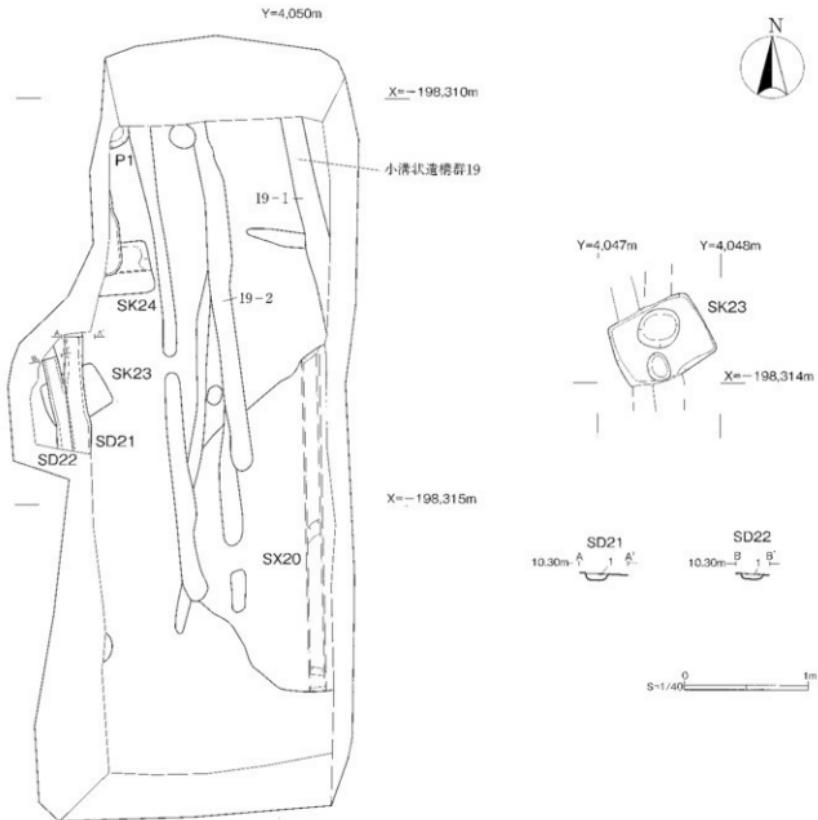
南トレンチ北西部で検出された。南北60cm×東西60cm以上の方形を呈すると考えられるが、西端部が調査区外へ延びている。深さは3cm程度である。遺物は出土していない。小溝状遺構群19に切られている。

SX20性格不明遺構

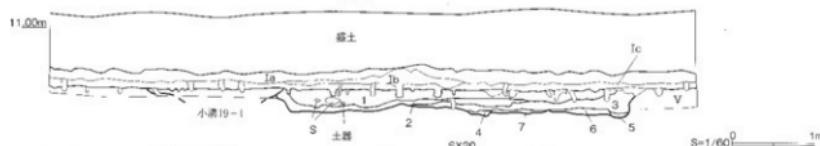
南トレンチ東部で検出され、東半は調査区外へ延びている。平面形は不整形を呈し、検出長では南北42m、東西1.7mで、深さは25～35cmである。断面形は逆台形を呈するが、中央部がやや高く、北側、南側はそれに比べ深くなる。さらに南端壁際では溝状の落ち込みが認められる。堆積土は7層で、第1層は黒色のシルト質粘土層であり、炭化物や焼土がブロック状に多量に含まれている。第2層、第3層もシルト質粘土層であるが、この炭化物、焼土の含有量が少なくなる。第4層は中央の一部に堆積する焼土層である。第5層は褐色のシルト質粘土層であり、壁際の溝状の落ち込みに堆積している。第6層は褐色の砂質シルト層であるが、黒褐色の粘土層が帯状に堆積し、しまりが非常に強い。第7層は暗褐色の砂質シルト層である。第6層と極めて似た土質で、深さも同じであり、平坦面を形成している。なお、中央部底面は基本層のV層上面であるが、硬化している。遺物は第1層中より須恵器壺片や土師器片など比較的多く出土している。また、第2、3層からは土師器小片が少量出土している。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群19に切られている。

SD21溝跡

南トレンチ拡張部で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。上幅約20cm、下幅10～13cmで、深さは5cmである。方向はN-14°-Wで、断面形は扁平な蒲鉾形を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層であり、土師器壺片な



東壁



層序	色 調	上 質	備 考
Ia	2SY4/1 黄灰褐色	砂土質シルト	砂水混じ、微化成分多量、マンガン粉少量
Ib	2SY4/2 淡灰褐色	砂土質シルト	微化成分多量、マンガン粉微量、マanganese粉微量
Ic	2SY3/2 暗灰褐色	砂土質シルト	微化成分微量、マンガン粉微量、「山筋よりシルトを多く含む」
II	10YR3/3 暗褐色	砂土質シルト	微化成分多量、マンガン粉微量、北トレンチ北部で部分的に堆積
III	10YR4/6 褐色	砂質シルト	微化成分多量、マanganese粉少量、にいり黄褐色 (10YR4/3)、粘土質シルトブロック多量、北トレンチ北部に堆積
IV	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	微化成分少量、マンガニン粉や多量、北トレンチに堆積
V	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	上層にマンガン粉微量、地質判別 (10YR5/2) シルト質粘土ブロックや多量、南トレンチ南端で1部の土色が違うからも
1.	7SY2/2 黑色	シルト質粘土	地質判別ブロック多量、地土ブロックやや多量、灰黃褐色 (10YR5/2) シルト質粘土ブロック多量、南側で礫が集中、遺物も多く山上
2	10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土	地質判別ブロック少量、地土ブロックやや多量、灰黃褐色 (10YR5/2) シルト質粘土ブロック多量、遺物出土
3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	地質判別無量、地土ブロック微量、灰黃褐色 (10YR5/2) シルト質粘土ブロック多量、遺物出土
4	15YM3/4 淡褐色	シルト	後十層、しまりが岩盤に現れる。
5	10YR4/6 褐色	シルト質粘土	上層に微化成分少量、黒褐色 (10YR2/2) 粘土が當面に堆積、しまりが非常に強い、堅密
6	10YR4/5 暗褐色	砂質シルト	上層に微化成分少量、黒褐色 (10YR2/2) 粘土が當面に堆積、しまりが非常に強い、堅密
7	10YR3/4 硅褐色	シルト質粘土	後十層、しまりが岩盤に現れる。
SD21	1 10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	微化成分少量、マンガニン粉や多量
SD22	1 10YR3/3 暗褐色	砂土質シルト	微化成分、マンガニン粉や少量
小溝19-1	1 10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	マンガニン粉や多量、灰黃褐色 (10YR5/2) シルト質粘土ブロックやや多量

第38回 h区南トレンチ平・断面図



1. 調査区全景（南から）



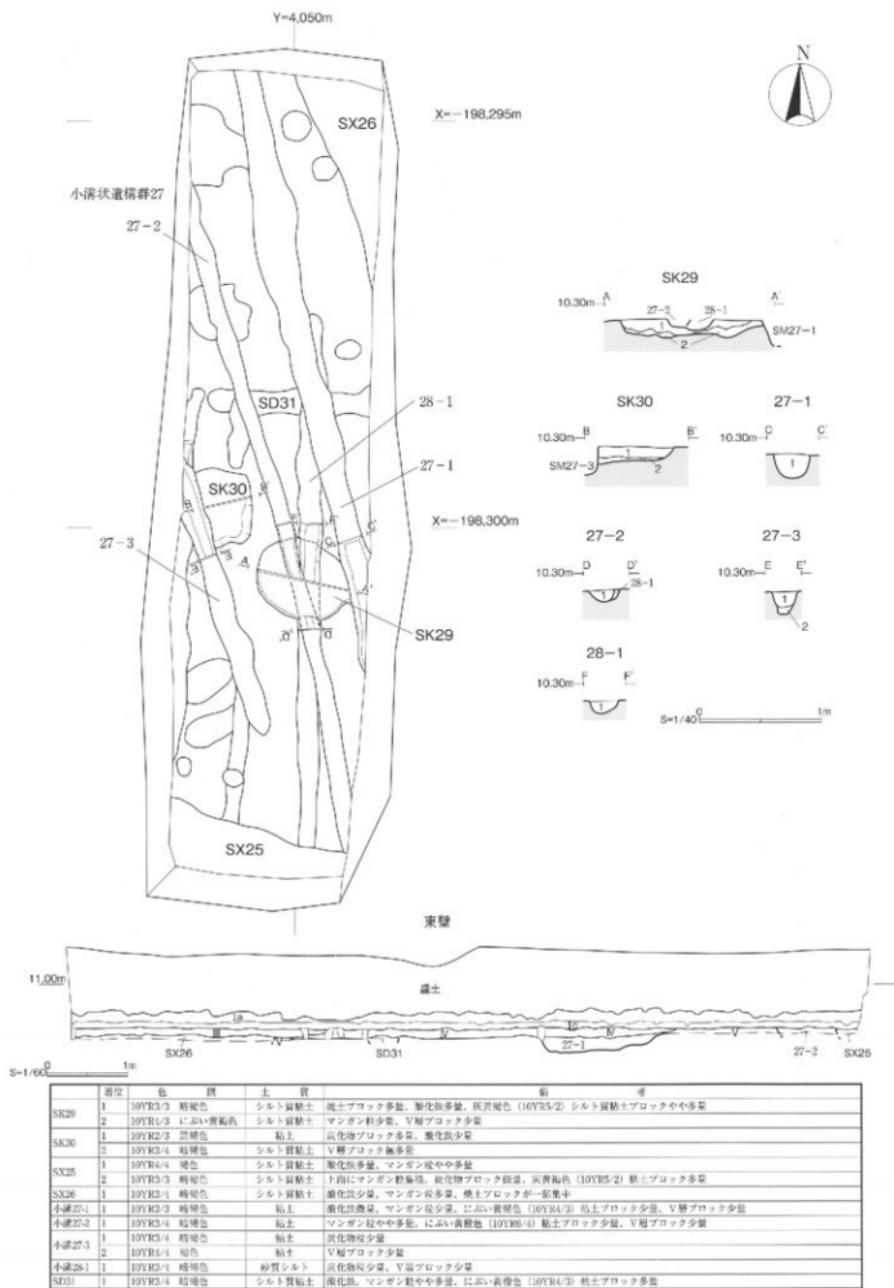
2. 調査区東壁断面（南西から）



3. SK23検出状況（南から）



4. SK23完掘状況（南から）



第39図 h区北トレンチ平・断面図



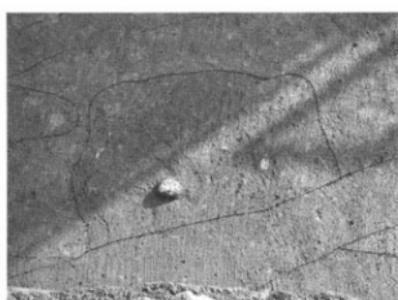
1. 調査区全景（南から）



2. SK29検出状況（西から）



3. SK29断面（南西から）



4. SK30検出状況（西から）



5. SK30断面（南東から）

ど小片2点が出土している。SK23土坑、SD22溝跡を切っている。

SD22溝跡

南トレンチ拡張部で検出された、南北方向に縱走する溝跡である。上幅約20cm、下幅14~15cmで、深さは4cmである。方向はN-23°-Wで、断面形は扁平な鉢形を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層である。SK23土坑を切り、SD21溝跡に切られている。

小溝状遺構群19

南トレンチを南北方向に縱走する溝跡群で、4条検出された。上幅15~30cmで、方向はN-17~23°-Wである。小溝状遺構群19-2より内面黒色処理された非クロロ土師器の坏片が1点出土している。

南トレンチではその他、小溝状遺構群19に切られ、SX20性格不明遺構を切る、南北方向の小溝跡が2条検出されている。さらに、小溝状遺構群19に切られる東西方向の溝跡が1条検出されている。

SK29土坑

北トレンチの中央やや南寄りで検出された。南北1m、東西1.1m以上のやや不整な円形を呈する。深さは15~20cmで、断面形は不整形である。堆積土は2層で、第1層は暗褐色のシルト質粘土層であり、焼土をブロック状に多量に含んでいる。第2層はにぶい黄褐色のシルト質粘土層で、基本層のV層をブロック状に少量含んでいる。遺物は出土していない。小溝状遺構群27、28に切られている。

SK30土坑

北トレンチの中央西部、SK29土坑の北西に隣接して検出された。南北80~90cm、東西60~80cmの不整方形で、深さは約15cmである。断面形は扁平な鉢形を呈すると考えられる。堆積土は2層で、第1層は黒褐色の粘土層であり、炭化物をブロック状に多量に含んでいる。第2層は暗褐色のシルト質粘土層で、基本層のV層をブロック状に非常に多く含んでいる。遺物は第1層より土師器片が少量出土したほか、第2層より非クロロ土師器のC-2甕(第40図2)が出土している。この甕片は表面の磨滅が著しいが、外面には須恵器甕の平行叩き目に似た調整が施されている。遺構の重複関係としては、小溝状遺構群27、28に切られている。

SX25性格不明遺構

北トレンチ南端で検出された。東西、南側は調査区外に延びているため、規模、形状は不明である。堆積土は2層である。小溝状遺構群27、28を切っている。

SX26性格不明遺構

北トレンチ北東隅で検出された。南東、北西方向へ調査区外に延びているため、規模、形状は不明である。堆積土中に焼土の集中部が認められる。

SD31溝跡

北トレンチ中央部を東西方向に横断する溝跡である。上幅25~40cmで、方向はE-0°-Nである。小溝状遺構群27、28に切られている。

小溝状遺構群27

北トレンチを北西から南東方向へ斜走する溝跡群であり、3条検出された。土坑の調査に伴い、一部掘下げを行った。上幅20~50cm、下幅8~20cmで、深さは10~20cmである。方向はN-22~28°-Wで、断面形はU字形である。堆積土は暗褐色の粘土層1層である。小溝状遺構群27-3にのみ下部に第2層として褐色の粘土層が堆積している。遺物については、小溝状遺構群27-1より土師器甕片など小片3点、小溝状遺構群27-3の第1層より、外面にハケメ調整が施された土師器小片が1点出土している。遺構の重複関係としては、SK29、SK30土坑、SD31溝跡、小溝状遺構群28を切り、SX25性格不明遺構に切られている。



第40図 h区出土遺物 (S=1/3)

小溝状造構群28

北トレントを南北方向に縱走する溝跡群であり、4条検出された。土坑の調査に伴い、一部掘下げを行った。上幅20~26cm、下幅10~15cmで、深さは10cmである。方向はN0~16°・Eである。小溝状造構群28-1では、断面形はやや扁平なU字形で、造構の重複関係としては、SK29、SK30土坑、SD31溝跡を切り、SX25性格不明造構、小溝状造構群27に切られる。

造構外の出土遺物としては、南トレントではV層上面で土師器片が少量出土し、北トレントではV層上面でC-1小型坏（第40図1）や土師器片、須恵器焼片が出土している。

4. まとめ

調査の結果、官衙関連の造構は検出されなかった。

SX20性格不明造構については、平面形が不整形であること、カマド等の施設が検出されなかつたことから性格不明造構としたが、堆積土の第6、7層上面と、中央部の基本層位V層の上面が共に硬化していることから、竪穴住居跡の可能性がある。また、SD21、SD22、SD31溝跡は規模や堆積土の状況から、小溝状造構群と同様の畑の耕作に関わる造構と考えられる。

VII. i 区の調査

1. 調査概要

i 区は官衙の中央北部に位置する。官衙中央北部の遺構の様相を把握するために調査を行った。南北6.5m×東西7mの調査区を設定した。盛土が厚く、遺構の検出が困難であった。遺構の検出は南北3m×東西3mの範囲でしか調査を行えなかった。盛土、耕作土を重機で除去し、Ⅲ～V層上面でそれぞれ精査を行った。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が1.5～1.8mあり、それより下にⅠ～V層が確認された。Ⅰ層は旧水田耕作土であり、Ⅰa、Ⅰb層に細分される。Ⅱ～V層はそれぞれ「Ⅱ層」から「V層」に相当する。

3. 遺構と遺物

V層上面において、小溝状遺構群2群、性格不明遺構1基、ピットが検出された。

小溝状遺構群32

調査区を南北方向に縱走する溝跡群で、3条検出された。上幅25～30cmで、方向はN5°～15°-Eである。小溝状遺構群33を切っている。

小溝状遺構群33

調査区を東西に横断する溝跡群で、3条検出された。上幅20～40cmで、方向はE2°-NからE4°-Sである。小溝状遺構群32に切られる。

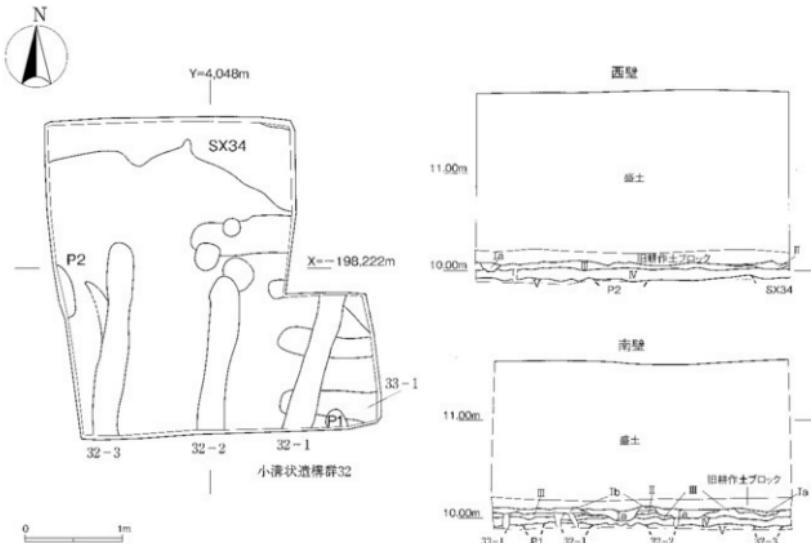
SX34性格不明遺構

調査区北端で検出された。東西、北側は調査区外へ延びており、規模、形状は不明である。他遺構との重複関係も認められなかった。

ピットは6基検出された。また、この調査では遺物は全く出土しなかった。

4.まとめ

調査の結果、官衙関連の遺構は検出されなかった。

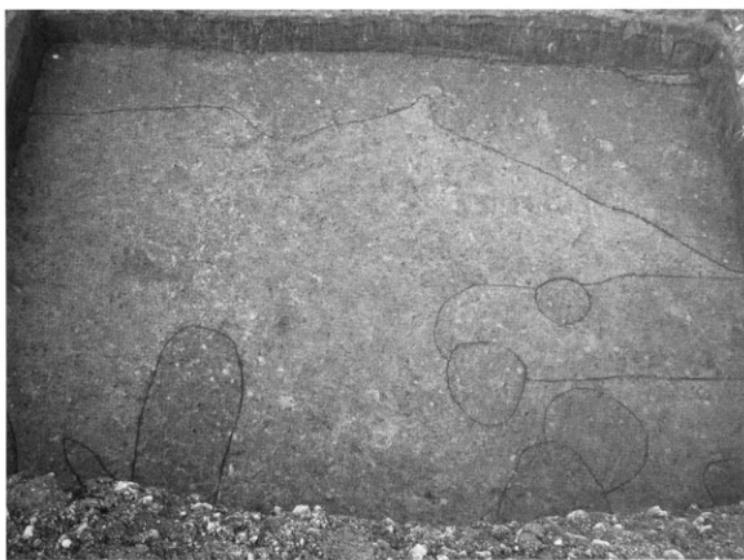


層位	色調	土質	備考
I-a	2SY4/1 黄灰色	シルト質粘土	山耕作土、硬化粘土や多量、マンガン粒微量、下層ブロック少量、部分的に地盤
I-b	10YR5/4 12.5度、黄褐色	シルト質粘土	硬化鉄水鉻層、灰田床土上
II	10YR3/3 嫡褐色	粘土	硬化鉄、マンガン粒多量、部分的に堆積
III	10YR4/4 棕色	シルト質粘土	硬化鉄多量、マンガン粒や少量
IV	10YR3/4 嫡褐色	粘土	硬化高鉄、マンガン粒多量(底部では上面に地盤)
V	10YR4/4 棕色	粘土	硬化鉄や少量、マンガン粒少量、シルト少量
小溝32-1	10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒多量
小溝32-2	10YR2/3 嫡褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、V層ブロック少量
小溝32-3	10YR2/3 嫡褐色	シルト質粘土	マンガン粒多量、V層ブロック少量
小溝33-1	10YR3/3 嫡褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量、V層ブロック多量
P1	10YR2/3 嫡褐色	粘土質シルト	マンガン粒少量
P2	10YR3/3 嫡褐色	シルト質粘土	マンガン粒や少量、V層ソロック少量
SX34	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	マンガン粒や少量

第41図 I区平・断面図 (S=1/50)



1. i区南部全景（北から）



2. i区北部遺構棲出状況（南から）

写真図版29 i区

VIII. j 区の調査

1. 調査概要

j 区は官衙区画溝南西コーナーより西に80mの場所に位置する。区画整理事業に伴う調査の大野田古墳群14B2区において、官衙の区画溝跡に平行して南北に延びるSD92溝跡を確認しており、その溝跡がL字に屈曲して、これまで検出された南辺との接続がないか、あるいは別方向の区画溝として官衙の拡大がないかを確認するために調査を行った。調査区は大野田古墳群14B2区に北側が接するように東西7m×南北3mの調査区を設定した。重機により表土を除去し、II層上面で精査を行った。その結果、SD92溝跡がさらに南へ延びていることを確認した。その後写真撮影と図面作成を行い、調査を終了した。

2. 基本層序

調査地点には盛土が約80cmあり、それより下にI～II層を確認した。I層は旧水田耕作土である。II層は褐色の粘土層であり、「V層」に相当する遺構検出面である。

3. 遺構と遺物

II層上面において、溝跡1条、土坑1基、ピットを検出した。

SD92溝跡

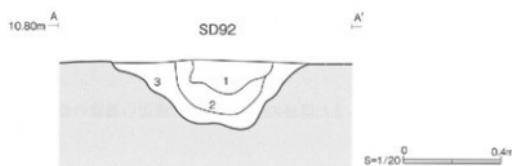
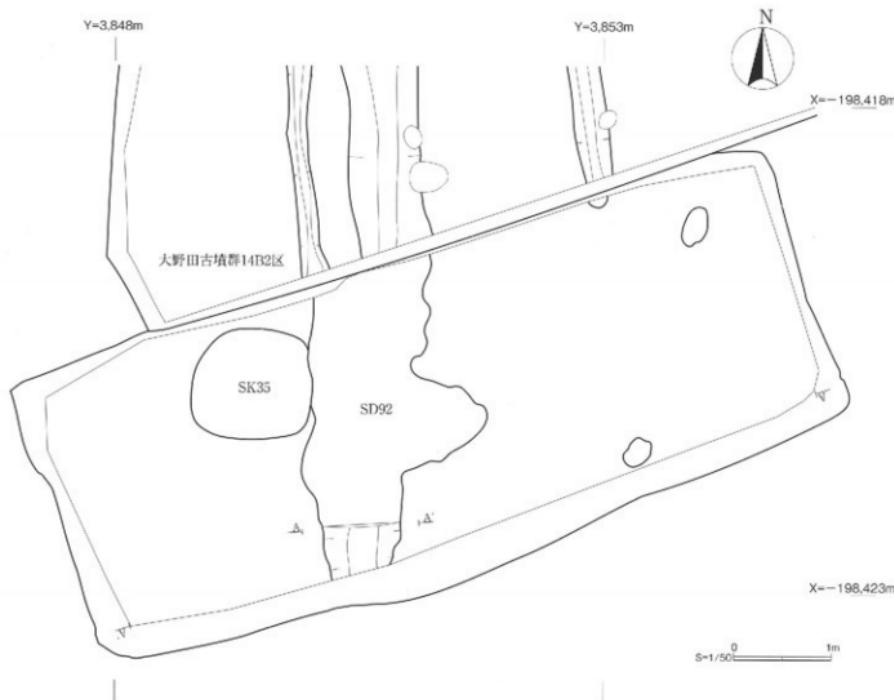
大野田古墳群14B2区で確認した溝跡の延長部で、調査区のほぼ中央部を南北に縱走している。上幅60～160cmで、深さ約25cmである。堆積土は3層で、第1層は灰黄褐色の粘土層、第2層は灰黄褐色と褐色の粘土がブロック状に混合している層、第3層はにぶい黄褐色の粘土をブロック状に多量に含む灰黄褐色の粘土層である。第1層中から土師器片が1点出土している。SK35土坑に切られている。

SK35土坑

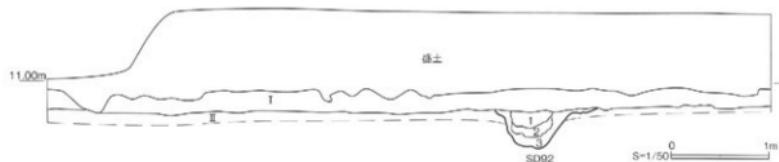
調査区中央の西寄りに確認した。径1.1～1.4mの不整円形で、SD92溝跡を切っている。

4. まとめ

SD92溝跡は、出土している遺物が少なく年代が確定できない。また溝跡の規模や方向、周辺の遺構の様相を見る限りでは、官衙の区画溝と断定することは難しい。



南壁

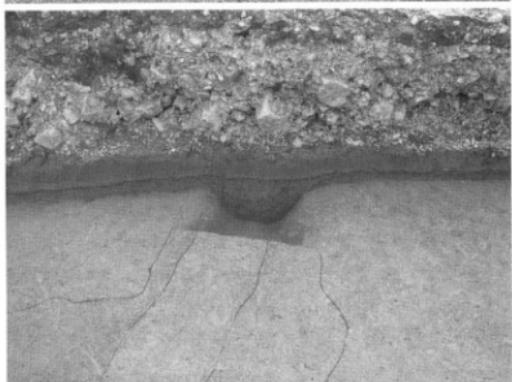


層位	色	厚	堆	
			土質	性状
I	2.5Y4/1 黄米色	粘土	积水	解
II	10YR4/4 灰色	粘土	マンゴー斑少量	
III	10YR4/2 天青灰色	粘土	にごい青面色 (10YR4/3)	砂質シルト斑少量
SD92	2		灰青褐色 (10YR4/2)	と海色 (10YR4/4) 粘土ブロック (φ3~20cm) の混合
	3		にごい青面色 (10YR4/4)	粘土ブロック (φ1~2cm) 多量、黒褐色 (10YR3/2) 粘土ブロック (φ5cm) 少量

第42図 地平・断面図



1. 遺構検出状況（南から）



2. 遺構掘削状況（北から）



3. SD92断面（南西から）

写真図版30 J区

第4章 総括

I. 郡山遺跡

今年度の郡山遺跡の調査は、個人住宅の調査のみであった。まとまった面積の調査でなかったが、以下の3点において今後は留意し、検討して行かねばならない課題を含んでいると考えるものである。

まずⅡ期官衙の外溝のあり方について、北西部と南部の2地点の調査からである。今回調査が実施された第197次調査区は、本来は外溝が南北に通過する地点であった。搅乱により遺構の検出状況が良好でなかったこともあるが、これまで官衙関連の遺構が検出されていた土層がなく、全く異なった土層が堆積していた。周囲の第169次、第170次調査（平成17年度）、第182次調査（平成19年度）でも、ほぼ同様の結果であり、古代の遺構面が分布していない可能性がある。これは今年度まで調査が行われてきた「あすと長町土地区画整理事業」に伴う発掘調査の、郡山遺跡北部の調査地点でも同じような状況であり、広瀬川等の旧河川による削平、それによる異なる土層の堆積のためと考えられる。したがって外溝の北東部におけるコーナー部の検出は不可能な状況であるが、これまでの土地区画整理事業による調査で北西コーナー部を検出し、東に伸長する様相や、第166次調査（平成17年度）や第188次調査（平成20年度）で外溝が北に伸長する様相からは、とりあえず開削された状況を想定しておくことにする。当時の河川との位置関係や、場合によっては接続の可能性も考慮に入れた視点が今後は必要なかもしない。

第194次調査では、南の第41次調査（昭和58年度）、第94次調査（平成4年度）で検出されていたSD476溝跡の延長部が検出された。第41次調査の南端からは約57m以上あり、さらに外溝の南辺付近まで延びていく様相である。重複のあるSD2213溝跡との重複など整理する課題は残されているが、SD476溝跡の堆積土層に灰白色火山灰が含まれていることや、官衙廃絶期以降の遺物が含まれていないこと、地点により上幅が2mを越え、深さも80cmに達することからは、官衙の中には重要な区画溝になる可能性が考えられる。とくに南方官衙東地区の建物群との関連を、今後は検討して行かねばならない。

第198次調査において、SD2223、2227、2228溝跡を検出した。詳細な年代は不明であるが、形状や方向からは第134次調査（平成12年度）で

検出されたSD1959、1962溝跡との関連が考えられる。

そうであれば官衙の時期ではなく、古代の末期か、それ以後に開削されたものと推定される。開削の方向が直線的で、SD1959溝跡やSD2223溝跡の規模からは、人為的な開削や計画性があることを想起させる。周辺での城館や屋敷地などの関連を考慮に入れ、これら溝跡の調査事例の蓄積を待ちたい。



第134次調査（北から）

II. 大野田官衙遺跡

今年度の調査の結果からは、官衙の東西幅が明らかになったこと、当初想定した官衙内部に3列の建物列が存することは、ほぼないであろうということが考えられた。

区画溝跡については、今年度の調査で四辺が確定し、東西188～196m、南北245～259mで、コーナーの明らかになった南辺で東西長198m（コーナー部外側）である。この遺跡は新旧2時期あることが明らかになっている。ただし地点により掘り直された新しい時期の溝跡は検出される層位に違いがあり、官衙として存続していた時期の遺構か、掘立柱建物跡の建替えに伴うかについては、今後の各地点における整理作業により判断していくべきものと考える。

建物跡の配置については、SB60の南側に南北棟の建物が配置されていた状況は、a区ならびに昨年度の袋前遺跡第2次調査区からは想定されないだろうと考えられる。またb、c、h区の調査からは、SB64とSB121の中間や北よりに東西棟の存在を考えることはできないであろう。よって官衙内部は、今のところ北部のSB60を除いては、空いていると考えるべきである。なお北と南を遮蔽しているSD57溝跡については、外回りの区画溝との接続や、それらの溝跡の開削された層位等の状況の把握を待って判断したい。

この官衙の様相からは、どのような機能が考えられるのだろうか。改めて発見されている建物跡について特徴を見ると、柱痕跡は直径30～40cm、柱掘り方の大きさ、深さも1mを超えるものがある。建物の規模や柱材の太さ、柱材を設置する掘り方など、規模の大きいことが顕著である。方向もほぼ真北（真東西）方向で揃えられている。

これらの建物のうち総柱建物跡であるSB121は、柱痕跡の直径が40cm程あり、掘り方も一辺1mを超えている。SB64についても同等の規模である。これらは倉庫と考えてよく、重量物の収納に対応した構造である。

西例で見る限り総柱建物跡のSB64と、南側の側柱建物跡のSB464との間に堀や溝の遮蔽施設がなく、同じ空間に立ち並んでいるように見える。平行の長い建物跡であるSB464は、本来なら郡庁院を構成するような規模、構造の建物跡である。よってこれらの側柱建物跡は、単なる事務棟と考えるよりは、北の倉庫と関連した倉庫の一種である「屋」と見ることもできる。北のSB64・121（倉庫建物）と同一の敷地空間に立ち並ぶことや、南の区画溝（SD73、253、421）との間に別な官衙ブロックとなるような建物や堀が配置されていないことから、倉庫として併に立ち並んでいた可能性は見出せないだろうか。

このような側柱建物を倉庫と見る例は、東北地方では東山遺跡（陸奥国質美郡街）、関和久遺跡（陸奥国白河郡街）で正倉と想定された地区で検出されている。また西日本にはなるが下高橋遺跡（筑後国御原郡街）でも総柱建物跡と側柱建物が一列に並ぶように配置されている。ただし大野田官衙遺跡の場合、これらの遺跡に較べると建物の棟数が少なく、倉庫院として機能していたとまでは言えないと考えられる。

建物の方位や出土遺物の年代からは、郡山遺跡II期官衙との関連が考えられないだろうか。II期官衙は陸奥国府と考えられることから、国府に該当する施設のほかに様々な機能が必要とされている。一般には国の行政事務や役所の維持、通常のための機関（曹司）、国司らが宿泊する施設（国司館）、学校や市などもあったと言われている（註1）。

大野田官衙から郡山遺跡までは、北東に15km程しか離れていない。II期官衙を構成する遺跡群のうち、倉庫風建物は寺院西方建物群に3棟あるのみで、きわめて少ない。I期官衙期に中核部周辺に倉庫群が配置されていたのとは大きく異なっている。このような様相では、物資の集積をする機能を補完する曹司の可能性はないだろうか。曹司は国府と一体となって置かれる場合が多いが、伯耆国では不入岡遺跡のように、稀に離れて設置される場合もある（註2）。

なお陸奥国には、行方団、白河団、磐城団、名取団、玉造団、安積団、小田団などの軍団があったことが知られ

ている。このうち名取郡は胆沢城出土の漆紙文書の中に関連する文書が含まれているという（註3）。軍團の遺構について具体的な様相は明らかになっていないが、練兵場や武器庫、食料庫があることが考えられ、御籠団や遠賀団などの軍團印の存在からは公文書を作成する官舎も存在していた可能性がある。また兵舎として圓柱建物跡を見る可能性もある（註4）。しかし全国的に見て類例が少ない。例として挙げられている岡山県津市大田茶屋遺跡でも軍團跡と断定するまでには至っていない（註5）ようである。

なおその他に郡家や駅家などの可能性も考えられるが、以下のことからそれらの可能性は取りあえず少ないと考えておく。大野田官衙遺跡の周囲では、豊穴住居跡や小規模な掘立柱建物跡は発見されているが、官衙や寺院に該当する遺構の広がりは確認されていない。郡家とされる閑和久遺跡や根岸遺跡のように南北に諸院が隣接する様相や、泉庵寺、弥勒寺官衙遺跡のように東西に諸院が配置されるような様相ではない。したがって郡衙の本体と見ることは難しいと考えられる。しかしこの地域が名取郡の北部に位置し、名取川以南の地域と区別されることから、郡衙の本体ではないが、郡衙の別院とする見方は可能かもしれない。名取郡は南北朝時代には名取郡北方、南方と、2つの地域に分けて呼ばれており、古代まで遡るなら「北縣」、「南縣」の存在も考慮されるからである。

区画の中に少數の建物群が配置される遺跡としては、「駅家」が挙げられる。遺跡として明らかになった例は少ないが、子犬丸遺跡（山陽道布施駅家）や落地区（同 野磨駅家）などがある（註6）。それらは70~90m四方を築地で囲み5~7棟の建物が配置されている。主要殿舎となる東西棟の建物が中軸線上にある構造となっている。現在発見されている駅家の類例からは、大野田官衙遺跡が駅家に該当するその可能性は少ないと考えられる。

様々な可能性を取り上げてみたが、今のところ断定しがたいというところである。遺構の様相を明らかにしていくことに努めるとともに、文字資料等の出土に期待していきたい。さらなる検討が必要である。

註1 山中敏史2004a「国府の空間構成」「古代の官衙遺跡」Ⅱ pp.128-129

註2 山中敏史2004b「曹司」「古代の官衙遺跡」Ⅱ p141の図7参照。

註3 第43号漆紙文書「戸番文書」（平川1989、1994、下向井2005）

註4 岡田茂弘2003「古代の兵舎について」「考古学に学ぶ」Ⅱ pp.427-441

註5 大田茶屋遺跡の報告では官衙の性格について様々な可能性が指摘されており（岡本1998a、b）、下向井龍彦氏が軍團跡に比定している（下向井2005）。

註6 岸本道昭2006『山陽道駅家跡』の「瓦屋繕型の布勢駅家」(pp.33-68)、「二つの野磨駅家」(pp.69-80)

木本雅康2008『遺跡からみた古代の駅家』のpp.8-20

引用・参考文献

- 荒井 格 2008 「大野田古墳群他一官衙関連遺構ー」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp.65-72
- 大池昭二 1972 「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11-4 pp.228-235
- 岡田茂弘 2003 「古代の兵舎について」『考古学に学ぶ』Ⅱ 同志社大学考古学シリーズⅡ pp.427-441
- 岡本寛久 1998a 「古代の官衙について」『大田茶屋遺跡2、大田障子遺跡、大田松山久保遺跡、大田大正開遺跡、大田西奥田遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129 pp.300-301
- 岡本寛久 1998b 「欄列について」『大田茶屋遺跡2、大田障子遺跡、大田松山久保遺跡、大田大正開遺跡、大田西奥田遺跡』 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129 p302
- 小山正忠、竹原秀雄 1989 『新版標準土色帖』1989年版 日本色研事業株式会社
- 岸本道昭 2006 『山陽道駅家跡』日本の遺跡11 同成社
- 木本雅康 2008 「遺跡からみた古代の駅家」日本史リブレット69 山川出版社
- 古泉 弘 2001a 「遺体収納容器」『図説江戸考古学研究事典』 柏書房 pp.143-144
- 古泉 弘 2001b 「煙管」『図説江戸考古学研究事典』 柏書房 pp.189-190
- 小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題」「日本律令制の展開」 吉川弘文館
- 下向井竜彦 2005 「軍団」「文字と古代日本」2 吉川弘文館 pp.296-318
- 仙台市教育委員会 1981 「六反田遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書34
- 仙台市教育委員会 1984 「第41次発掘調査」「郡山遺跡」Ⅳ 仙台市文化財調査報告書61 pp.67-69
- 仙台市教育委員会 1989a 「第79次発掘調査」「郡山遺跡」Ⅴ 仙台市文化財調査報告書124 pp.42-46
- 仙台市教育委員会 1989b 「富沢遺跡、泉崎浦遺跡」 仙台市文化財調査報告書126
- 仙台市教育委員会 1993 「郡山遺跡」第94次発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書177
- 仙台市教育委員会 1999 「第118次発掘調査」「郡山遺跡」ⅩⅨ 仙台市文化財調査報告書234 pp.17-18
- 仙台市教育委員会 2000 「六反田遺跡第5次調査」「大野田古墳群、王ノ塚遺跡、六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書243 pp.295-394
- 仙台市教育委員会 2001a 「第134次発掘調査」「郡山遺跡」21 仙台市文化財調査報告書250 pp.21-37
- 仙台市教育委員会 2001b 「郡山遺跡」第124次発掘調査報告書 仙台市文化財調査報告書251
- 仙台市教育委員会 2004 「大野田古墳群」「平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」pp.17-22
- 仙台市教育委員会 2005a 「大野田古墳群」「第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」pp.299-305
- 仙台市教育委員会 2005b 「洞ノ口遺跡」仙台市文化財調査報告書281
- 仙台市教育委員会 2006a 「第166次発掘調査」「郡山遺跡」26 仙台市文化財調査報告書296 pp.11-28
- 仙台市教育委員会 2006b 「第169次発掘調査」「郡山遺跡」26 仙台市文化財調査報告書296 p33
- 仙台市教育委員会 2006c 「第170次発掘調査」「郡山遺跡」26 仙台市文化財調査報告書296 pp.34-37
- 仙台市教育委員会 2008a 「第182次発掘調査」「郡山遺跡」28 仙台市文化財調査報告書327 pp.7-8
- 仙台市教育委員会 2008b 「六反田遺跡、大野田古墳群」「平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」 pp.99-102
- 仙台市教育委員会 2009a 「(仮称) 大野田官衙遺跡」「第35回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」pp.242-249
- 仙台市教育委員会 2009b 「第188次発掘調査」「郡山遺跡」29 仙台市文化財調査報告書347 pp.3-16
- 仙台市教育委員会 2009c 「(仮称) 大野田官衙遺跡」「郡山遺跡」29 仙台市文化財調査報告書347 pp.98-114
- 仙台市教育委員会 2009d 「大野田官衙遺跡」「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」pp.27-32
- 仙台市教育委員会 2010 「大野田官衙遺跡」「第36回古代城柵官衙遺跡検討会資料集」pp.51-58

- 武田健市 1998 「大日北遺跡」多賀城市文化財調査報告書49
- 平川 南 1989 「漆紙文書の研究」吉川弘文館
- 平川 南 1994 「よみがえる古代文書」岩波書店
- 町田洋・新井房夫 1992 「火山灰アトラス」東京大学出版会
- 町田洋・新井房夫 2003 「新編 火山灰アトラス」東京大学出版会
- 町田洋・ほか1981「日本海を渡ってきたテフラ」「科学」51-9 pp.562-569
- 山川一郎・庄子真雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」「多賀城跡」昭和57年度発掘調査概報
宮城県多賀城跡調査研究所年報1979 pp.97-102
- 山中敏史 2004a 「國府の空間構成」「古代の官衙遺跡」II 遺物、遺跡編 奈良文化財研究所 pp.128-129
- 山中敏史 2004b 「曹司」「古代の官衙遺跡」II 遺物、遺跡編 奈良文化財研究所 pp.136-143

調査成果の普及と関連活動

1. 主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当	主催
2009. 4. 3	郡山遺跡展示室見学	森田	二軒茶屋歩く会
4. 18	郡山遺跡展示室見学	長島	TSSハイキング愛好会
6. 10	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	齋藤	多賀城観光ボランティアガイド
6. 18	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	齋藤	仙台を見る・知る・学ぶ会
6. 20~21	大野田展	整備活用係	文化財課
7. 7	郡山遺跡展示室見学	齋藤	仙台市立東長町小学校
9. 12	J R小さな旅	整備活用係	J R長町駅
9. 14	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	長島	明治青年大学里山自然観察会
9. 29	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	長島・齋藤	横浜歴史博物館（古代史料を読む会）
10. 1	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	長島	諒訪町内会
11. 6	郡山遺跡展示室・ビロティ見学	齋藤	ディスカバー太白
11. 21	郡山遺跡ビロティ見学	吉岡・長島	仙台市立郡山中学校保護者会
4. 8~ (毎月 8日)	薬師堂手づくり市	整備活用係	薬師堂手づくり市実行委員会

2. 調査指導委員会の開催

大野田官衙遺跡調査現地指導 平成21年6月3日~4日

平成21年度 第1回 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成21年8月11日 仙台市役所北庁舎B棟1階会議室

- 平成21年度前半期の調査成果について

平成21年度 第2回 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会

平成22年3月5日 仙台市役所北庁舎2階会議室

- 平成21年度の調査成果について
- 平成22年度の調査計画について

3. 展示室の利用者

平成21年4月~平成22年3月 419名



展示室見学風景



薬師堂手づくり市



大野田展



大野田展

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき								
書名	郡山遺跡30								
副書名	郡山遺跡・大野田官衙遺跡 平成21年度発掘調査概報								
巻次	30								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第373集								
編著者名	長島栄一、森田賢司、森田義史、齊藤義彦、廣瀬真理子、千葉恭彦								
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）								
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894								
発行年月日	2010年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
郡山遺跡	宮城県仙台市太白区郡山	4100	1003	38° 12' 58"	140° 53' 41"	194次	2009・4・20 ~4・28	32.4m ²	個人住宅建築
						195次	2009・6・22 ~6・24	20m ²	
						197次	2009・11・30	18m ²	
						198次	2009・12・2 ~12・11	30m ²	
						199次	2009・12・14 ~12・18	70m ²	
大野田官衙遺跡	宮城県仙台市太白区大野田	4100	1361	38° 12' 47"	140° 52' 45"	2009・4・20 ~	689m ²	重要遺跡の範囲確認調査ほか	
						2009・12・9			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
郡山遺跡	官衙跡	飛鳥～平安	・柱列・溝跡 ・竪穴住居跡 ・掘立柱建物跡 ・近世墓	・土師器 ・須恵器 ・瓦 ・キセル ・木製品 ・陶器		・II期官衙大溝北辺			
大野田官衙遺跡	官衙跡	奈良～平安	・溝跡	・土師器 ・須恵器 ・弥生土器		・区画溝西辺			
要約	<p>郡山遺跡では第194次調査において、南北方向に縱走する溝跡や竪穴住居跡が検出され、南方官衙地区東部における遺構の様相の一端が明らかにされた。第195次調査では、I期官衙に隣接する可能性が考えられる柱列が検出された。第198次調査では、掘立柱建物跡の柱穴1基や溝跡、近世墓が検出された。第199次調査では、方圓4町II期官衙の大溝北辺が検出された。</p> <p>大野田官衙遺跡は、これまでの調査で検出された掘立柱建物跡が規則的に配置されること、周囲に溝跡がめぐることから古代の官衙跡と考えられている。また、遺跡の位置関係などから、郡山遺跡との関連も想定されている遺跡である。今年度の調査では、g区において官衙の区画溝の西辺、南西コーナー部を検出したことにより、官衙の範囲が確定した。一方、官衙内部の調査では新たに掘立柱建物跡は発見されず、官衙の構造、性格を明らかにするため、今後、さらなる調査が必要である。</p>								

仙台市文化財調査報告書第373集
郡山遺跡 30

平成21年度発掘調査概報
— 郡山遺跡・大野田官衙遺跡 —

2010年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市青葉区西町三丁目7-1
文化財課 TEL 022 (214) 8893

印刷 モリタ印刷株式会社
仙台市太白区郡山八丁目20-30
TEL 022 (246) 0105

